

関西外国語大学大学院外国語研究科
博士学位申請論文 平成 30 年度

類別詞とカテゴリー化のメカニズムに関する
認知言語学的研究
一日中の類別詞を中心に一

関西外国語大学大学院
外国語学研究科 言語文化専攻

915302
邱 馨儀

目次

第1章	序論	4
1	研究目的と背景.....	4
2	先行研究とその問題点.....	5
2.1	類別詞の通時的研究.....	5
2.2	類別詞の共時的研究.....	7
2.3	類別詞の認知的研究.....	8
2.4	類別詞の基本的機能.....	11
2.4.1	類別詞の単位としての機能.....	11
2.4.2	カテゴリー化の機能.....	13
3	研究方法.....	14
第2章	理論的枠組み	17
2.1	認知言語学の意味論.....	17
2.1.1	視点の投影と言葉の意味.....	18
2.1.2	言葉の概念の身体的基盤.....	19
2.1.3	言葉の意味と百科事典的知識.....	20
2.2	認知言語学のカテゴリー理論.....	22
2.2.1	スキーマ、プロトタイプと拡張事例.....	22
2.2.2	類別詞と多義性のネットワーク.....	24
2.2.3	認知のドメインと概念マトリックス.....	26
第3章	類別詞の認定基準とカテゴリー化	29
3.1	日本語における「頭」のカテゴリー化.....	30
3.1.1	プロトタイプと非プロトタイプ.....	32
3.1.2	大きさによる下位分類.....	33
3.1.3	大きさに関する認知.....	35
3.2	分類基準の主観性.....	39
3.2.1	形と大きさとの関係.....	39
3.2.2	「頭」の認知プロセス.....	42
3.2.3	「頭」の分類基準.....	45
3.2.3.1	静的な基準.....	46

3.2.3.2	動的な基準.....	47
3.3	「頭」のカテゴリーの拡張.....	49
3.3.1	「犬」に対する拡張用法.....	49
3.3.1.1	一般のペットの事例.....	52
3.3.1.2	社会的な役割担う犬.....	52
3.3.1.3	イメージスキーマによる拡張.....	54
3.3.2	特定の「昆虫」の拡張用法.....	59
3.3.3	まとめ.....	64
第4章	類別詞の形成と機能	66
4.1	類別詞と認知主体の視点の反映.....	67
4.1.1	「頭」の基本概念.....	70
4.1.2	部分と全体との指示関係.....	71
4.1.3	現代日本語における拡張事例.....	74
4.1.3.1	類別詞と文脈依存性.....	74
4.1.3.2	背景知識による拡張.....	77
4.1.4	「頭」の用法における歴史的変遷.....	81
4.2	類別詞が喚起するイメージ.....	87
4.2.1	「本」のイメージと多義性.....	88
4.2.2	中国語の類別詞「條」の特殊用法.....	91
4.2.2.1	対象生物の体型.....	91
4.2.2.2	それ以外の対象生物.....	92
4.2.2.3	まとめ.....	93
4.2.3	非形状類別詞の「頭」.....	93
4.2.3.1	日中類別詞の対応関係.....	93
4.2.3.2	まとめ.....	96
4.2.4	まとめ.....	96
第5章	メタファーと類別詞の関係	99
5.1	類別詞とイメージスキーマ.....	99
5.1.1	容器のイメージスキーマ.....	99
5.1.2	容器の類別詞.....	105

5.2	メタファーに関わる類別詞.....	108
5.2.1	容器のメタファー.....	109
5.2.2	容器に関わる類別詞.....	112
5.2.3	量に関する曖昧性.....	116
5.2.3.1	数えられる対象物.....	119
5.2.3.2	物質名詞と可算名詞の捉え方.....	123
5.2.4	まとめ.....	130
第6章	結語と展望.....	132
参考文献	141

第1章 序論

1 研究目的と背景

多様な類別詞を持つ日中両言語には、モノを数える際、類別詞が数詞と共起する制約が存在する。類別詞の類別は、数えられる対象のある際立つ特徴を抽出しカテゴリー化する。また類別詞には、計数する機能だけではなく、対象を概念化する機能が認められる。類別詞は、日本語では助数詞と呼ばれるのに対し、中国語では量詞と呼ばれる。以下では、両者を統一して「類別詞」と呼ぶことにする。

世界の言語は約六千種と言われるが、その中に類別詞を持つ言語は決して少なくない。日中の両言語以外に、類別詞を持つ言語としては、タイ語、ベトナム語、ビルマ語、オーストラリア北部の原住民諸語、パプア諸語などが挙げられる¹。日中両言語には、百を超える類別詞が存在し、また同一の対象に対し複数の類別詞が共起する場合もある。すなわち、一つの対象に複数の類別詞が使われる場合もある。例えば日本語では、「馬一頭」、「馬一匹」のように、二通りの言い方をすることができる。このように、ある対象に対して複数の類別詞が生じるのは自然であるが、ヂルバル語(Dyirbal)のように、四つのクラスで世界のあらゆる対象を範疇化する言語も存在する²。

本研究では、認知言語学の分析に基づいて、類別詞の生起、判断基準、類別詞の使用と認知主体の視点との関係性を明らかにしていく。また、従来の類別詞研究では例外とされてきた周辺的な言語事例も取り上げ、この種の特殊事例の使われる認知的な動機付けも考察する。本研究では、以上の考察を通して、日常言語の類別詞の体系とそのメカニズムの諸相を明らかにしていく。

¹ 水口 (2004 : 3-22) 参照。

² レイコフ (1987 : 98-104) によると、ヂルバル語では名詞を用いる際に Bayi, Balan, Balam と Bala の四語のどれかと共起する。

2 先行研究とその問題点

以下では、類別詞の代表的な先行研究を概観し、その問題点を指摘する。先行研究の類別詞の研究には、通時的研究と共時的研究の二つの研究が存在する。以下では、これまでのこの二つの研究を批判的に検討し、認知言語学の枠組みに基づく、類別詞の新たな研究の方向を探っていく。

2.1 類別詞の通時的研究

三保（2006、2017：14-22）は、日本語類別詞の源流を探るため、これまでに出土した木簡などの記録に基づいて類別詞が導入された時期を明らかにしている。三保の考察によれば、日本語に類別詞が導入されたのは律令国家という制度を樹立した後（約七世紀の半ば）とされている。この制度の施行により公文書の書き方が見直しされ、特に正確に記載するため、品目の後に必ず単位（類別詞）がくるようになっている。以上の理由以外に、かつて日本語には、このような数詞に随伴し対象を類別する表現方法がなかったのかもしれないと三保が指摘している。

現代日本語で使用される類別詞の大半は、中国から輸入したものと考えられる。その使い方と数える範疇は、時代により大きく変化している。例えば、うさぎを「耳」で数える用法は、現代日本語ではほとんど使われなくなっている³。類似した例としては猪（しし）－「牙」、鹿や野猪（イノシシ）－「蹄」などが挙げられる。このように、三保（2006）は、古代日本語から現代に至るまで類別詞の使用範疇の変遷について詳しく考察している。その結果、類別詞には日本文化史上の諸問題、時代の思潮や価値観、地域的状况などが反映されている事実を明らかにしている。

橋本（2008、2009、2014a、2014b、2017）は、通時的な視点から日中両言語の類別詞の相違を考察している。先述したように、日本語類別詞は、歴史的には主に中国語から借用

³ 三保（2006：184-188）によると、近代の書物よりうさぎを「耳」で数える用法が確認され、この際「一耳」とは二匹のうさぎを指すことになる。このような数え方はおそらくうさぎの耳という特徴から来た。

されている。この種の借用は言語発展にとっては決して珍しくないが、取り入れた類別詞が日本語話者の解釈によって本来の使用からずれ、新たな意味が生まれたと考えられる。橋本は、その相違を明らかにするために、まず日中類別詞が文法上の使い方の違いについて考察している。その結果は、表1に示される。

	現代日本語	現代中国語
計量／計数する際に類別詞の付与	○	○
数量詞（数詞＋類別詞）の置く位置 ⁴	3	1
類別詞が数詞を伴わず名詞として現れる ⁵	△	○
数量詞が文中の出現頻度 ⁶	○	◎
数詞の省略 ⁷	×	○
指示詞と直接結び付く ⁸	×	○

表1 日中両言語における類別詞の用法に関する比較（橋本 2014a 参照）

⁴ 森田（2006：170-174）によると、日本語の数量詞の置かれる位置は3つのパターンがある。

- ① 三匹の子豚がいる。
- ② 子豚が三匹いる。
- ③ 子豚三匹がいる。

その一方、中国語の場合では、数量詞の定位置はただ一つ、名詞の直前である。例えば：有三隻小豬（三匹の子豚がいる）。

⁵ 中国語の量詞は本来名詞、あるいは動詞から派生したものである。したがって、単語として、類別詞の役割はもちろん、名詞と動詞の役割も兼ねる。飯田（1999a）によると、日本語の類別詞でも、一部が独立して用いられることがある。例えば：「世帯」、「株」など。

⁶ 「中国語の量詞は日本語の助数詞の用法から見れば現れる必要のない、言い換えれば数量に言及する必要のないところにも用いられる。」橋本（2014a：2）

- (1) 桌子上有一本書。（机の上に本がある）。
- (2) 他送給朋友一件禮物。（彼は友達にプレゼントをあげた）。

⁷ 「事物が目的語の位置にあつて、その数値が強調されるのでなければ“一”は省略することができる」（呂 1944：166-175）またこの場合、「省略」されているはずの“一”を挿入することができない場合もあると橋本（2014a：3）は指摘している。以下は橋本の用例である。

- (1) a. 你們握個手吧。（あなたたち握手しなさいよ）。
- b. *你們握一個手吧。
- (2) a. 當科長的還要向科員討個笑臉。（課長といっても部下の機嫌をとえあなきやいけな）。
- b. *當科長的還要向科員討一個笑臉。

⁸ 「日本語の助数詞は、もっぱら数詞と組み合わせるが、中国語の量詞は数詞を伴わないことも稀ではなく、指示詞と直接結びつく（“我要這只 [私はこれが欲しい]”）ことも、日本語の助数詞とは異なる点である。」（橋本 2014a：2）

橋本（2017）は、このような相違が存在するのは、同等の文法カテゴリーといえども、通時的状況と共時的状況が相違するからに他ならないと述べている。中国語の類別詞の芽生えは殷の時代の甲骨文⁹で既に確認され、魏晉南北朝時代に類別詞の用法が定着したと考えられる。歴史的には、類別詞は名詞から発展し、名詞の本来の意味特徴を一部受け継ぎ形成されたと考えられる。例えば、「小枝」の意味を持つ「条」は、類別詞として用いる際に、枝のイメージから「細長いモノ」の意味と「条項、規定」の意味に拡張して使われるようになっている。このような通時的な考察により、類別詞本来の意味と使用の変化の一面を明らかにしていくことが可能となる。

2.2 類別詞の共時的研究

共時的な視点からの日中の類別詞の研究は、通時的な研究よりも広く行われている。例えば、この方面の代表的な研究としては、大河内（1985）、趙（2011）、森田（2006）などが挙げられる。これらの研究は、主に共時的な観点から、日中類別詞の個別性と特異性の研究に主眼をおいている。また、記述的に類別詞を分析する代表的な研究としては、飯田（1999a、1999b、2005a、2005b、2013、2017）、飯倉（2012）、武（1995）、頼（2012）などが挙げられる。以下では、これらの研究の中でも、特に日本語類別詞の具体事例を体系的に分析している飯田の研究を検討する。

飯田（1999）は、1997年10月から1998年9月まで、日本の主要新聞四社の紙面の記事と広告をインターネット上で公開しているデータを中心に、類別詞の広範な用例を採取している。また、調査の結果と実際の言語使用との間にギャップを埋めるため、日本語母語話者のインフォーマント調査とアンケート調査を行っている。その結果、常用の日本語類別詞を、以下のように分類している¹⁰。

⁹ 羌百羌（羌族百人）のように、初期の中国語では、指示対象を用いて数字の後に繰り返す形式が存在する。

¹⁰ 「数詞に直接付く広義の助数詞は約360種あるが、単位を示すもの（約40種）、単位を示してはいないが数詞と独立して用いることができるもの（約220種）を除いた、単位を示しておらず独立して用いることのできないもの（約100種）を狭義の助数詞…」（飯田 ibid:7）

- 数えられる物の形状に基づく助数詞

1 次元的形状 「本」

2 次元的形状 「枚」

3 次元的形状 「個」

- 数えられる物の性質に基づく助数詞

有生性 「人」「匹」「頭」「羽」

機能性 「台」「機」「艘」「艇」

行為・事象を数える 「回」「度」「点」「例」「件」

書物 書簡を数える 「冊」「巻」「部」「通」

- その他の主要助数詞

「発」「束」「把」「面」「体」「片」「切れ」「基」「軒」「戸」「棟」

(飯田 : ibid.)

飯田の分類は、主に物理世界の対象の特徴に基づく記述的な分析である。一見したところ、この類別詞の分類は非常に整然と分けられるように見えるが、この分類には多くの例外が省かれ反例も存在する。例えば、バット、蠟燭、鉛筆などのように、「本」の категорияに属するメンバーのほとんどは一次元的なモノではなく、1次元の形状に分類する必要がある。また、「本」の categoria 化のプロセスや、この種の類別詞の分類基準の問題は具体的に考察されていない。

以上のように、飯田の研究は、広範な具体事例を提示し、言語資料として非常に価値のあるデータを提供している。しかし、類別詞の体系的な分類基準の客観性に関しては問題が残る。

2.3 類別詞の認知的研究

近年では、認知的な視点に基づく類別詞の研究が注目されている。その代表例としては、レイコフ (1987)、西光 (2004)、水口 (2004)、松本 (1991、2003)、濱野 (2006、2011)

などが挙げられる。以下では、これらの代表的な研究を簡略的に検討する。

認知的な視点に基づく研究の中でも、特にレイコフ（1987）の類別詞の研究は注目に値する。レイコフは、特に日本語の類別詞の代表例である「本」の拡張と多義性の問題について重要な分析を試みている。レイコフ（1987）は、日常言語を特徴づけるカテゴリー化のメカニズムに注目し、「本」が細長いモノだけではなく抽象的なモノにも用いられる拡張事例の動機づけを明らかにしている。類別詞のカテゴリー化には、中心性 (Centrality)¹¹、連鎖 (Chaining)¹²、理想モデル (Idealized Models)¹³、動機付け (Motivation)¹⁴などの一般原理が密接に関わっている。この中でも、特に動機づけの原理は、類別詞のプロトタイプから拡張事例に広げていく際に重要な役割を担う。例えば、電話の通話を「本」で数える場合には、少なくとも以下の動機付けが考えられる。一つは受話器の形状と細くて長いモノのイメージを喚起する「本」との類似性、もう一つは通話の機能に関わる（細長い）電話線の存在である。松本（1991：82-106、2003）は、レイコフ (ibid.) の分析を受け、プロトタイプの理論を用いて類別詞を分析している。考察対象としては、生き物（人を含む）に関わる類別詞から、形状類別詞のような非有生性の類別詞までを広範に分析している。

日常言語においてよく用いられる日本語の形状類別詞としては、基本的に「個」、「本」、「枚」、「粒」、「筋」と「面」の六つが存在する。以下の図1に示されるように、類別詞の「粒」、「本」、「枚」、「個」は、それぞれ(1)、(2)、(3)、(4)に対応している (cf. 松本：ibid.)。ただし、図2のように空間的に独立しない場合、その適用には差がある¹⁵。また、これらの類別詞の中でも、「本」の使用には特に豊かな比喩的用法が認められる。

11 カテゴリーの基本的成員とされる対象は、プロトタイプの中心的存在と見なされる。

12 複合的なカテゴリーは連鎖により構成されている。

13 「言語表現を適切に理解し使用するためには、その表現を背後で支える様々な知識、例えば社会制度や文化的な慣習に関する知識、時代背景的な知識などが重要である…こうした背景知識を理想化してことばの適切な使用と意味を捉えようとするモデルである」(辻 2013:368)

14 「新しい形式を既存の知識ネットワークに適合させようとするとき、最もふさわしい推論を可能にする思考形態とも言える」(辻 ibid:244-245)

15 「図2の1の場合はツブは使えず、2の場合はホンの他に-スジも使われ、3の場合は主に-メンが使われて-マイは少数のモノに限られ、4の場合には一部の話者を除いて-コは使えない、という具合である」(松本：ibid.)

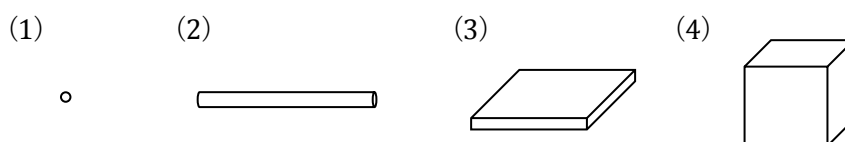


図1 (松本 1991 : 92)

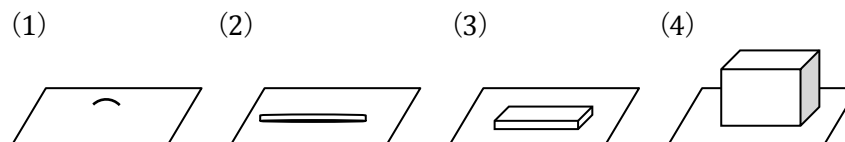


図2 (松本 : ibid.)

濱野 (2006 : 77-93、2011) は、「本」の使用に関し、「細長い」のようなイメージスキーマの特徴づけが一般化的すぎるため意味の過剰な一般化が防げず、この特徴だけに注目すると、類別詞の選択と多様性が明らかにできないと述べている。濱野はこの問題点を踏まえて、コーパスを用いる統計的分析により「本」の体系を再分析している。濱野の考察は少なくとも以下の二点を明らかにしている。第一に、類別詞のカテゴリー化は、われわれの視覚をはじめとする身体経験に基づいている。なぜならば、われわれの対象に対する認識は、主にこの種の身体能力によるからである。また、目に見えない抽象的なモノを数える際にも、具象化したモノの身体経験による類別詞を使っている。第二に、多くの類別詞の拡張事例は状況や場面に依存し、状況により活性化する類別詞のドメインが異なるという点である。

以上の先行研究の考察から、類別詞に関しては、次の線に沿った研究が必要となる。

- I. 従来の研究では、類別詞の拡張事例は体系的に研究されていない。また類別詞の使用は、客観的な判断基準だけを前提としている。この種の問題を解決するため、本研究は、認知的な視点から類別詞を考察し、類別詞の使用の判断基準がいかに主観的であるかを示す。また、基本的な類別詞の体系だけでなく、類別詞の拡張事例の体系も明らかにしていく。

II. 日中の言語では、可算名詞と質量名詞のいずれのカテゴリーにも類別詞の使用が見られるが、基本的に英語にはこの種の類別詞の使用は認められない。日中の言語には、このようなモノの数え方に関する多様な用法が存在するが、認知的な視点から見たこの種の類別詞の体系的な分析はなされていない。本研究では、以上の類別詞も考察の対象とする。

次節では、まず類別詞の基本的機能について考察する。

2.4 類別詞の基本的機能

類別詞の重要な機能の一つとして、単位の機能とカテゴリー化の機能が挙げられる。従来の類別詞の研究では、この単位に関わる類別詞の記述的な分析はなされているが、認知的な視点から見た体系的な研究はなされていない。

2.4.1 類別詞の単位としての機能

世界中に類別詞を持つ言語は予想以上に多く存在し、またその種類も異なる¹⁶。日中両言語の場合、単位に関わる類別詞は「数量類別詞」に分類されている。この種の類別詞は数量表現と共起し、基本的に単位の機能を示す。ここでは、モノを数える際の類別詞に、どのような特徴が見られるかを考察する。

基本的に日本語の類別詞は、可算名詞と質量名詞を区別しない。一般の国際的な単位の基準とは異なり、類別詞が示す数量は多分に主観的である。また場合によっては、指示対象の数量と表現が一致しない慣習的な数え方も存在する。

次の例をみてみよう。

- (1) 林檎丸一個を使ったデザート

¹⁶ 水口（2004：4-10）は、類別詞を、名詞類、名詞類別詞、数量類別詞、所有類別詞・指示類別詞と動詞類別詞の五つに分類している。

(2) コーヒー二回お代わりした

(3) 馬二百蹄 (=馬五十頭)

(1) ~ (3) の例から明らかなように、類別詞の選択と数量の情報量は深く関係している。(1) は、そのデザートの新しさを強調するため、林檎を「つ」ではなく「個」で数えている。この種の類別詞の使用によって、数量に関わるより具象化したイメージを伝えることができる。(2) の場合には、一体どれくらいの量のコーヒーを飲んだかを知ることができないが、飲んだ回数を伝えている。(3) のような慣習的な数え方は紛らわしく、現代では使わなくなっている。しかし、このような慣習的な数え方がすべて消えているわけでもない。例えば、「対」、「足」は、対象を二つ揃えて一つとして数える機能を担うが、現代の日本語でもこの種の用法は認められる。

水口 (2004:64) は、類別詞が共起しない場合 (いわゆる裸名詞の場合) は、数に関して中立であり、その指示名詞は単数にも複数にも使われると述べている。水口は、数量性の観点から、類別詞を以下の三つに分類している。

(4) 日本語の類別詞の三種類

- a. 個別類別詞 : 人 (り・ひと)、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など
- b. 集合類別詞 : 対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など
- c. 計量類別詞 : 杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、トン、など

(水口 : ibid.)

この分類は、「最小単位」という概念に基づいている。この最小単位は、言語主体の主観的な認知によるものであり、状況によりその判断が揺れることも考えられる。確かに、(4) の分類は、類別詞の数量表現の差異をある程度示しているが、なぜこのような曖昧性が存在するかは明らかにしていない。

2.4.2 カテゴリー化の機能

日本語の類別詞のカテゴリー化に関する代表的な研究としては、レイコフ（1987）、松本（1991）、飯田（1999）、水口（2004）などが挙げられる。日本語の類別詞の体系の中に最も重要な特徴は〈有生〉と〈無生〉のカテゴリーに基づく区別である¹⁷。この分類では、生物と非生物に関わる類別詞が重なることがなく、両者の間には明確な境界線が引かれている（図3参照）。

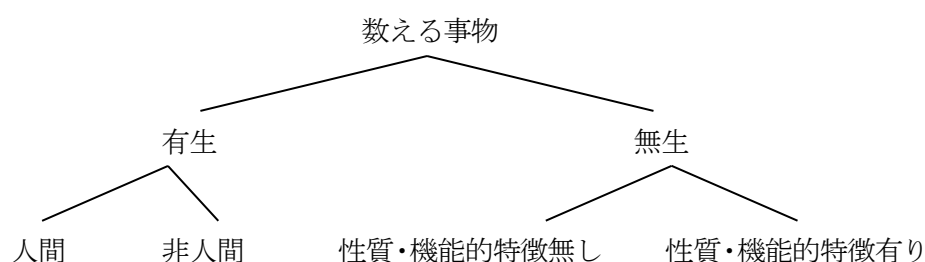


図3 （飯田 1999:328-331 による、一部省略）

類別詞のカテゴリー化を考察することより、われわれがどのように世界を解釈し、理解しているかを明らかにすることができる。本研究では、まず認知言語学の観点からカテゴリーのメカリズムに注目し、類別詞の使用に関し、カテゴリー化がどのような役割を担うかを考察する。

ラネカー（2011/山梨（監訳）：119）は、カテゴリーについて以下のように説明している。

…カテゴリー (category) は、ある目的を持って異なる要素を同一のものとして扱う際に用いられる用語である。規則やパターンには「同一のもの」と判断される構造が繰り返し生じるので、カテゴリー化をしなければ規則やパターンを認識できない。言語構造のあらゆる面で、カテゴリー化は行われる。（ラネカー：ibid.）

¹⁷ 中国語の場合は、一部の反例が見られる。例えば、形状類別詞の「条」は犬、牛などの動物を数えることができる。

また、レイコフ（1987：5）は、「われわれの思考、知覚、行動、言語活動によって、カテゴリー化ほど基本的なものはない」というようにカテゴリー化の重要性を強調している。カテゴリー化の能力は、全ての生き物が備える基本能力であり、生物が生き延びるために世界を分類し、日常生活で得た経験を蓄積し、記憶し、概念化するプロセスである。日常言語の類別詞の分類は、この種のカテゴリー化の認識に基づいている。

本研究では、人間の基本的な認知能力の中核を成すこのカテゴリー化の認知プロセスに注目し、類別詞の使用のメカニズムの体系的な分析を試みる。また本研究では、類別詞のカテゴリー化が、どのように言語と文化の問題に関係しているかについても考察していく。

3 研究方法

本研究は、主に次の三つの研究方法を採用する。

I. 認知言語学的考察

類別詞は、言語主体が主観的に対象のある側面に焦点を当て、カテゴリー化するシステムである。したがって、話者の視点が変わると対象の異なる側面が捉えられ、その結果、異なるカテゴリー化に基づく類別詞が生成されることになる。本研究では、認知言語学の分析に基づいて、特に類別詞の生起、判断基準、類別詞の使用と言語主体の視点との関係性を解明していく。また、従来の類別詞の研究では例外とされてきた周辺的な類別詞の使用に関する言語事例を取り上げ、その周辺的な使用の動機付けを考察していく。

II. ケーススタディーによる研究

類別詞の周辺事例（ないしは拡張事例）の使用は、主に文脈や場面に依存する傾向がある。本研究では、周辺事例と文脈との関係を考察するために、マスメディア、新聞記事、等の広範な言語データに基づくケーススタディーを試みる。言語の使用（ないしは運用）の観点からみた場合、類別詞の使用には様々な個人差が認められる。本研究では、この問題を考慮し、特に信憑性のあるマスメディアで公表された新聞記事、等のデータに基づき、類別詞の使用に際しての個人差と揺らぎに関わる言語現象の分析を試みる。

III. 日中対照研究

類別詞は言語表現において、鏡のように我々の生活の様々な側面を反映する言語システムと言っても過言ではない。日々の暮らしの中で、道具や器具がどのように使用され、どのようにモノが計量されて販売されるか、といった問題も、類別詞の使用の具体的な考察を通して理解していくことが可能である。この点で類別詞は、われわれの生活環境、教育背景、文化、慣習的な生活に深く関わっていると見える。本研究は、日中両言語における類別詞の体系を比較していくことより、個々の言語を特徴づける社会・文化的な要因も考察していく。

第2章 理論的枠組み

日常言語のカテゴリー化を反映する類別詞は、認知主体の認知プロセスや文脈、場面に
関わる要因に左右される。また、類別詞の多様性により、その使用には個人差が見られる。
一つの対象に対して使われる類別詞が複数ある場合、どの類別詞が優先的に使われるかの
決まりはない。類別詞は、言語主体の認知プロセス、背景知識、社会・文化の慣習、文脈
や場面などさまざまな要因によって選択され、きわめて柔軟に、また臨機応変に使われる。
本研究では、認知言語学の理論的枠組みに基づいて、日中の類別詞のカテゴリー化のメカ
リズムの解明を試みる。本章では、日中の類別詞の具体的な考察に入る前に、認知言語学
の理論的枠組みの基本的な考え方を概観する。特に以下の考察では、日常言語の類別詞の
カテゴリー化のメカニズムの解明に重要な役割を担う、認知言語学の意味論の基本的な枠
組みを概観する。

2.1. 認知言語学の意味論

認知言語学の意味論は、古典的な客観主義の意味論とは異なり、言語のカテゴリー化は、
人間の経験的な基盤に基づく主観的なカテゴリー化に基づくという視点に立脚している。
また、この種のカテゴリー化は、基本的に認知主体の五感、体験、運動感覚をはじめとす
るわれわれの身体経験に基づき形成されるという立場に立っている¹。認知言語学の言語
観は、従来の客観主義的な言語観とは異なり、人間と環境の相互作用に関わる経験的な側
面を重視する言語観である。本研究では、この認知言語学の言語観を背景に、類別詞のカ
テゴリー化に関わる言語現象の諸相を考察する。以下では、認知的なアプローチから類別
詞を分析するために不可欠な基本概念を概観する。

¹ 山梨 (2004 : 119-120) は、外部世界と関わる主体の基本的な経験ドメインとして、空間認知、体感、五感と運動感覚、等のドメインを区別している。

2.1.1. 視点の投影と言葉の意味

認知言語学の意味論（以下、認知意味論）は、言語の意味は、外部世界を解釈する言語主体の視点を反映するという立場に立っている。換言するならば、認知意味論は、言葉の意味は、言語主体の視点に基づく概念化との関連で相対的に規定される、という立場に立っている。この認知意味論の基本的な考え方を、ラネカー（2011/山梨（監訳）：55-57）は、以下の例を挙げて説明している。

- (1) The glass with water in it.
- (2) The water in the glass.
- (3) The glass is half-full.
- (4) The glass is half-empty.

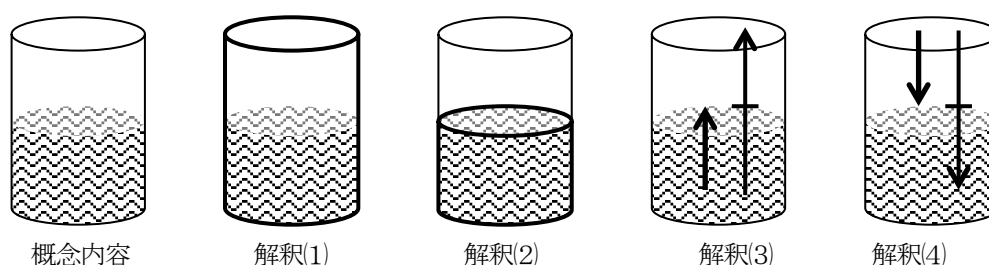


図1（ラネカー：ibid.）

(1)～(4)の例は、水が容器の容量の半分を占めている、という共事事態を意味する。この共事事態に対しては、異なる視点を反映する四つの解釈が可能であり、それぞれが異なる言語表現に対応している。(上の(1)～(4)の例は、それぞれ図1の異なる視点による解釈に対応している)。

(1)～(4)のように、各言語表現の背後には、主体の投げかける視点に対応する解釈が存在する。解釈(1)は容器、解釈(2)は容器の中の水を、そして解釈(3)と(4)はそれぞれ容器の中の容量に視点を投影し、その部分を相対的に焦点化している。(3)と(4)の

場合、前者は液体が占めている部分を焦点化し、後者は容器内の空いている空間を焦点化している。図1は、太線により、共通事態のどの部分を主体が焦点化しているかを示している。

以上の考察から明らかなように、外部世界の解釈は言語主体の主観的な捉え方を反映する視点との関連で相対的に決められる。また、言語表現の意味も、共通の事態に対する主体の視点の投影の仕方によって相対的に決められる。認知意味論は、以上の言語観に基づいて、日常言語の形式と意味の関係とこの関係を反映するカテゴリー化のメカニズムの諸相を分析していく。

この認知意味論の枠組みは、日常言語の類別詞のカテゴリー化の分析にも重要な役割を担う。なぜならば、類別詞による対象世界のカテゴリー化は、言語主体が、対象世界を解釈し、概念化する認知プロセスを具体的に反映しているからである。換言するならば、類別詞による対象世界のカテゴリー化は、問題となる対象のどの部分に焦点化し、どの基準により認識しどのように分類するか、といった主体の認知プロセスを反映しているからである。

2.1.2. 言葉の概念の身体的基盤

認知意味論は、言葉の意味は、主体と環境とのインターアクションに根ざす身体的な経験から創発するという視点に立っている。言語の背後には主体が存在する。主体は、発話者であり、また外部世界を認知し概念化する存在である。主体は、身体を介して周りの事物を認識し概念化するが、概念化の過程においては、身体化された認知能力が重要な役割を担っている。この種の認知能力の中でも特に注目されるのは、五感、体感、運動感覚などに関わる能力である。言語主体としての人間には、五感や身体を介して外部世界を知覚する能力、外部世界の対象を操作する能力、空間を移動する能力、等が備わっている。この種の能力は、言語主体の身体化された経験の重要な基盤を構成している。山梨(2000:120)は、この種の身体化された経験のドメインとして、表1のドメインを指摘している。

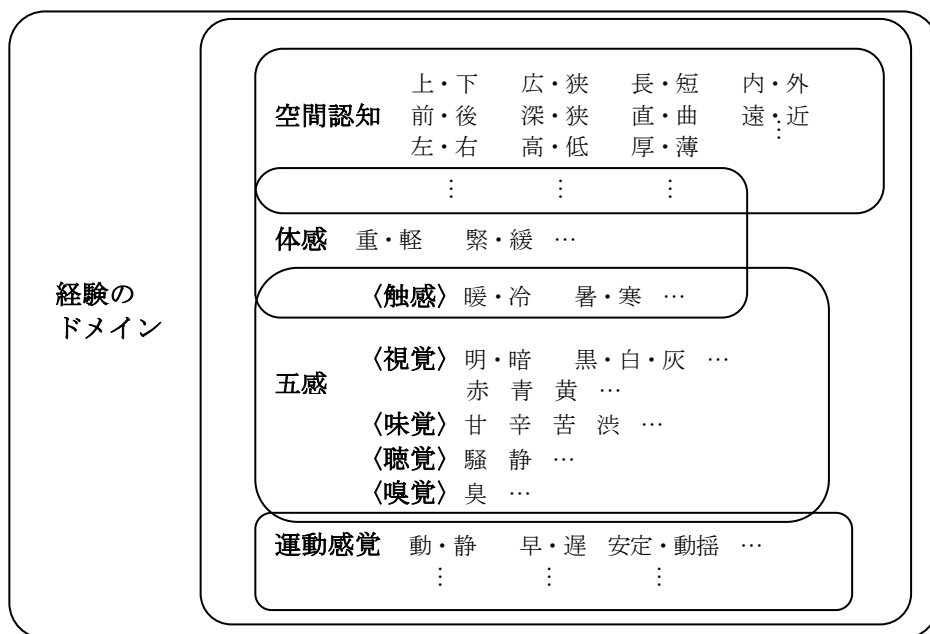


表1 (山梨: ibid.)

この種の経験のドメインは、日常言語の知覚、体感、空間認知、運動感覚、等を反映する言語表現の基本的な意味を特徴付けている。また、日常言語のカテゴリー化に関わる類別詞にも、この種の経験のドメインに関わる意味が反映されている。

2.1.3. 言葉の意味と百科事典的知識

日常言語の意味の創発のプロセスには、複雑で多様な概念化のプロセスが関わっている。前述したように、この種の概念化を可能とする能力には、知覚、運動、空間認知、等に関わる要因だけではなく、その背後には、日常生活や社会・文化的な慣習に関わる膨大な知識² (すなわち、百科事典的知識) が存在している。この種の知識に関わる要因は、日常言語の語彙の意味に、さまざまな形で反映されている。認知意味論は、言語分析に際し、この種の百科事典的知識を背景とする語彙の意味に注目する。

ラネカー (2011/山梨 (監訳): 50) は、日常言語の概念体系を特徴づける語彙の意味に関し、次のように説明している。

² ラネカー (2011/山梨 (監訳): 46) は、この種の知識として、一般的知識は物理学的知識、社会的知識、文化的知識、個人的知識、慣習的知識、文脈上の知識を挙げる。

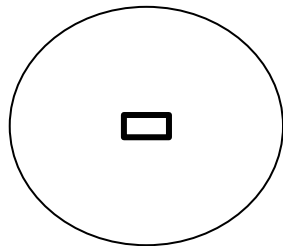
…語彙の意味は、完全に自由でもまた完全に固定されているわけでもない。なぜなら、言語表現がある特定の知識のまとまりを喚起し、その知識のまとまりにアクセスする特定の方法を規定するため、語彙の意味は完全に自由とは言えない。また、中心性（アクセスの優先性）は程度問題であり、分脈的な要因によって中心性が変化することを考えると、完全に固定されているとも言えない。

(ラネカー：ibid.)

従来の意味分析では、語彙に関わる一般的（ないしは背景的）な知識を捨象した辞書的意味だけが、分析の対象となっている。これに対し、認知言語学の意味論では、語彙の意味は、場面と分脈に密接に関わる百科事典的知識との関連で相対的に分析される。

以上の辞書的意味と百科事典的意味の違いは、図2に示される。

(a) 辞書的意味論



(b) 百科事典意味論

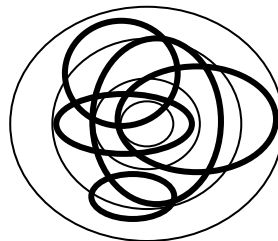


図2 (ラネカー：ibid.)

図2の丸は、話し手が持っている知識の総体を示す。図(2a)の中央の太線の四角形は、(場面、文脈から独立した)語彙の意味を構成する個々の項目のまとまりを示す。これに対し、図(2b)は、中心を共有する一連の円で構成され、知識の構成要素の中心性の程度差を示している。(この構成要素の中心性に関しては、程度さが認められる。)また、それぞれの太線で描かれた各々の楕円は、場面、文脈に応じて活性化される語彙の相対的な意味領域を示す。この後者の意味規定では、あらゆる場合において常に活性化される絶対的な語彙項目は存在しない。どの語彙項目が活性化されるかは、それぞれの状況によって相

対的に決められる。この図 2 (b) の百科事典的意味論は、言語の意味は、開かれた知識の総体へのアクセスのプロセスを介して活性化されることを示している。また、この意味論では、言語の意味は、特定の文化と慣習的な知識との関連で相対的に規定される。本研究の類別詞の分析には、この百科事典的意味論の分析を適用する。外部世界をカテゴリー化のプロセスを介して区別する類別詞は、この種の百科事典的な知識に基づいている。したがって、類別詞の概念体系を明らかにするためには、この種の背景知識を考察する必要がある。

2.2. 認知言語学のカテゴリー理論

類別詞には、言語主体のカテゴリー化のプロセスが、さまざまな形で反映されている。本節では、類別詞の分析の基本的な枠組みの一つとして、認知言語学のカテゴリー論に注目する。以下では、認知言語学のカテゴリー理論の基本概念を概要する。

2.2.1. スキーマ、プロトタイプと拡張事例

認知言語学のアプローチは、プロトタイプ理論のカテゴリー観に基づいている。プロトタイプ理論のカテゴリーの構成は、プロトタイプ (prototype)、スキーマ (schema) と拡張事例の三つの構成要素から成っている。

プロトタイプ理論によれば、カテゴリーに属する成員の帰属性は同等ではない。カテゴリーのメンバーは、典型的な成員 (プロトタイプ) と非典型的な成員 (非プロトタイプ) の二種類に分けられる。前者は、カテゴリーの標準的な事例と見なされ、カテゴリーの中心に位置づけられる。これに対し、後者は、前者の拡張事例と見なされ、カテゴリーの周辺に位置づけられる。この点で、カテゴリーにおける両者の分布関係は相対的である。また、プロトタイプ理論に基づくカテゴリーの成員の分布には、相対的な段階性が見られる。

日常言語の概念構造は、外部世界の認識、経験を基盤とするさまざまなイメージスキーマによって動機づけられているが、このイメージスキーマも、プロトタイプ理論の枠組み

において、典型例から非典型例事例（すなわち、拡張事例）へと相対的に規定される。

基本的に、イメージスキーマは、外部世界の対象に関わる具像化したイメージそのものではなく、各種の類似したイメージから抽象された心象図式である。日常言語に関わるイメージスキーマの典型例としては、〈上/下〉のスキーマ、〈前/後〉のスキーマ、〈部分/全体〉のスキーマ、〈容器〉のスキーマ、〈リンク〉のスキーマなどが挙げられる³。イメージスキーマの機能について、ラネカー（2011/山梨（監訳）：73）は、次のように説明している。

スキーマを抽出する能力は、認知能力の中でも基本的な能力であり、スキーマの抽出は、あらゆる経験領域においてたえず行われている。スキーマの抽出とは、様々な経験の中に本来備わっている何かを強化することであり、どのレベルにおいてもわれわれは何らかの共通性を見出すことができる。記述のために、スキーマが個別に示されることがあるとしても、スキーマは個々に存在しているのではなく、多様な具体事例に本来備わっていると考えるのが妥当である。本質的に、スキーマはカテゴリー化の機能を持つ。我々は、すでに経験した事柄から共通性を見出し、同様のゲシュタルトを有する新しい経験に以前得た共通性をあてはめていく。

（ラネカー：ibid.）

ラネカーは、スキーマは、言語主体の経験領域において構成されるイメージ構造の共通図式の種類であり、この種の図式を背景として、スキーマ、プロトタイプ、拡張事例に基づくカテゴリー化が可能になるとしている。ここでは、日常言語のカテゴリー化に関わる認知プロセスについて考察する。山梨（2000:181）は、ラネカー（ibid.）の規定に従い、スキーマ、プロトタイプと拡張事例の関係を図3のように規定している。

³ レイコフ（1987）を参照。

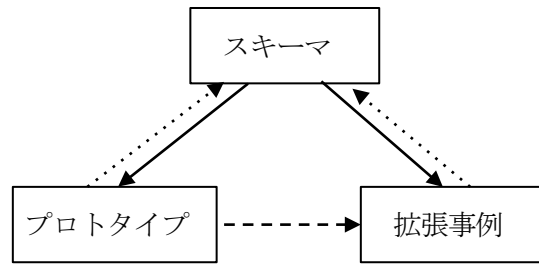


図3 (山梨:ibid.)

図3の実線の矢印は、スキーマから具体事例への認知プロセスを示し、破線の矢印は、プロトタイプとしての典型例から拡張事例への認知プロセスを示している。また、点線の矢印は、プロトタイプの典型例と拡張事例の共通性に基づいてスキーマを抽出する認知プロセスを示している。図3から明らかなように、プロトタイプと拡張事例は、いずれも上位レベルのスキーマから具現化された事例として位置づけられる。

この種のカテゴリー化に基づくプロトタイプと拡張事例の分布関係に関し、山梨 (ibid. : 241) は〈鳥〉のカテゴリーのネットワークの例を挙げて説明している。〈鳥〉のカテゴリーのメンバーの典型例としては、空を飛ぶことができるハト、カラス、スズメ、等が挙げられる。これに対し、ニワトリ、ペンギン、ダチョウのような鳥は、空を飛べない特殊な鳥として拡張事例のメンバーとして位置づけられる。ただし、この種の分類は絶対的ではなく、あくまで外部世界の存在を類別し、カテゴリー化していく認知主体の主観的認識に多分に左右されることに注意する必要がある。

2.2.2. 類別詞と多義性のネットワーク

前節で考察したカテゴリー化の能力は、日常言語の類別詞と語彙の多義性のネットワークの問題にも密接に関係している。換言するならば、カテゴリー化の能力は、プロトタイプの事例から拡張事例に渡る日常言語の語彙の多義性と類別詞の分布関係に密接に関係している。山梨 (2000 : 187) は、日常言語におけるこの種のカテゴリー化の認知能力の汎用性について、以下のように説明している。

この種の認知能力は、音韻・形態レベル、語彙レベル、統語レベルから意味レベルにわたる日常言語の多様な現象の発見と拡張を可能とする創造的な言語能力と運用能力の背景として重要な役割になっている。 (山梨 : ibid.)

山梨 (2000) は、カテゴリー化の能力に基づく類別詞のプロトタイプの用法と拡張的用法の典型例として、日本語の類別詞「枚」の多義性の分布関係を規定している。この分布関係は、以下の図に示される。

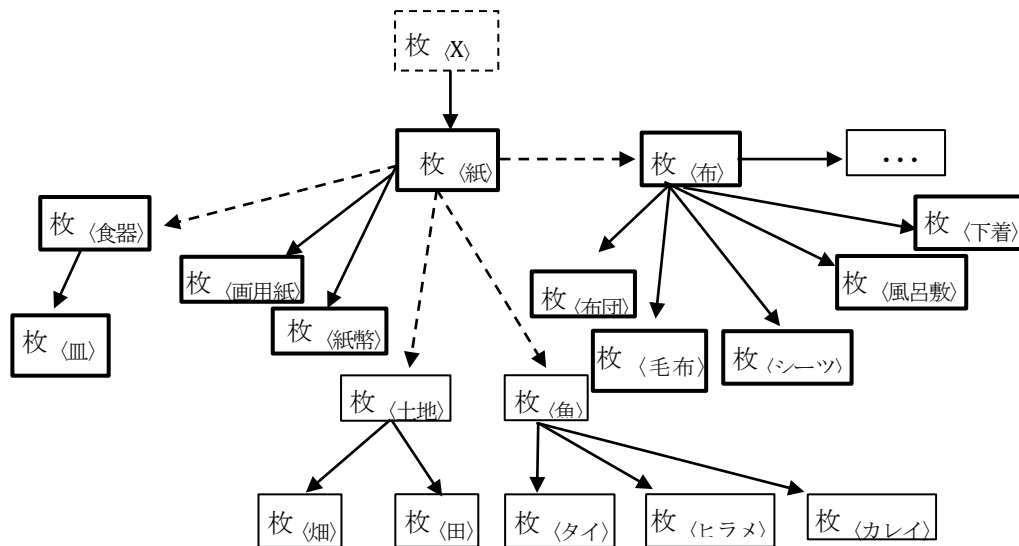


図4 (山梨 ibid.:242)

図4は、類別詞の「枚」のプロトタイプの用法と拡張的用法の分布関係の一部を示している。「枚 (X)」は、この類別詞の一般的なスキーマを示し、「枚」の基本的な意味はこのスキーマの中核特性によって規定される。類別詞「枚」は、典型例には、厚みがなくて、薄い広がりを持つ存在を数える場合に使われる。図4は、この基本的（ないしは典型的）な用法から拡張的な用法へと分布する類別詞「枚」のネットワークを示している。(図4の実線の矢印は〈事例化〉の関係を示し、破線の矢印は〈拡張〉の関係を示している)。これらの類別詞の用法において、すべての用法が同等の定着度を持つ訳ではない。(図4の各事例を囲む枠の太さは、類別詞の定着度を表し、太枠は定着度が高い事例、細枠は定着度

が低い事例を示している)。

以上の考察から、次の点が明らかになる。まず図4のネットワークには、中心的な事例から周辺的な事例へのプロトタイプ効果 (prototype effects) が見られる。問題のカテゴリに属する成員が、すべて同等の資格で「枚」のカテゴリに帰属するのではない。その帰属性は、中心的な成員から周辺的な成員まで段階的に分布している。

またこれらの類別詞には、多義性の分布関係が認められる。換言するならば、ここで問題となる意味は、基本的な意味から拡張的な意味へと分布している。レイコフ(1987:91-114)は、この種の分布関係を規定するカテゴリを、放射状カテゴリ (radial category) と呼んでいる。) 意味の定着度という側面から見た場合、図4のように一見したところプロトタイプから拡張の意味に向かうにしたがって、定着度が相対的に薄れるように見える。しかし実際には、拡張された意味が、必ずしも基本的な意味よりも定着度が低い訳ではない。事例によっては、拡張された意味が基本的な意味より定着度が高い場合も考えられる。

2.2.3. 認知のドメインと概念マトリックス

言葉の意味は、文脈や場面から独立して自律的に存在するのではなく、認知主体と外部世界との相互作用を通して創発する。換言するならば、言葉の意味は、辞書に記載されるように固定しているのではなく、文脈や場面における解釈に基づいて創発する。また、言語の意味は、文脈や場面に関わる背景的な知識のドメインと密接に関係している。この種の知識のドメインは、百科事典的知識のドメインの中核を成している。また、日常言語を構成する各種の語彙は、この種の知識のドメインにアクセスする役割を担っている。

認知言語学では、個々の語彙の意味に関わる知識の領域は、このドメインによって規定される。ラネカー(2011/山梨 (監訳) : 56)は、意味の概念基盤とドメインの関係を、以下のように説明している。

ある言語表現は、意味の概念基盤として (すなわち解釈される概念内容として)、ひとまとまりの認知ドメインを喚起するとされている。このドメインのま

りは、集合的にマトリックス (matrix) と呼ばれ、大半の言語表現のマトリックスは多数のドメインで構成されているため複雑である。 (ラネカー : ibid.)

ここで問題にされるドメインは、基本ドメインと複合ドメインの二種類に分けられる。日常言語の語彙を特徴づける多くの概念は、他の概念を含んでいるため、そのドメインは複合的である⁴。一方、基本ドメインは、問題の概念自体をそれ以上に還元することができない。(その典型例としては、空間のドメイン、時間のドメイン、色彩のドメインなどが挙げられる。) 複合的なドメインと基本的なドメインの違いは、前者のドメインには階層性が見られるという点である。この点に関し、ラネカーは以下のように説明している。

一つのある概念が自身の特徴づけの一部として別の概念を前提としてあり、概念の構成構造 (conceptual organization) の上位もしくは下位レベルに位置する概念を含んでいる。 (ラネカー ibid. : 58)

日常言語の語彙の大半は、複合的なドメインのマトリックスにアクセスすることにより、多義的な意味を表現している。ただし、この複合的なマトリックスを構成するドメインは、プロトタイプの意味に関わるドメインと周辺的な意味に関わるドメインによって構成されている。この種のドメインの相対的な分布関係は、図5に示される。図5の太線のプロファイルされた円は、語彙の中心的な意味に関わるドメインを示している。

図5から明らかなように、語彙の多義性に関わる各々のドメインは、相互に独立して存在するのではなく、互いに関連し、一部は重なり合っている。図5のドメイン・マトリックスのうち、中心的なドメインは、問題の語彙の典型的な意味としてアクセスされやすいが、常にこのドメインが喚起される訳ではない。場合によっては、周辺に位置しているドメインが喚起される。このように、どのドメインが喚起されるかは、文脈や場面によって

⁴ 複合的なドメインには、「知覚による概念/知力による概念」、「静的な概念/動的な概念」、「定着した概念/新奇の概念」、「直接感覚、感情経験、運動/感覚経験」などが含まれる。(cf.ラネカー : ibid.)

変化する。各語彙の多義的な意味のうちどの意味が起動されるかは、この文脈や場面の変化によって相対的に決められることになる。

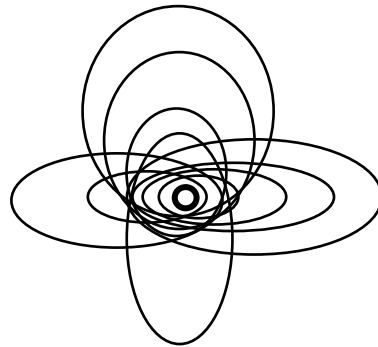


図5 (ラネカー ibid : 61)

以上、本章では、認知言語学の研究プログラムの中核を成す、認知意味論、プロトタイプ理論、カテゴリー化モデル、知識のドメイン・マトリックスなどの中心的な枠組みを概観した。これらの認知言語学の基本的な枠組みは、日常言語の音韻・形態レベル、文法レベルの言語現象の分析だけでなく、本論文の中心的な研究テーマである、日常言語の類別詞の意味と機能の解明にも重要な役割を担う。次章以降では、以上の認知言語学の基本的な枠組みを背景にして、類別詞の意味と機能（特に、日中両言語を中心とする類別詞の意味と機能）を体系的に考察していく。

第3章 類別詞の認定基準とカテゴリー化

日本語には数多くの類別詞が存在しているが、それを介して言語話者はどのような世界観を持ち、どのように身の回りの事物をカテゴライズするかを観察することは可能である。また、類別詞の選別に関しては、対象物の形状、性質、機能といった特徴に基づいて分類され、その中で特に形状類別詞が一番注目されてきた。この種の類別詞の生起は、基本的に対象物の形状に基づいて、分類基準としては理解しやすい。例えば、「本」は、細長いモノを数える類別詞であり、〈細長い〉イメージを持っている。すなわち、「本」で数える際、対象が細長いモノであることを明瞭に相手に伝えられる。対象の特徴に基づく類別詞は、客観的な分類基準があるとよく誤解されているが、実はそうでもない。仮に、類別詞に客観的な分類基準が存在するならば、各カテゴリーのメンバーから同一性が見られる。言い換えると、同じカテゴリーに属するメンバーに共通の属性を抽出することができる。しかし、実際の言語使用を考察してみると、類別詞のカテゴリーは、典型例はもちろん、数多くの拡張事例も確認される。従来の類別詞研究では、この拡張事例はよく例外とされ、考察の対象とされていない。したがって、類別詞に関する研究は、主に典型例の分析、用法の記述、歴史的な変遷などの考察で止まっている。本研究では、認知言語学の分析に基づいて、類別詞の生起、判断基準、類別詞の使用と認知主体の視点との関係を解明するのが目的である。また、従来の類別詞研究では、例外とされて来た周辺的な言語事例（拡張事例）を取り上げ、その背後の動機付けを考察する。以上の考察を通して、類別詞の体系とそのメカニズムの全貌を明らかにする。

本稿では、類別詞の使用と判断基準は、認知主体の主観的な解釈と視点により左右されると仮定し、例として大小の認識に関わる類別詞の「頭」を取り上げ、認知的なアプローチの分析を通して、認知主体からの主観性がいかに類別詞の選別に関係するかについて考察を行う。

3.1. 日本語における「頭」のカテゴリー化

言うまでもないが、類別詞の「頭」の基本用法は、大型動物を数える際に、用いる類別詞である。すなわち、「頭」のカテゴリーに属するメンバーは、主に大型動物を対象とする。しかし、現代日本語において、「頭」の使用範囲は、大型生物から一部の小型生物と昆虫に拡張された傾向がある。例えば、麻薬探知犬、蝶、蚕などの生物に対しては「頭」で数える用例が確認された。これらの事例から明らかのように、この種の拡張は、動物の大きさによるのではなく、ほかの動機付けが存在していると考えられる。また、この種の事例は、「頭」の基本用法に反していることから、使用頻度も低い。そのため、従来の研究では、この種の例を研究の対象外とすることが多い。したがって、このような拡張事例の動機付けと拡張のプロセスに関する分析については、ほとんど考察されていないのが現状である。

しかし、認知言語学の視点から見ると、これらの拡張事例は、恣意的なモノではなく、その拡張の背後には必ず動機がある。認知的なアプローチでは、カテゴリーのメンバーから、カテゴリーの中心を占める典型事例と周辺的な拡張事例を分ける。前者をプロトタイプと定義し、それに対して、後者は非プロトタイプと定義し、両者は相対的に位置づけられる。本研究は、認知言語学の考えに基づく類別詞の考察を行う。特に、今まで研究対象とされてない拡張事例を考察し、その拡張のプロセスと動機付けを究明する。

以下では、類別詞の「頭」を研究する代表的な先行研究を紹介する。また、先行研究を踏まえて、「頭」の判断基準を考察する。類別詞の「頭」についての先行研究としては、松本（1991）と飯田（1999、2005、2013）が挙げられる。

松本（1991：85）は、認知的な視点から 類別詞の「頭」のカテゴリーに属するメンバーを分析している。同じカテゴリーにしても、メンバーはより中心的な典型例（いわゆるプロトタイプ）とより周辺的な拡張事例に分けられる。そして、プロトタイプの事例から共通の特徴を抽出することができる。このようなプロセスを通して、松本は<有生>で、<非人間的>であることを<必要条件>とする類別詞には、「匹」、「羽」、「頭」の3つがあることを指摘している。さらに、「頭」に関しては、<人間の標準的な大きさより大きい>といった必要条件を課している。その具体的な大きさとして、オオカミ程度が境界線と述

べている。

飯田（1999：151、2005：85、2013：372）は、松本（1991）の論述に賛同し、「頭」の使用については、基本的に人間の大きさを大小の判断基準とする。厳密に言うと、育成した大きさは、人間が抱きかかえられないほど成長する大型動物が対象となることを指摘している。

このように、「頭」の判断基準は、認知主体自らの身体を用いて、対象動物と見比べ、大小を判断するのは極めて自然なことである。認知的には、われわれの外部世界に対する認知は、主に自分の身体を通して、知覚し、概念化していくものである。認知言語学においては、このような身体性(embodiment)に注目する。言語の意味は単独に存在せず、人間と環境における相互作用の中に意味が生まれる。この点を、ラネカーは以下のように述べている。

意味とは、ダイナミックに談話や社会的相互作用の中で生じると捉えたほうが妥当である。意味は確立し定着しているのではなく、物理的、言語的、社会的、文化的な文脈を基盤とした対話者間のやりとりの中で構築される。

（ラネカー /山梨（監訳）2011：35）

先行研究が示した「頭」の判断基準は、一見したところ合理的であるが十分とは言えない。言語使用に基づく「頭」のカテゴリーを見れば、それだけが対象ではないことは明らかである。なぜなら、羊、豚、犬などに対しても「頭」で数える。言い換えると、これらの動物も「頭」のカテゴリーの一員である。それにも関わらず、上記の対象はいずれも人間の標準的な大きさという基準を満たさず、また、家畜化されることより、抱きかかえられるイメージと経験がある。したがって、松本（ibid.）と飯田（ibid.）が示した〈人間の標準的な大きさ〉を「頭」の判断基準とするのは、不適切である。

以下では、「頭」の判断基準を明らかにするため、まず、カテゴリーのメンバーを典型事例（プロトタイプ）と周辺的な事例（非プロトタイプ）に分ける。そして、カテゴリーの

中心を占める事例を通して、「頭」の判断基準を考察していく。

3.1.1. プロトタイプと非プロトタイプ

ここでは、「頭」のカテゴリーのメンバーを把握するため、『数え方の辞典』をはじめ、計 5 つの日本類別詞に関する辞書を考察対象とし、「頭」で数えられる動物を調査した¹。その結果、「頭」のカテゴリーに属する動物は、合計 64 種類が検出された。検出された動物をさらにプロトタイプと非プロトタイプに分ける。

- **プロトタイプ**

犀、キリン、象、馬、牛、カバ、熊、ライオン、羊、ロバ…など。

- **非プロトタイプ**

蝶、カブトムシ、亀、蛍、蚕、コアラ、猿、ラット…など。

以上の例のように、プロトタイプは「頭」の中心的な例であり、主に「大型動物」を対象とする。それに対し、非プロトタイプは「頭」の拡張事例である。すなわち、この種の動物は大きさにより、「頭」を用いるのではなく、ほかの動機付けがあると考えられる。言い換えると、前者は「頭」の基本用法であり、後者は「頭」の拡張用法である。したがって、その判断基準を考察するため、前者のみを考察対象とする。しかし、大きさから見れば、プロトタイプの成員はかなりばらつきが見られる。例えば、象はライオンより何倍も大きくて、「大型動物」の典型例として喚起しやすい。それに対し、狼と犬のような動物は、「大型動物」とは言えないが、比較的大きな対象に対しては「頭」で数える例が観察された。すなわち、「頭」の中心的なメンバーは、大型動物に限らず、一部の中型動物も含まれる。以下では、「頭」のカテゴリーに属するメンバーを大きさによって分類し、その分布関係を考察する。

¹ 本稿の調査対象となる辞書は以下の通りである。『数え方の辞典』、『そこんあとこ何というか辞典：物の数え方・物の名前』、『以外と知らない数え方の事典』、『常識として知っておきたいものの数え方』と『知っているようで知らないものの数え方：目からウロコの助数詞もの知り辞典』の計5つである。

3.1.2. 大きさによる下位分類

ここでは、先ほど検出された「頭」の категорияに属する 64 項目の対象動物に対して、さらに細かく分類し、その結果を図 1 で示す。

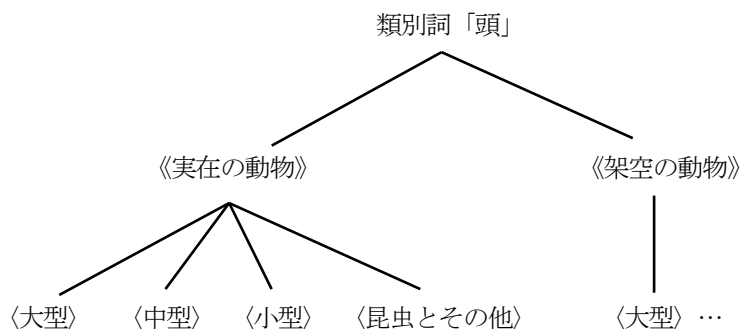


図 1²

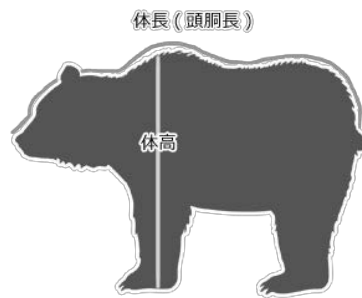
「頭」で数える対象は、物理的な世界における実在の動物に限らず、一部の架空の動物も検出された。例としては、ユニコーン、ペガサスなどが挙げられる。ここでは、実在の動物と架空の動物を二つグループに分け分析を行う。また、各グループにおいて、対象動物の体型により、さらに〈大型〉、〈中型〉、〈小型〉と〈昆虫とその他〉の四つの下位分類をする。この分類は、基本的に〈人より大きい動物〉、〈人並みの大きさの動物〉、〈人より小さい動物〉と〈昆虫とその他〉といった基準に基づいて分類している。このように、「頭」の category は、大型動物から昆虫のような小さな生物までも包含しているのが一目瞭然である。しかし、すべての小型の動物を「頭」で数えるわけではない。この種の用法はあくまでも「頭」の拡張用法であり、その拡張の動機付けと拡張プロセスに関しては、後ほど詳しく考察していく (3.3 を参照)。言い換えると、図 1 の〈大型〉と〈中型〉は、「頭」の基本用法である。すなわち、これらの動物は体型の大きさにより「頭」と共起する。

ここまで考察したように、大きさに対する認知は想像以上に多彩である。なぜならば、人よりも背が低い動物に対しても「頭」で数えられるからである。例えば、羊、豚、ワニ

²ここでは、図 2 で示す下位分類の典型例を提示する。象、マンモス、牛のような動物は〈大型〉の例として挙げ、ライオン、トラ、豚、羊のような動物は〈中型〉の例として挙げる。それに対して、コアラ、猿、狐のような動物は〈小型〉の例として挙げ、蝶、蛍、蚕、カブトムシのような生物は〈昆虫とその他〉の例として挙げる。

などの例が挙げられる。これらの動物が「頭」で数えられるのがなぜだろうか。おそらく大きさを判断する際、高さだけを比較するのは不十分である。すなわち、高さ以外のほかの要素も関わってくる。以下では、まず、一般に高さを測る際、人間と動物の違いをみてから、大きさの概念を考察していく。

人間は身長を測る際、背筋を伸ばして立った状態を測るのが一般的である。しかし、四つ足の動物(哺乳類)はそういう方法で測るわけにはいかない。これらの動物に対しては、普段四つ足を地面について歩行するため、この自然な体勢で高さを測る。この姿勢で測る高さは「体高」と呼ばれる。図2で示すように、対象動物の四つの足で立った状態において、足の裏から背筋までの高さを指す。



(「図解」クマの体長の測り方, 2016/6/14)

(<http://cherio199.blog120.fc2.com/blog-entry-13169.html?sp>)

図2

それ以外、動物の大きさを示される際、「体長」もよく用いられる。「体長」とは、同じ体勢で、対象動物の口の先から肛門までの長さを指す。以上のように、一般の動物図鑑には、動物を紹介する際、少なくとも「体高」、「体長」と「重量」の三つの要素が記載されている。要約すれば、動物の大きさを規定するためには、少なくとも「体高」、「体長」と「重量」といった要素が必要とされる。したがって、認知主体は動物の大きさを判断する際、これらの要素により影響されると考えられる。次節では、以上の点を念頭に置いて、言語主体の大きさに対する認知を考察する。また、大きさの概念はいかに言語表現にも反映するかについても考察する。

3.1.3. 大きさに関する認知

一般に、数えられる動物はある程度の大きさに到達すると、類別詞「頭」の使用が強化され共起する度合いが高くなる。それに対して、対象動物の大きさは、規定する大きさよりも小さい場合、類別詞の「匹」と共起する度合いが高くなる。このように、「頭」と「匹」の使用は、基本的に大きさの概念に依存している。言い換えると、両者の体系を解明するためには、大きさの概念を踏まえる必要がある。以下では、日常の生活において、われわれが大小の概念をどう捉えるかについて、実際の言語用例を通して考察する。

言うまでもないが、大小のような抽象概念を直接に理解するのは至難の業である。この場合、われわれはよくほかの具体的な概念を通して間接的に理解しようとする。したがって、言語使用においては、空間概念を用いて大小を喩えることになる。このような空間概念からほかの概念に写像するメタファーの拡張について、認知言語学の先駆となるレイコフ・ジョンソン（1980）はいち早くメタファーの汎用性とその普遍性に着目している。

レイコフ・ジョンソン（1980：20）は、上下の空間認知について、経験的基盤を通して、様々な概念メタファーを拡張することが可能だとしている。すなわち、このメタファーは、我々の身体経験（embodied experience）に基づいている。ここでは、MORE IS UP; LESS IS DOWN（多いは上；少ないは下）のメタファーを一つの例として挙げる。例(1)～(6)から明らかのように、このメタファーは、我々の日常の表現の中に存在している。

(1) The number of books printed each year keeps going up.

(2) His income *fell* last year. (Lakoff & Johnson *ibid* : 16)

(3) 収益が上がっている。

(4) 製品の質が下がっている。(山梨 2000:169)

(5) 景気不好業績下降了不少。

(不景気のため、業績がかなり下がっている。)

(6) 提升成績最好的方式就是多下功夫。

(成績を上げる最も良い方法はよく勉強すること。)

このメタファーを理解するには、ある物理的なモノをある容器の中に入れたら、容器にモノを入れれば入れるほどモノが重なり高くなっていくという経験が動機付けられる。すなわち、このような経験を通して、上/下の概念から多/少の概念に写像することが可能になる。そのマッピングは図3に示される。

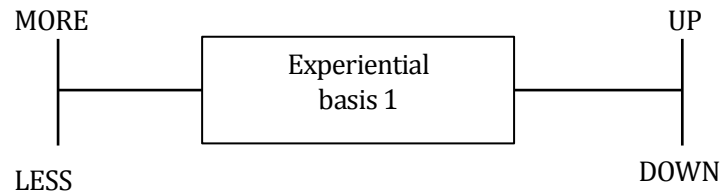


図3 (Lakoff & Johnson *ibid.*:20)

この種の比喩的な拡張は英語に限らず、ある程度の普遍性が見られる。さらに、上/下の空間概念から大小の概念へ写像することができる(図4を参照)。

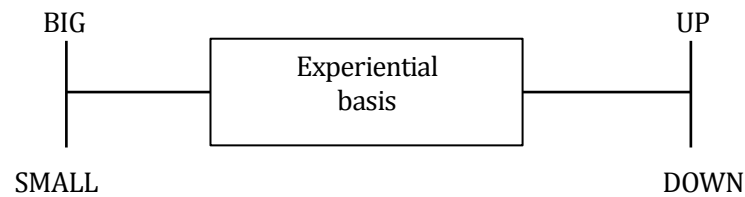


図4

日常生活において、身長を見比べる際、直接に高/低を言わずその代わりに大/小を喩える事例がよく見られる。その証拠としては(7)と(8)が挙げられる。

(7) 5つ下の妹は私より大きい。

(8) 背の小さい男だが、はしっこい眼もとをしていて、門下生の代表のような顔つきをしていた。『小説日本芸譚』

(7) は、「妹は私より背が高い」と「妹は私より体型的に肥えている」という二通りの

解釈ができる。すなわち、「5つ下の妹は私より大きい」という表現は曖昧である。(7) から明らかのように、大きさの概念は、高さ以外、対象の体型にも関わっている。一方、(8) は、話題となる男性の背の低さを描写する例である。ここでは、直接に「低い」という単語を使わず、その代わりに「小さい」という表現を用いることが確認される。もちろん、より自然な表現は「背の低い男」であるが、(8) のような言い方も実際に使われている。このように、図4に示されたBIG IS UP; SMALL IS DOWN (大きいは上; 小さいは下) というメタファーは、実際の日常生活の会話において実際に用いられることが確認されるが、SMALL IS DOWN より、BIG IS UPの方がより一般化される傾向が見られる³。

山梨(2016)は、さらに大/小の認知と数量との関係に注目し、MORE IS UP; LESS IS DOWN (多いは上; 少ないは下)の比喩に基づいて、; LESS IS SMALL という比喩表現が存在すると指摘している。この種の比喩表現は、基本的に表面的な見えの知覚経験に基づいている。

日常世界では、基本的に増殖していく存在は知覚的には大きく認知され、逆に減少していく存在は小さく認知される。 (山梨 *ibid.* : 128)

山梨(*ibid.*)は、以下のような典型例を挙げて説明し、そのマッピングを図5のように示している。

- (9) a. 大きい数/小さい数
- b. 最大値/最小値
- (10) a. 来年は大きな収入が見込まれる。
- b. 彼は小額だがお金を貸してくれた。

³ ここでは、「背の小さい男」という用例を通して、SMALL IS DOWN (小さいは下) というメタファーの使用頻度を観察した結果、「背の小さい○○」は僅か16例で、「背の低い○○」は1426例が検出された。すなわち、SMALL IS DOWN (小さいは下) というメタファーを使う人はごく一部であり、普遍性が低い。

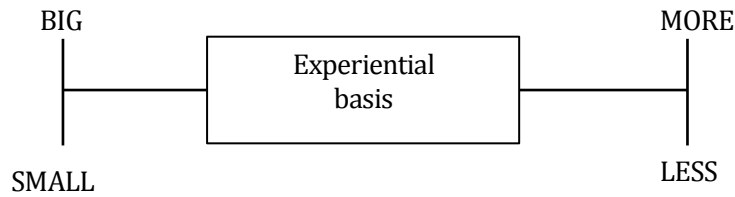


図5

ここまで考察したように、上下の空間概念を用いて、多/少、大/小、価値などの概念に喩える言語表現は、日常の生活においてよく用いられることが確認された。また、この概念の形成は、認知主体にとっては理解しやすいので、この種の言語表現の生産性も比較的に高いと言える。さらにこの種の拡張は、大/小のような具体的な概念から、価値のような抽象的な概念までに拡張していく傾向がある。同様に、大/小に関する認知も、基本的に物理的な経験に基づいている。また、大/小を用いて、空間（上/下、左/右を含め）、多/少、価値などの概念に喩えられる。例えば、大空間、大家族、大バーゲンが例として挙げられる。

(7) の例から明らかなように、われわれは高い対象を大きいモノと見なす傾向がある。例えば、バスケットの選手と偶然に会う際、相手の身長は自分よりも遥かに高い場合、「あの人は大きいですね」という表現を用いる。しかし、身長が比較的に低くて体が大きい人に対しても、この表現も使える。言い換えると、対象と比較の対象の高さが同様になった場合、その比較基準は両者の横幅にシフトする。

物理的な世界においては同質的なモノが同じ高さを前提とし、幅の広い方が大きいと見なされるのは自然である。また、両者の間には、大きく見える方がより重いという結論に至るのも自然である。図6では、材質が同の立方体を表す。(便宜上、図6に示すのは立方体のある側面である)。仮に、AとBは同じ高さに設定し、Bの横幅はAより倍ならば、Bの立方体はAより体積が大きいと言える。したがって、Bの方がより重いと理解することができる。さらに、具体的に考えてみれば、図6のAとBをカステラと見なすならば、Aの方は食べかけのカステラを表すのに対し、Bの方は丸一本のカステラを表す。この場合、子供でもBの方がより大きく見えると答えられる。そして、大きい方がより重いのも予測

できる（すなわち、A と比べて B の方が重い）。

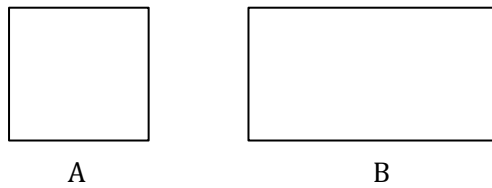


図6

以上のように、大きさの概念には、「高さ」、「横幅」と「重量」といった要素が含まれる複合的な概念である。「頭」の判別基準に関しても、同じくこの三つの要素を視野に入れて考慮しなければならない。以下では、これを念頭に入れて、「頭」のカテゴリー化を分析していく。

3.2. 分類基準の主観性

3.1.2 で考察したように、「頭」のカテゴリーは、大型から小型よりも体型が小さな昆虫のような対象を包含している。以下では、形と大きさとの関係から、「頭」のカテゴリーの中心を占めるメンバー（いわゆるプロトタイプ）を分析していく。

3.2.1. 形と大きさとの関係

類別詞を介して、われわれは対象に関するイメージを簡単に捉えることが可能になる。以下に具体例を挙げて説明する。

(11) 一本の蝋燭

(12) 一枚のお皿

(11) と (12) の例から明らかのように、「本」と「枚」は、対象（蝋燭とお皿）を数え

る単位でありながら、対象の形状も表している。「本」は、細長いイメージを持ち、また硬い材質がその典型的な特徴の一つである。例えば、バット、蠟燭、鉛筆などが例として挙げられる。それに対し、「枚」は、形が薄いモノを対象とする（対象の材質に関しては、特に規定されてない）。例えば、お皿、千円札、ガラスなどが例として挙げられる。両者のイメージスキーマは図7に示される。

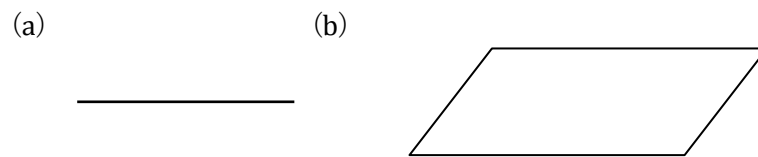


図7 「本」と「枚」のイメージスキーマ

このように、形状によって、モノをカテゴリー化する類別詞は「形状類別詞」と呼ばれる。この種の類別詞は、形状との繋がりが強く、従来の類別詞研究においていち早く注目されている。一方、非形状類別詞に関しては、直接に対象の形状を示さないで、形状との関連性についてはほとんど研究されてない。筆者は、非形状類別詞も対象のイメージを反映することができると思う。すなわち、類別詞においては、形状類別詞のみならず、非形状類別詞もある程度形に基づいて概念化される可能性がある。この点を証明するため、大きさに関連する類別詞の「頭」を取り上げ、形との関連性を考察する。「頭」は、大型動物と共起する類別詞なので、対象動物の大きさを区別する際、形がいかにかにその判断に影響を及ぼすかについて考察する。

「頭」で数える対象の体型から見れば、かなりばらつきがあることが確認される。そして、これらのメンバーを大きさに基づいてさらに下位分位する(図1を参照)。大型動物は、図1で示す〈大型〉と〈中型〉のみである。この二つのグループは、「頭」の基本用法に基づいている。言い換えると、これらのメンバーは「頭」の中心的な例として捉えられる。以下では、「頭」の中心的な例を通して、「大型動物」と思われる対象の形状を考察していく。

筆者の調査によると、大型動物は主に哺乳類の動物であるが、ある一部の海の生物と爬虫類も含まれる。これらの動物は異なる生態で生息しているため、構造、形、体型の大きさも異なるにも関わらず、全て「大型動物」と見なされるのは興味深い。大型動物の基準は、一つだけではなくいくつの基準がある。この点を究明するため、大型動物と見なされる〈大型〉と〈中型〉の動物に基づいて、形状の共通性を考察した。その結果、図8のように三つのタイプに分けられる。

A タイプ：高さと同幅両方とも大きい（典型例：象）。

B タイプ：ある程度の高さがあり、横幅が大きい（典型例：ロバ）。

C タイプ：横幅のみ大きい（典型例：ワニ）。

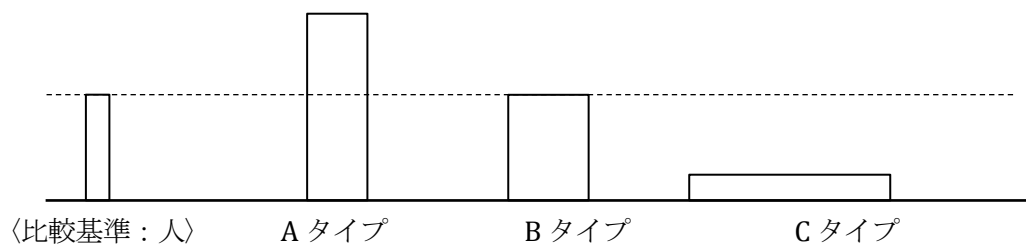


図8

まずAタイプは、高さと同幅の両方とも、比較基準（いわゆる認知主体）よりも遥かに大きく、大型動物として認識するのが一番自然なパターンである。すなわち、このタイプのメンバーは大型動物の典型例で、「頭」と共起しやすい。したがって、Aタイプは「頭」のプロトタイプと言える。しかし、筆者の調査によると、「頭」のカテゴリーにおいては、この種の動物はわれわれが考えたほど多くないのが確認された。すなわち、比較基準となる人間よりも高い動物は限られている。その具体例としては、象、マンモス、馬などが挙げられる。

一方、Bタイプに関しては、対象動物の高さはともかく、横幅は比較基準よりもやや大きい。それに対し、Cタイプでは、対象の高さは比較対象よりも完全に低く横幅も非常に広い。一見したところ、この両者は大型動物と見なされにくいと思われがちであるが、実

はそうでもない。物理的な世界においては、両者とも大型動物と見なされる。なぜならば、BタイプとCタイプの動物は、「頭」で数えられるからである。Bタイプの典型例はロバや羊のような家畜であり、Cタイプの典型例としてはワニが挙げられる。

「頭」のプロトタイプはAタイプであるが、メンバーの分布はほとんどBタイプに集中している。認知的な視点から見れば、「頭」の理想的なモデルはAタイプである。しかし、図9のように、われわれが認識する「大型動物」は、それよりも広く定義されている。言い換えると、「大型動物」は、図9で示す三種類の形を包含している。したがって、従来の研究が規定する〈人間の標準的な高さよりも高い〉という高さのみを重視する判断基準は不十分である。対象動物の大きさを判別する基準には、少なくとも対象の高さ（縦軸）と横幅（横軸）が関わってくる。以下では、類別詞の「頭」が使われる場合の認知プロセスを考察する。

3.2.2. 「頭」の認知プロセス

認知主体は、対象の大きさを分別する際、基本的に対象の高さ（縦軸）と横幅（横軸）によって判断する。論理的に考えれば、いちいち対象動物の高さと横幅を比較対象と見比べてから判断するのは困難である。認知主体は瞬時的に対象の大きさを区別することができるはずである。認知主体が瞬時的に動物の大小を区別できるのは、形状によるからである。その認知プロセスは、図9に示される。

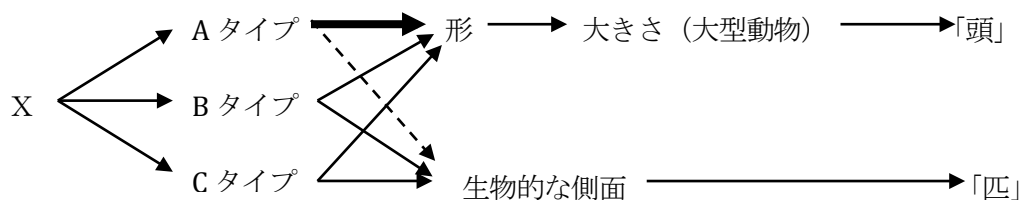


図9

図9のXは問題とする対象であり、ここでは、Xを大型動物と仮定する。対象(X)の

体型により、A、B と C のいずれのタイプに分類し、分類された形により類別詞が共起すると考える。(A、B と C タイプは、3.2.1 の分析に基づいている)。

仮に、対象の X が A タイプであれば、X は「頭」の典型例(象のように高さと同幅両方とも大きい対象動物)と見なし、「頭」と共起する度合いが非常に高い。この際、「頭」の認知プロセスが強められる一方、「匹」との共起が相対的に弱められる。また、「頭」が生じる強度を表すため、図9は、太い実線で強度の強さを表している。厳密に言うと、この種のメンバーを「匹」で数える際、多少違和感を感じる。なぜならば、認知主体は、大型動物の典型例である対象の具体的な大きさを無視し、その代わりに、対象の抽象的な生物学的側面に焦点を当てるのは、無理があるからである。しかし、この使い方が全くないとは言いきれない。松本(1991:86)は、「牛一匹」の例を通して、この使い方は、実際の言語使用にも観察されるので、その容認度はある程度可能であると指摘している。Aタイプにおいて、「頭」の使用は比較的安定しているが、「匹」に対する容認度は相対的に低くなる。(図9は、その容認度の弱さを破線の矢印で表している)。

一方、仮に X が B と C タイプであれば、「頭」と「匹」との共起する度合いは、基本的に同等であると考えられる。なぜならば、Aタイプと違って、両者とも高さを欠く大型動物の非典型例であるからである。すなわち、この種の動物は人並みの高さ、または人よりも低いので、認知主体に与えるイメージはAタイプほど強くない。したがって、対象のどの側面にアクセスするかの強度は均等である。(ここでは、「頭」と「匹」が生起する強度が同じなので、図9は、細い実線の矢印でその強度の均等性を表している)。言い換えると、B と C タイプにおいて、「頭」と「匹」の混用状態が見られる。以下では、その具体例を挙げる。

(13) 鹿野山神野寺の住職が飼っていた二頭の虎が脱走していたからである。

『新々ちよっといい話』

(14) 虎は大きな声で吼え、ほかの二匹の虎といっしょにどこかへ逃げて行ってしまった。『中国怪奇物語(妖怪編)』

本来、「頭」と「匹」は両方とも、対象動物の大きさに注目する類別詞である。また、その使用範囲から見ると、両者は対立的に見える（表1を参照）。

類別詞	対象生物	特徴
頭	大型動物	大きさ
匹	大型動物以外の動物 →生物全般（拡張用法）	大きさ →生き物全般（拡張用法）
羽	鳥類	羽
尾	魚類	尾びれ

表1 生物に関わる日本語常用の類別詞とその判断基準

すなわち、「頭」は基本的に大型動物を対象とし、その一方、「匹」は中型と小型の動物を対象とする。しかし、現代日本語では、「匹」は生物全般を数えるようになったことにより、両者の体系は対立的な関係から、包含的な関係になっている。松本 (ibid.) は、現代日本語の事例を通して「匹」の範疇を考察し、その必要条件は〈有生〉と〈非人間〉の二つと指摘し、さらに「頭」と「匹」の体系の関係を以下のように説明している。

-ヒキについては、まず-ワ、-トウを使わない動物に用いられる事が指摘できる。例えば、犬、猫、うさぎ、ねずみ、亀、蛇、蛙、魚、虫などの動物である。しかし、-ヒキは-ワと-トウと同じレベルで対立しているのではなく、この二つに対して上位語としての性格を持っている。つまり、〈有生〉〈非人間〉の二つの条件のみを持つと分析できる。この分析には次の二つの根拠がある。まずは、-ワ、-トウが使える生物に対する-ヒキの使用、例えば「スズメ一匹」、や「牛一匹」は容認がある程度可能であり、実際に使用も観察されるという点である。このことは-ヒキの指示物に-ワや-トウを使った「犬一羽」や「ねずみ一頭」が非常に不自然であることと比べるとはっきりする。第二に鳥や大きな動物を含めた動物一般について述べる際には-ヒキが使われる点が挙げられる。例えば、「生き物は一匹残らず死んでしまった」と言った場合である。 (松本 ibid.: 85-86)

このように、「匹」のカテゴリーは、昔と比べて広がったと言える。さらに、使用範疇が変わると共に、用法に関する規定も変わっていく。現代日本語において、「匹」を用いる際、対象の〈大きさ〉から〈生物的な側面〉に焦点がシフトしている。この場合、「匹」の分類基準は、より具体的な条件からより抽象的な条件になっている。両者の混用は、認知主体の視点と捉え方の違いによる現象である。このように、認知主体の主観性は、深く類別詞に影響を与えている。その影響は類別詞の生起だけではなく、類別詞のカテゴリー化にも関わってくる。この問題について、以下では、「頭」の分類基準を取り上げて考察する。

3.2.3. 「頭」の分類基準

類別詞がわれわれの生活に浸透していることを自覚することができないが、実際の言語表現から観察することができる。特に、類別詞は一般の単位と違い、話す場面また文脈に応じ異なる使い方があり、非常に柔軟性があると言える。また、類別詞の典型例からの拡張事例も数多く見られる。したがって、類別詞のカテゴリーのメンバーを全て規定するのは困難である。ここでは、先行研究を踏まえて、「頭」の従来分類基準の問題点をまとめた後、新たな基準を提案する。

言うまでもないが、類別詞の「頭」と「匹」の使い分けは、主に動物の大きさによって判断される。その基準について、松本 (ibid.) と飯田 (2005 : 85、2013 : 372) は、認知主体自身の体を比較基準とすると指摘している。簡単に言うと、どの程度の大きさを基準に大きいと感じるかは知覚する主体の大きさに基づく。このように、数える対象動物と言語化されていない比較基準となる人間との比較関係により、大小を認識することができる。また、ラネカー (2011/山梨 (監訳) : 237) は、この種の事態の関係性を図式化して分析している。以下では、ラネカー (ibid.) に従い、「頭」と「匹」が生じる際、対象動物と比較基準との関係を図 10 のように規定する。

図 10 の (a) と (b) は、それぞれ「頭」と「匹」の認知プロセスに対応する図式である。まず比較関係において、比較する対象生物と比較される基準となる人間があり、両者

の間に比較関係が存在する。そして、参加者の中で、実際言語化されたのは対象生物だけであり、これをトラジェクター (trajector) として規定する。大小のスケールの上に縦長のサークルで囲まれた **n** は、[大きい/小さい] の基準点 (norm) を示している。すなわち、ここでは人間の体の大きさを判断の基準点とする。

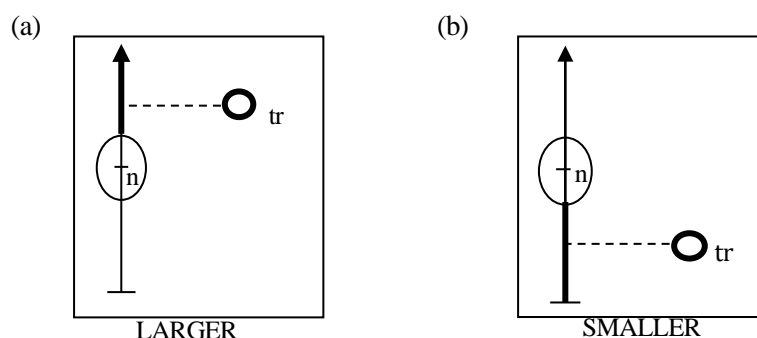


図 10

図 10 では、トラジェクターが基準点より上に位置づけられると、そのトラジェクターとしての動物は大型と見なされ、「頭」が共起しやすい。一方、トラジェクターが基準点より下に位置づけられると、大型動物と見なすことができず、「匹」と共起しやすい。すなわち、「頭」は大きいスケールをプロファイルすると共に、小さいスケールを背景化する。このように、「頭」と「匹」の基本用法から見て、両者は相対的に位置づけられる。しかし、「頭」で数えられるメンバーの中の一部だけがこの基準を満たすことができる。すなわち、この基準は、象のような大型動物の典型例だけに適用する。したがって、松本 (1991) と飯田 (2005、2013) で示された高さのみを基準とする規定は、十分ではないと言える。この問題を解決するため、以下では「静的な基準」と「動的な基準」の二つを提案する。

3.2.3.1. 静的な基準

先述のように、大小の認識は、基本的に比較対象があった上に成立する。認知主体が自らの身体を比較基準とするのは、ごく自然なことである。厳密に言うと、ここでは、人間

の身長（高さ）が基準として用いられる。以下では、人間と動物の高さの測り方を紹介した後、この「静的な基準」⁴の適用範囲を考察する。

人間の身長を測る際、背筋を伸ばして立った状態を測るのが一般である。すなわち、頭のとっぺんから足の裏までの長さになる。それに対して、哺乳類の動物に関しては、普段四つ足を地面について歩行するため、この自然な体勢で測る。この体勢において、足の裏から背筋までの高さは「体高」と呼ばれる。また、「体長」とは、対象動物の口の先から肛門までの長さを指す。この二つは動物の大きさを論じる際、一番よく用いられる基準となる。大きさを論じる際、生物も、非生物も「静的な基準」に基づいている。（図3を参照）。

しかし、この「静的な基準」の適用範囲はかなり限られている。なぜなら、前節に述べたように、人間よりも高い典型的な大型動物は稀である。本稿の分類から言うと、この基準に対応するのはAタイプのみである。その具体例としては、象、マンモス、牛などが挙げられる。外見から見ると、この種のメンバーは人間よりも遥かに大きい（高い）ので、「静的な基準」により「頭」で数える。一方、それ以外の大型動物（BとCタイプ）に関しては、人間の高さ⁵を越えることなく、「静的な基準」を用いることができない。これらの対象に関しては、次の「動的な基準」を提案する。

3.2.3.2. 動的な基準

前節のように、「頭」の典型例（いわゆる、大型動物のプロトタイプ）のみが「静的な基準」に対応している。それ以外の対象は、一体どういう基準により、「頭」のメンバーになったかについて考察する。ここでは、「熊」を例としてみる。熊の体高（四つ足が地面についた高さ）は、人間の平均的な高さよりも低いにも関わらず、「大型動物」というイメージが強いのはなぜだろうか。

熊は四つ足を地面について歩行する。しかし、危険を感じる際、後足だけで立つ姿勢を

⁴この「静的な基準」は、松本（1991）と飯田（2005、2013）の「頭」の判断基準と一致する基準である。

⁵平成27年度文部科学省の調べによると、20歳から24歳までの成人男子の平均的な身長は約171cmである。それに対して、20歳から24歳までの成人の平均的な身長は約158cmである。仮に、これを比較基準とするならば、「頭」で数える大型動物は少なくともこの高さを越える必要がある。『学研の図鑑ライブ動物』によれば、熊の体高は約100-150cmである。したがって、熊は「静的な基準」を満たさない。

作り、相手を威嚇することもしばしばある。このように、前足を地面から上げながら、背筋を伸ばして立つことにより、本来の高さより大きく感じさせる。したがって、相手を撃退する効果が得られる。すなわち、体勢を変えることによって、熊の本来の高さ（四つ足で地面につく立ち姿、いわゆる「体高」）より高く見せかけることができる。われわれは、このような知識を持っている。認知言語学では、この種の知識に基づく意味論は百科事典的意味論と呼ばれる。ラネカー（2011/山梨（監訳））は、この意味論を次のように説明している。

この百科事典的意味論では、語彙の意味は、あるモノのタイプに関する開かれた知識の総体へとアクセスする特定の方法にあると考える。この知識の総体は中心を共有する一連の円によって表示され、それは知識の構成要素が中心性の程度を変えていることを示している。この中心性の順序づけは、慣習的に構築された語彙科目の意味の一面を表している。ある語彙の意味においてきわめて中心に位置する項目は、その言語表現が使用される際、ほぼ常に活性化される。それに対して、周辺に位置する項目はときおり活性化される。その他のきわめて周辺に位置する項目は、ある特定のぶんにおいてのみ活性化される…あらゆる場合において、常に活性化状態にある項目は存在しない。おそらくある言語表現が使用されるその時々、その特有の活性化パターンがあるのだろう。（ラネカー *ibid.* : 49-50）

熊のような四つ足で歩行する動物が「頭」のカテゴリーのメンバーとなる理由は、以下のように想定することができる。大小を認知する際、認知主体は、普段熊の歩く姿を喚起せず、相手を威喝するため高く見せかける姿を活性化する結果かもしれない。したがって、熊が「頭」のカテゴリーに分類されるのは、百科事典的な知識による。本稿では、この基準を「動的な基準」と呼ぶ。

要するに、「静的な基準」の適用範囲は、比較的「動的な基準」よりも狭い。なぜならば、「静的な基準」に基づく対象は、大型動物の典型例（Aタイプ）のみであるからであ

る。それに対し、「動的な基準」は、それ以外の対象（いわゆる、大型動物のより周辺的な例、本稿のBタイプCタイプに当たる）に対応している。言い換えると、「頭」の判断基準としては、「動的な基準」は、比較的によく用いられると言える。この基準は、基本的に認知主体が持っている生物的な知識と経験に基づいているので、認知主体の主観的な判断によると言える。またこの種の基準は、認知主体により個人差が見られる。

ここまで考察したように、「頭」の分類基準には、客観的な「静的な基準」と主観的な「動的な基準」の二つが存在している。この分類基準から明らかなように、類別詞は、認知主体の主観的な認識の働きによる分類である。以下では、「頭」の基本用法からの拡張事例を考察する。

3.3. 「頭」のカテゴリーの拡張

「頭」の拡張事例の具体例としては、一部の社会的に役割を持つ犬（検疫探知犬、盲導犬、救助犬など）、一部の昆虫類（蝶、蛍、カブトムシなど）と一部の小柄の動物（亀、コアラ、狐など）が存在する。本稿の分類によると、これらの動物は、〈小型〉と〈昆虫とその他〉の分類に入る（図1を参照）。まず、外見から判断すると、これらの動物は、大型動物の大きさから程遠い対象ばかりである。また、これらの動物は、全ての状況において、「頭」で数えるわけではない。普通、小型の動物と昆虫などの対象は、「匹」で数えるのが一般的である。すなわち、これらの対象を「頭」で数える際、特殊な場面と文脈が必要である。以下では、それぞれの具体例を通して、「頭」の拡張プロセスと動機付けを考察する。

3.3.1. 「犬」に対する拡張用法

「頭」の拡張事例の中において、犬は比較的体型が大きい対象である（特に大型犬の場合）。そして、犬の種類により、対象の大きさはかなり異なってくる。したがって、各成長段階において、異なる類別詞が生じる場合も考えられる。さらに、日本語では、社会的な役割を持つ犬に対しては、「頭」で数える拡張用法が確認される。このように、認知主体の

捉え方により、犬は「頭」と「匹」の両方と共起できる。以下では、ゴールデンレトリバーという大型犬を対象とし、犬の数え方について考察する。

ゴールデンレトリバーを取り上げた理由は、この種の犬の性格が穏やかなので、ペットだけではなく、盲導犬⁶としてもよく飼育されているからである。また、一般に大型犬の体型は成長すると共に大きくなっていくという特徴がある。厳密に言うと、大型犬の成犬のみが「頭」の対象となると考えられる。ここでは、大型犬の成長による体型の変化とペットから盲導犬になるといった役割の変化に関して、その数え方の違いに注目したい。

筆者の調査によると、大型犬をペットとして飼われる場合、例外が検出せず、基本的な用法により、類別詞が生じる。しかし、社会的な役割を持つ大型犬の場合、二種類の反例が検出された（例外は表 2⁷の①と②を示している）。一つは、これから社会的な役割を担いそうな幼犬（盲導犬候補の子犬）に対して、「頭」で数える例である。もう一つは、「頭」で数えるべき盲導犬のことを「匹」で用いる例である。以上のような言語現象について、具体例を示しながら、詳しく分析する。（以下に挙げた例（15）は、役割が与えられた犬に対して、「頭」で数える拡張用法である。一方、例（16）～（19）は、その拡張用法に反する異例的な用法である。

	ペット				社会的な役割担う場合（盲導犬など）	
	子犬	成犬			子犬	成犬
		小型犬	中型犬	大型犬		
頭	×	×	×	○	○ ^①	○
匹	○	○	○	○	○	○ ^②

表 2

⁶ 公益財団法人日本盲導犬協会によると、盲導犬にむいている犬種は、主にラブラドル・レトリバー、ゴールデン・レトリバー、ラブラドル・レトリバーとゴールデン・レトリバーのミックスブリード（MIXB）である。

⁷ 表 1 では、便宜上のため、大型犬のみ「頭」で数えることにした。実際の言語使用に関しては、発話者の認識によって、その境界線に揺れていくと考えられる。例えば、「1日平均 277 頭。2014 年度に国内の動物愛護センターや保健所で殺処分された犬・猫の頭数です。年間になると約 10 万頭。」（環境省統計より）といった例が挙げられる。この場合、問題にするのは対象の大きさではなく、全体的な頭数なので、一種専門的、慣習的な用法である。

(15) 日本における最初の災害救助犬が誕生したのは1992年で、1995年に発生した阪神・淡路大震災でスイスの災害救助犬教会の12頭と共に富山県と神奈川県から5頭が活躍しました。 (わんちゃんホンポ, 2017/12/24)

(<https://wanchan.jp/osusume/detail/1549>)

● 盲導犬候補の子犬に対して、「頭」で数える用例 (表1の①)

(16) 当協会では、1頭の子犬 (パピー) の誕生からたくさんのボランティアやスタッフが関わり、1頭1頭が大切な存在として…。

(公益財団法人日本盲導犬協会, 2017/9/17)

(<https://www.moudouken.net>)

(17) 小林さん宅の玄関を入ると、生後1ヵ月の8頭のパピーたちはおとなしく寝ていました。

(公益財団法人日本盲導犬協会, 2017/9/17)

(<https://www.moudouken.net>)

● 役割がある犬のことを「匹」で用いる用例 (表1の②)

(18) こうした中、水際での摘発に活躍している犬たちがいる。「検疫探知犬」と呼ばれ、羽田空港には4匹配備されている。(日テレNEWS24, 2017/8/11)

(<http://www.news24.jp/articles/2017/08/11/07369631.html>)

(19) 北海道警伊達署警察犬に小型犬ばかり4匹。 (毎日新聞, 2017/9/1)

(<https://mainichi.jp/articles/20170901/k00/00e/040/210000c>)

(16) ~ (19) の例から明らかなように、類別詞は、対象の特徴により生じるものではなく、認知主体の捉え方により左右される。このように、類別詞では、客観的な基準を持たないと言える。以下では、このような異例が生じる原因を分析する。

3.3.1.1. 一般のペットの事例

犬がペットとして飼われる場合、体型が大きい犬は、「頭」と共起しやすい。しかし3.2.2で考察したように、「頭」と「匹」は対立的な概念ではなく、両者の体系は現代日本語においては、上/下の関係と考えられる。また、「頭」と「匹」の選別は、基本的に認知主体の視点の置き方による。すなわち、発話者が大型動物の生物学的な属性を焦点化する際、相対的に体型が背景化され、「匹」を用いることが可能になる。さらに、実際の言語使用に基づいて、「牛一匹」のような例もある程度の容認度が見られると松本（1991：86）が指摘している。したがって、「匹」の使用領域は、本来の中心的な用法から生き物全盤に広がる傾向が見られる。以上のように、「頭」と「匹」の用法と使用範疇を把握した上で、ペットとして飼われている大型犬の数え方を考察する。

言うまでもないが、犬の品種により、体型の大きさはかなり異なってくる。大型犬は、図8に示すA、BとCタイプのいずれも当てはまることできない。唯一考えられるのは、大型犬は「動的な基準」により、「頭」で数えるようになったと考えられる。仮に、この仮説が正しいければ、大型犬と「頭」の生起に関しては、対象（犬）の実際の大きさと同様に、関係なく大型犬の身体能力にが関連すると言える。すなわち、認知主体は、犬の身体能力といった知識をよく知った上で、「頭」を用いる。この拡張のプロセスに関しては、後ほど詳しく説明する。

新聞記事などのような公の発表と専門的な記述をする際、「頭」で用いることが多く観察された。一方、話し言葉とSNS（social networking service）のような個人による発信媒体の場合、犬を「匹」で数える度合いが高い。以下では、社会的な役割が与えられた犬の数え方とその反例を考察する。

3.3.1.2. 社会的な役割担う犬

表2のように、社会的な役割を持つ犬に関する反例としては、二種類が観察された（反例は、表2の①と②を示す）。これらの反例は、いずれも「頭」と「匹」の使い方を覆した

にも関わらず、日常生活において確かに使われていることが確認された。この種の反例は、必ずある動機付けに基づいている。以下では、その動機付けを考察する。

(16) と (17) は、両方とも公益財団法人日本盲導犬協会のホームページから採取した実際の用例である。まず (16) は、盲導犬として生まれた子犬を引き受ける家庭（ボランティア）の募集についての案内である。また (17) は、子犬が引き取られた後の飼育日記からの例である。これらの例から明らかなように、両者とも生まれたばかりの子犬に対して、「頭」で数える現象が見られる。この場合、子犬と「頭」の関連性は、大きさに基づく拡張ではない。もう一種類の反例は、(18) と (19) のような社会的な役割を持つ犬に対して、「匹」で数える例も検出された。この二つの例は、両方ともインターネット上で記載された新聞記事とニュースの見出しである。特に (19) のように、警察犬として抜擢されたのは小型犬なので、発話者はこの事実に注目し、あえて「頭」を使用せず「匹」を用いている。以下では、古典的なカテゴリー観と認知言語学のカテゴリー観の違いを紹介した後、引き続きこれらの反例の拡張プロセスを考察する。

従来の古典的なカテゴリーによると、カテゴリーとメンバーの間には、共通の素性を引き出せると仮定される。したがってこの定義によると、(16) ～ (19) は例外とされてもおかしくない。しかし、認知言語学のカテゴリー観は異なる。それに関し、山梨 (2000) は以下のように説明している。

認知言語のアプローチから見れば、言葉の特徴づけているあらゆるカテゴリーは、根源的には、外部世界にたいする主体の何らかの解釈過程の反映として存在している。(山梨 *ibid.*: 39)

本研究は、この考えを受け継ぐ。以下では、これらの用例を通して、発話者の主観的な捉え方はどのように言語に影響を及ぼすかについて考察する。

3.3.1.3. イメージスキーマによる拡張

本節では、表2に基づく「頭」の用法の認知プロセスと動機付けを考察する。ここまで考察したように、類別詞の判断基準だけではなくその使用に関しても、認知主体の主観的な解釈が関係していることが判明した。またこの種の例⁸は、基本的な用法と異なっていることから、使用頻度も相対的に低く例外と見なされる。したがって、従来の研究は、この種の用例を研究の対象外とすることが多い。しかし、認知的な視点から見れば、このような異例が生じるのは決して恣意によるのではなく、また、その拡張に関しては必ず動機付けが存在すると考えられる。ここでは認知言語学の考えを受け入れ、この種の用例も一種の拡張用法として見なす。また、その拡張における認知プロセスと動機付けについて、認知的な分析を行う。

ここで問題とするのは、類別詞の規則に反した二つの例外である。一つは、生まれた子犬に対して「頭」で数えること。もう一つは、社会的な役割を持つ犬に対して「匹」で数えること。筆者の調査によると、このような異例的な用法に関する使用頻度は、確かに一般の典型用例よりも大分少ないが、ないとは言えない。(16)～(19)の用例は、いずれも公に公表された文章の一部である。これらの例は、規則を破っているにもかかわらず、文法上にはある程度容認されている。このような拡張が可能になったのは、「頭」と「匹」の両方とも対象の大きさに焦点を当てるからである。すなわち、類別詞の拡張に関しては、対象と類別詞の間にある程度の関連性がないと拡張できないと言える。次の具体例をみよ。

(20) *1羽/尾の牛

(20) から明らかなように、牛は鳥類のような羽もなく魚類のような尾びれもないので、いずれのカテゴリーにも拡張するのが不可能である。しかし、大きさに関する認知は極めて主観的であり、個人差が認められる。言い換えると、大小に関する明確な基準がないの

⁸ ここでは、(16) から (19) までの用例を指す。

で、「頭」と「匹」は、認知主体の主観的な認知により拡張されやすい。さらに、(16) ～ (19) の用例は、おそらく認知主体の心理的なプロセスと現実の状況が一致しないことにより生じた現象である。ここでは具体的に認知主体の認識と時間(いわゆる出来事の順序)の間には、どのようなずれが生じるかについて詳しく考察する。

まず、盲導犬協会のホームページに載せられた飼育日記の子犬が「頭」で数えられることについては、以下のように推測できる。(17) の例が示すように、子犬を「頭」で数える際、発話者は子犬の状態に関しては無関心である一方、今後訓練を経た盲導犬としての活躍に関心を集め、その見込みを前景化していると推測できる。すなわち、発話者は「頭」を用いることによって、子犬に対する将来のビジョンと期待を類別詞に反映させる。また、飼育日記をつけたのは盲導犬を育成する側の人間だからこそ、この心理的な期待はさらに強まる。このような現象は「時間の類像性」(temporal iconicity)に関連している。ラネカー(2011/山梨(監訳):104)は、以下の例と図式を用いてこの概念を説明している。

- (21) a. I quit my job, got married, and had a baby.
 b. I had a baby, got married, and quit my job – in reverse order, of course.

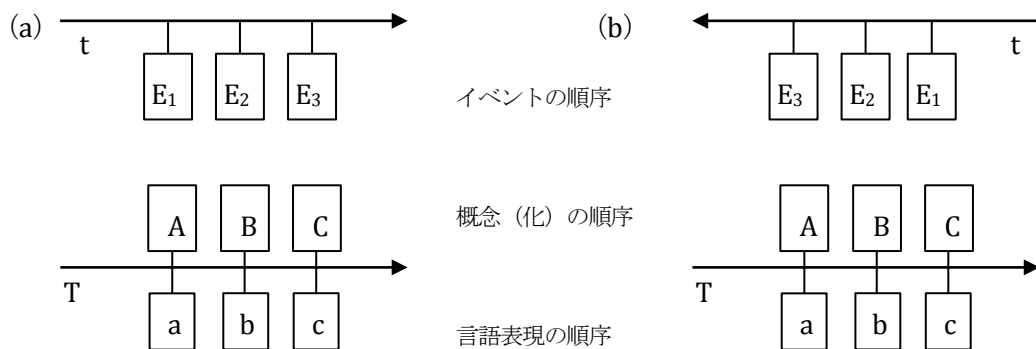


図 11 (ラネカー : ibid.)

(21a) は、「時間的の類像性」の典型例である。この場合、出来事の順序に関しては特に明示されていないが、認知主体は自然にこれらの出来事の順序をそのまま概念化すること

ができる。すなわち、出来事が生起する順序と、出来事が概念化された順序が一致する。それに対し、(21b) では、認知主体は出来事の順序に従うことなく、逆の場合もある。これらの例を図式化すると、図 11 の (a) と (b) にそれぞれ対応する。図 11 の E_1 , E_2 と E_3 は、それぞれ辞職、結婚、出産という出来事を表している。A、B と C は、出来事を表す言語表現の理解、もしくは概念構成の際に起こる各々のイベントの概念化を意味している。それに対して、小文字の a、b と c は、言語表現自体を表している。この際、言語表現と概念化は共に処理時間 (T) を介して並列に生じる。時間の類像性というのは、把握時間 (t)⁹ を介して、出来事の順序と出来事が概念化された順序 ($E_1 > E_2 > E_3$) が同じと認識された場合である。この場合、出来事、出来事の内容、そして出来事が述べられた順序は完全に一致する。さらに言うと、(21a) の場合、出来事の生起、出来事の内容と出来事の記述は全ての順序が一致するので、発話者にとっては、余計な処理労力が必要とされない。一方、(21b) の場合、言語表現を介して出来事は、 $E_3 > E_2 > E_1$ という順で心的にアクセスされている。しかし、実際には、 $E_1 > E_2 > E_3$ という順序で起こると理解している。このように、言語的にも、概念的にも処理の努力が必要とされる。

ここで問題にするのは、盲導犬になる前の犬を「頭」で数える際の認知主体の心的にアクセスである。この場合、 E_1 , E_2 と E_3 の出来事は、子犬として生まれたこと、訓練を受けていること、現役の盲導犬として働いていることの各々の段階を表している。すなわち、これらの出来事は、子犬 > 訓練犬 > 盲導犬の順序として理解され、概念化される。したがって、図 (12a) のように、言語表現 (a、b、c) と概念化 (A、B、C) の順序は、出来事の生起順序に対応し、三者の順序が完全に一致し時間の類像性が生じる。

また類別詞も、各段階の対象の条件 (犬の大きさや与えられた役割) により生じる。この場合、類別詞の「頭」と「匹」はそれぞれの基本用法に従い使い分けられる。それに対し、(12b) のように、出来事の順序が心的には逆にアクセスされる場合も考えられる。この場合、出来事の順序は変わらないが、認知主体の心的なアクセスの順序が逆になる (盲

⁹ ラネカー (2011/山梨 (監訳) : 102-103) によると、時間それ自体が概念の対象となるのが把握時間 (conceived time) である。それに対して、概念の媒体 (medium) として捉えられる時間は、処理時間 (processing time) と呼ばれる。

導犬>訓練犬>子犬)。したがって、言語表現と概念化の影響を受けている。この際、認知主体は、対象の子犬が必ず盲導犬になるという前提で、「頭」で数える。仮にこの仮説が正しければ、認知主体が期待を込める全ての対象に対して、この数え方が適用される。言い換えると、育成側である発話者は、日々愛情を注いでいる犬に対する過剰な評価により、現実状況に反する類別詞を用いることになる。(16)と(17)の例から明らかなように、生後間もない子犬は、まだ何の技能も習得できないにもかかわらず「頭」で数えられるのは、発話者の対象に対する過剰評価(期待)に基づいているからである。厳密に言うと、この場合、類別詞は認知主体の心的なイメージにより生じる。

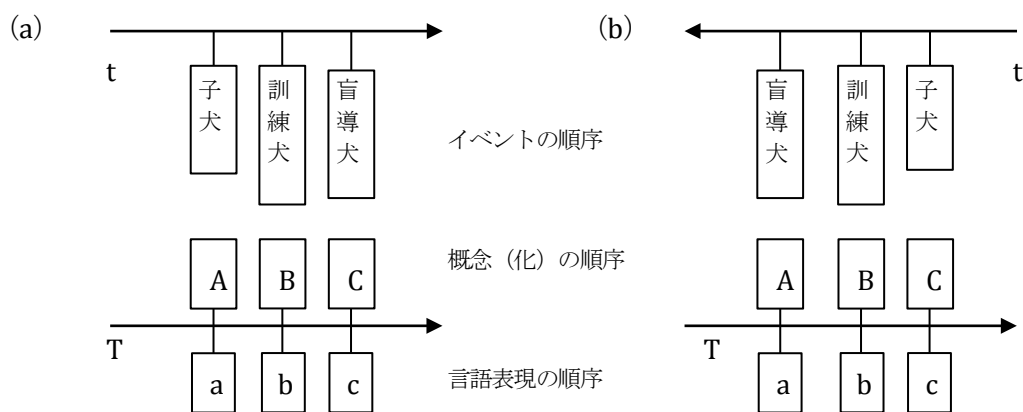


図 12

一方、(18)と(19)の例は、時間の概念化と関係なく、対象自体が持っているある側面に焦点化することにより、異なる類別詞が生じる。この場合、認知主体は、小型犬に与えられた役割より、その可愛らしさから、「匹」を用いる。特に、(19)の例から明らかなように、警察犬として採用した小型犬を「頭」で数えるのではなく、「匹」を使用した意図は明らかである。なぜならば、われわれの警察犬に対するイメージは、ジャーマン・シェパード・ドッグのようなある程度体型が大きい犬を典型例として喚起しやすい。それは警察犬の義務を果たすため、走りが早い大型犬の方が相応しいというステレオタイプな考えに基づいているからである。したがって、(19)の見出しを通して、以下の内容がある程度予測できる。

北海道警伊達署で29日、嘱託警察犬の試験に合格したパピヨン3匹と柴犬1匹に江口和男署長から嘱託書が交付された。任期は9月1日から1年間で、小型犬ばかり4匹の合格は珍しいという。(毎日新聞, 2017/9/1)

(<https://mainichi.jp/articles/20170901/k00/00e/040/210000c>)

この記事によると、発話者は、今回警察犬の試験に合格した小型犬が実に珍しいと思い、この側面にフォーカスした結果、「匹」を用いて小型犬であることを強調している。同様に、(18)でも同じ用法が見られる。その記事の中で「検疫探知犬」として空港に配属されたのは、訓練を得たビーグル犬のことを明示している。日本では、空港での検疫がスムーズに行われるように、人に可愛がられる小型犬を使う傾向がある。この際、発話者は、ビーグルに与えられた社会的な役割を背景化し、その可愛さと本来の体型に注目することによって、「匹」を用いるのだろう。このように、対象のどの側面を焦点化しどの側面を背景化するかは、認知主体の主観的な認識による。したがって、類別詞も認知主体の主観的な捉え方により左右される。

要約すれば、類別詞の生起は、物理的な世界の対象の特徴によるものではなく、認知主体の認識に基づいていると言える。例えば、社会的な役割を持つ犬に対して、「頭」で数えるのは、一つの典型例である。なぜならば、この種の用法は、基本的に犬の生まれ付きの生物的特徴によるのではなく、イメージによる拡張であるからである。以下では、この種の拡張のプロセスを考察する。

盲導犬、救助犬、警察犬、検疫探知犬など役割が与えられた犬がなぜ「頭」で数えるようになったかについては、次のように推論する。これらの犬は、人の手助けをするため、訓練を重ねて新しい技能を覚えざるを得ないという共通点が見られる。例えば、遭難した人を救助することや、目が不自由な人の日々の生活を支えることや、法律的に禁じられる麻薬などを見つけ出すことなどが例として挙げられる。すなわち、これらの任務を実行するため、置かれた状況に対して瞬時的に判断する知恵を備えている必要がある。言い換えると、訓練を通して、これらの犬はある特殊なスキルを身につけ、普通の犬よりも優れていると見なすことが可能となる。さらに、スキルと知恵のような能力に関しては、空間の

概念で喩え、例えば、スキルが高い/低い、IQが高い/低いといった表現ができる。したがって、この種の拡張は上/下の空間概念から拡張されたと考えられる。山梨（2000）は、日本語における上/下の空間メタファーの概念について考察し、その結果を表3に示している。

〈上〉	増	良	幸	理性	支配	繁栄	尊大
〈下〉	減	悪	不幸	感性	被支配	没落	謙虚

表3（山梨：ibid.）

上/下の概念は極めて重要な概念であり、この概念を通して様々な概念への写像が可能である。上/下の概念と大/小の概念は、ある程度オーバーラップしており、喩えられる概念もある程度共通している（3.1.3を参照）。すなわち、役割が与えられた犬に対して、「頭」で数えるようになったのは、おそらくその判断基準が対象の〈大/小〉から〈良/悪〉、〈支配/被支配〉などの概念にシフトしたからだと考えられる。以下では、蝶、カブトムシのような昆虫がなぜ「頭」で数えられるようになったかについて考察する。

3.3.2. 特定の「昆虫」の拡張用法

前節では、犬の大きさと社会的な役割による類別詞の生起を考察した。一部の用例に関しては、犬の特徴（大きさと役割）に関係なく、認知主体の心理的な期待により類別詞が使い分けられる。例えば、生後間もない子犬に対して、今後盲導犬として働けると期待（評価）を込めて「頭」で数える。したがって、この種の拡張は、比較的限られた用法である。なぜならば、この種の用法は、基本的に発話者の背景（職業、趣味、知識など）に深く関わってくるからである。以下では、他の拡張事例を介して、この現象を考察する。

筆者の調査によると、「頭」の拡張事例は、予想以上に多く検出された。その結果を表4に示す。

1.	ペンギン	コアラ	ビーバー	ラッコ	狐	猿	ウサギ	ラット	蚕
2.	カブトムシ	クワガタ	蝶	蛍	かめ				
3.	タツノオトシゴ								

表 4

表 4 のように、これらの対象に対しては、「匹」を用いるのが一般的であるが、「頭」で数える際、その背後には必ず認知主体の主観的な捉え方が関係する。飯田（2013：372）によると、この種の拡張は以下の五つのタイプに分類される。

大きさに関わらず、専門的・慣用的に、動物を数えます。

- a. 専門的に、実現の対象となる動物を数えます。「実験には 10 頭のラットを使用」
- b. 希少な動物及び昆虫類を「頭」で数えます。「絶滅に瀕したヤマネコ 5 頭確認」「希少な個体 3 頭を発見」
- c. 人間にとって、貴重なもの・高価な小動物・昆虫類などを数えます。「貴重なクワガタ 1 頭一万円」かつて、養蚕業では蚕を「頭」で数えました。
- d. 慣用的にチョウクを数えます。
- e. 人間にとって、脅威を与える生物を数えます。「田を食い荒らすジャンボタニシ 100 頭捕獲」

(飯田：ibid.)

しかし、上記の a~e の分類は、いずれも認知主体の対象に対する価値判断に基づいている。またこの種の数え方は、基本的に専門的な用法と考えられる。なぜならば、貴重な生物かどうかの判断に関しては、ある程度の専門的な知識がなければ分別できないからである。すなわち、この種の用法は、基本的に一種の「業界用語」と言ってもいい。(22) のように、ラットを「頭」で数えるのは、ラットを使って実験する研究員に限られる。それ以外の人に対しては、この背景知識がないのでラットに関する犠牲と価値を同感できない

と考えられる。

以下では引き続き、タイプごとに例を挙げながら、類別詞の動機付けを考察する。

(22) 現在でも、ラットは、医学、生物学、生理学、薬理学、神経科学、栄養学、遺伝学などのさまざまな分野で利用されている重要な実験動物です。その利用数は年間数百万頭規模です。日本では、平成 22 年度で約 190 万頭のラットの販売実績がありました（公益社団法人日本実験動物協会調べ）。

（京都大学 実験用シロネズミの起源，2012/8/17）

（http://www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/news_data/h/h1/news6/2012/120817_2.htm）

m)

● タイプ 1（人間との関係）

まず、タイプ 1 の動物は、人間との関係により「頭」で数えるようになったと仮定する。この種の動物は、貴重な資源と見なすことができる。「頭」の使用は、動物の大きさに関わらず、猟で獲った大型の獲物からの類似性により、「頭」で数えるようになったのだろう。言い換えると、類別詞の「頭」は、獲物のカテゴリーを対象とするとと言える。

近代になると、機械の発達と共に農耕の技術も良くなり、猟に出て食糧を捕獲する必要もなくなった。しかし、環境破壊の影響により、生物は生息しにくくなり、繁殖も少なくなってきた。特に、コアラとペンギンがこの例として挙げられる。(23) と (24) のように、動物園での人工保育さえも手間がかかる現在では貴重な動物である。このような認識により、コアラとペンギンのような動物を「頭」で数えるようになったと考えられる。この際、「頭」の判断基準は、対象の大小から対象の価値の大小にシフトしたと考えられる。また、蚕もその拡張の典型例の一つとして挙げられる。(25) のように、養蚕業の人にとっては、蚕は生活を支える非常に貴重な存在であり、その貴重さはその呼び方にも見られる。

(23) コアラ飼育、動物園ピンチ 最盛期の半分以下、41 頭に。

(日本経済新聞 電子版, 2017/4/19)

(https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG18HA7_Z10C17A4CC0000/)

(24) ペンギンに翼帯というものをつけて、1 頭 1 頭見分けています。

(熊本市動植物園 飼育ブログ：ただ今、ペンギンに薬を飲ませてます、
2014/5/9)

(http://www.ezooko.jp/imgkiji/pub/detail.aspx?c_id=28&id=388)

(25) 桑の葉をムシャムシャ「おかいこさま」約 5 0 0 頭。

(朝日新聞デジタル, 2017/6/27)

(<https://www.asahi.com/articles/ASK6P6R6QK6PUEHF00V.html>)

以上のように、タイプ 1 は、基本的に認知主体のライフスタイルに関連している。また、認知主体のライフスタイルの変化と共に、生起する類別詞が異なる可能性も考えられる。実際の用例から見ると、現代日本語において、タイプ 1 は、主に「匹」で数えるのが一般的である。「頭」で数える場合は、ニュース、あるいは動物園での紹介でよく用いられる表現である。さらに、かつて日本は養蚕の大国としてよく知られていたが、現在では少なくなってきたようで、次第に「頭」で数えなくなっている。

● タイプ 2 (認知主体による価値判断)

タイプ 2 に関しては、カブトムシ、蝶などのような対象を全て「頭」で数えるのではなく、そのカテゴリーの希少価値があるものに限って「頭」で数える。この際、用いられる判断基準は、認知主体の主観に基づいている。以下に具体例を挙げる。

(26) オオクワガタ レッドアイ (能勢) 幼虫 3 頭。

(カブトムシ、クワガタムシ専門店, 2018/6/22)

(https://store.shopping.yahoo.co.jp/musiya/564.html?sc_i=shp_pc_search_itemlist_shsrg_title)

(27) ほたるを捕まえることもおやめ下さい。“1頭くらい…” “自分一人だけなら…”と気安く捕えていく事がこれから先のほたるの数を減らす要因となってしまうのです。

(湯河原温泉観光協会 Web 湯河原 ほたるの宴・花菖蒲展, 2018/6/22)

(<http://www.yugawara.or.jp/event/hotaru/index.php>)

この種の拡張は、対象に関する知識に依存している。したがって、このような用法は、よく昆虫専門の雑誌や昆虫研究者と昆虫マニアの間で用いられる。これに対し、専門的な知識を持たない認知主体の場合、「匹」で数えるのが一般的である（例 (28) を参照）。

(28) ゆうパックの誤配でクワガタ死ぬ 7匹分 5600円の支払い命じる。

(産業 WEST, 2015/10/30)

(<https://www.sankei.com/west/news/151030/wst1510300054-n1.html>)

以上の例から明らかなように、タイプ2は、専門的な知識を持つ人の数え方である（いわゆる、一種の「業界用語」とも言える）。この際、類別詞の判断基準は、対象の特徴によるのではなく、認知主体の背景知識による。またこの種の拡張は、認知主体の背景知識により、対象の価値が判断され動機付けられる。この際の判断基準は、対象の〈大/小〉から価値の〈大/小〉の基準にシフトしている。

● タイプ3（類似性による拡張）

タイプ3は、類似性による拡張用法であり、その典型例はタツノオトシゴのみである。

(29) のような拡張用法が検出された。

(29) しかもタツノオトシゴの寿命は2年ですから

繁殖させないとあつというまに

1頭もいなくなります。

(たぐろーの水槽日誌 タツノオトシゴ飼育の基礎知識 3, 2017/10/9)

(http://s.webry.info/sp/yuyado.at.webry.info/201710/article_4.html)

この種の拡張について、日本の常識研究会（2005）は以下に説明している。

全長八センチほどで、伝説上の動物、竜のような姿をした魚。ヨウジウオ科に属する。江戸時代まで、わが国ではその姿形から魚とは思われず、虫として扱われてきたそうだ。生物としては「匹」で数えるが、竜や馬に似た姿から「頭」を用いることもある。 (日本の常識研究会編 *ibid.* : 71-72)

すなわち、認知主体は、対象となるタツノオトシゴの外見により、竜と馬の姿を喚起し、その類似性に基づいて「頭」で数えるようになっている。ただし、この種の連想は非常に主観的であり、個人差が認められるだろう。

「頭」の拡張用法は、〈人間との関係〉、〈認知主体による価値判断〉と〈類似性による拡張〉の三つに分類される。このように、類別詞は単なる対象の特徴により生起するのではなく、われわれのライフスタイル、背景知識と連想に深く関わっている。

3.3.3. まとめ

本章では、主に「頭」の基本用法から拡張用法までを含め、その判断基準を考察した。大きさの概念を含む類別詞の「頭」に関しては、形を用いて対象の大きさを区別することになる。また、「頭」の基本的な判断基準には、客観的な「静的な基準」と主観的な「動的な基準」の二つが用いられる。「静的な基準」は、大型動物の典型例のみに適用する。それに対し、大型動物のより周辺的な事例は「動的な基準」に適用する。すなわち、われわれは動物の大きさを判断する際、止まった動物の高さを基準とするのではなく、対象の最大大きさ（相手を威喝する体勢）を基準とする。この際、認知主体は、百科事典的な知識

に基づいて対象動物の姿を想起し、比較対象と比べて類別詞を選択する。

また、「頭」の拡張用法に関しては、本稿では、体型と人間に近い大型犬を取り上げ、体型と役割の変化がいかに関節詞に影響を及ぼすかについて考察した。筆者の調査によると、検出されたいくつかの例外から見れば、類別詞の選択は、発話者の捉え方にも関わってくる。具体的に言うと、これから盲導犬になってほしい子犬に対して、期待を込めて、「頭」で数える用例も確認された。この場合、認知主体自らの関心と期待が高まる現状をそのまま類別詞に反映している。また、その逆の場合も考えられる。例えば、盲導犬の関係者たちは、犬の世話をしている間に犬に与えられた社会的な役割を忘れて、単純に「この犬かわいいなあ」と思う瞬間に、「匹」で数えることも考えられる。

さらに、「頭」の拡張事例の一部には、社会と文化により慣習的な使い方として定着したものも含まれる。チョウ、ペンギン、タツノオトシゴなどがこの種の例として挙げられる。本研究では、これらの拡張事例を〈人間との関係〉、〈認知主体による価値判断〉と〈類似性による拡張〉の三つに分けた。この種の拡張は一般の用法と異なり、いずれも特殊な文脈と場面に依存している。これは一種の「業界用語」であり、専門分野の人に限定して用いる数え方である。類別詞と文脈との依存性に関しては、さらに次の章で詳しく考察する。

本章では、認知主体の認知（心的なイメージ、連想など）が、類別詞の生起に影響を与えることを明らかにした。類別詞は、人が作り上げたカテゴリーであり、日常生活において、使う場面、話す相手、また発話者の関心がおかれる場所などによって、生起する類別詞が異なる。この現象は、日本語における類別詞の特徴にも反映されている。日本語の類別詞は、ある対象に対して複数の数え方をすることができる。例えば、ウサギを数える際に、「匹」、「頭」、「羽」と「耳」といった類別詞を用いる。すなわち、同じ対象に対して認知主体が異なる側面に注目すると、用いられる類別詞が異なってくる。言い換えると、類別詞は、認知主体の主観的な解釈によって左右され、きわめて柔軟性を持つ標識であると言える。

第4章 類別詞の形成と機能

言語は人間の認知活動の特徴を最もよく示すものの一つと言われる。言語の体系を解明するためには、言語で切り分けた事物の分類のメカニズムを理解しなければならない。類別詞の考察を通して、言語に反映された概念カテゴリーの性質に関してのデータを観察することができる。異なる言語は同じ物事に対して異なる側面に焦点を当て、またそれに応じて言語表現も異なる。類別詞は、東アジアから太平洋諸島、またアメリカ先住民の言語に多くみられるが、その中でも日本語と中国語ではその表現が極めて豊かである¹。日常生活において、われわれは無意識に身の回りの物事を分類して類別詞を使いこなしている。日中類別詞は、ある対象に対して複数の類別詞が生じるという特徴がある。すなわち、一つの対象に対し、複数のカテゴリーに属することがある。さらに日中の類別詞では数多く存在するだけでなく、その体系同士が互いに影響し合っている。実際の言語使用から見ると、「頭」と「匹」の境目はかなりファジー (fuzzy) であり、また、両者の使用はある程度混在している。したがって、日中類別詞の体系は複雑である。しかし、類別詞によるカテゴリーを細かく分類すれば分類するほど、母語話者にとっては大きな負担になるにもかかわらず、この数え方は途切れることなく、代々伝えられてきた。その理由は、おそらく類別詞とわれわれの生活に密接な関係があるからだ。言い換えると、類別詞はわれわれの生活の場面、習慣、文化を反映すると言える。

本章では、認知言語学の理論に基づいて、類別詞の形成と機能を明らかにする。また、類別詞とイメージの関連性について詳しく考察していく。類別詞は単位でありながら、相手に対象のイメージを伝える機能も備えている。このような機能は、一般に「本」のような形状類別詞に限られると思われるが、実はそれだけではない。ほとんどの類別詞のイメージを伴っていると考えられる。この仮説を検証するため、対象動物の大きさに関わる類

¹ 日中類別詞の数量に関し飯田 (1999) は、現代日本語の助数詞については、日常で用いられているのは約 300 語前後と述べている。それに対して、中国語において、専門領域や古文で用いられていたものを含めれば、800～900 語、日常的に使われているのは約 200～300 語と言われている (cf. 橋本 2014a : 10)。

別詞の「頭」を取り上げ、大きさと形状との関連性を分析する。さらに、イメージがいかに類別詞の使用と選別に影響を及ぼすかについても考察する。

4.1. 類別詞と認知主体の視点の反映

類別詞の選択の判断基準は、認知主体の主観的な捉え方に基づいている。しかし日中の類別詞では、同一の対象に対して、一つ以上の類別詞が使われるという特徴がある。以下では、この現象について、具体的な例を挙げて考察する。

通時的な視点から日中類別詞の変遷を考察した三保 (2006:141-142) によると、牛は「頭」と「蹄」²の二つの数え方がある。ここでは、この二つの身体部位で牛を数えるようになった要因を考察する。図1を見てみよう。

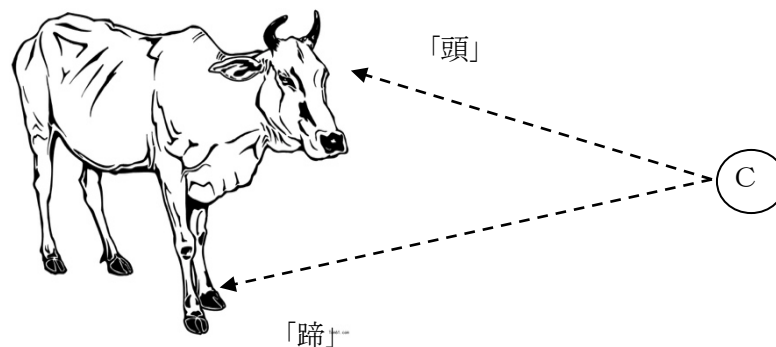


図1

図1は、認知主体の視点と対象との関係を示す図式である。図1の丸で囲まれたCは認知主体 (conceptualizer)、破線の矢印は認知主体の視線を示す。類別詞の「頭」と「蹄」が使われる場合、認知主体の視点は対象 (牛) の異なる部分に焦点を当てる。すなわち、「頭」で数える際、認知主体の視線は牛の「頭部」にフォーカスが置かれる。この際、牛の頭部が前景化され、それ以外の部位が相対的に背景化される。一方、「蹄」を用いる場合、認知主体の視点は牛の「ひづめ」に集中する。この際、牛のひづめが前景化されると共に、そ

² しかし、「蹄」は古代の数え方であり、現代において、ほとんど使わない。「中国古代の『史記』に「牧馬兩百蹄」とあるが、これはその50疋をいう。」(三保2006:142)

れ以外の部位が背景化される。したがって、両者は図と地の反転として捉えられる。

以上の考察から、類別詞は忠実に認知主体の視点を反映していると言える。また、類別詞の特徴により、認知主体の対象に対する捉え方もある程度読み取ることができる。以下の具体例を見てみよう。

(1) 一匹の牛を殺すのに何人も掛ったりして！『踊る地平線』

(1) の場合、認知主体は牛の〈生物的な側面〉に焦点を当て、「匹」を用いる。この際、個体の特徴と関係なく、牛は生物であるという事実により類別する。このような例に対して、日本語話者は違和感を覚えるかもしれないが、言語使用において実際に使われている例である。松本 (1991 : 86) によると、「スズメ一匹」や「牛一匹」はある程度可能であり、実際の使用例も観察されると指摘している。類別詞に基づく日本語話者の牛の捉え方は、少なくとも三つにまとめることができる。

- A. 「頭」を用いる際、牛を大型動物として捉える。
- B. 「匹」を用いる際、牛の生物的な側面を着目し、牛を一つの動物として捉える。
- C. 「蹄」を用いる際、牛はひづめがあり、そして四つの足で歩行する動物として捉える。

このように、上記のいずれも牛のある側面を焦点化することにより、類別詞になったと考えられる。すなわち、類別詞の形成と認知主体の視点は密接な関連がある。また、同一の対象に対して、日中では複数の数え方が生じるという特徴は、おそらく認知主体の視点とその捉え方によるものである。論理的に考えると、動機付けさえあれば、対象のどの側面に焦点を当てても類別詞を形成するのは可能である。この推論を検証するため、以下では中国語における牛の数え方を考察する。

中国語における牛の数え方には、少なくとも「頭 (tóu)」、「蹄 (tí)」³、「條 (tiáo)」、「隻 (zhī)」四つがある。その具体例は以下に示す。

(2) 六十六歲的陸老頭…養了六十六頭牛。『六十六頭牛』

(66歳の陸さんは…66頭の牛を飼いました。)

(3) 買四蹄車下牛，賣三尺匣中劍。『歸田』

(車を引っ張る牛を一頭買い、劍一本を売り出しました。)

(4) 動物們一直到晚上都沒進食，最後受不了了，有隻牛用角撞開貯糧庫大門…。

(動物たちは夜までずっと空腹で、もう我慢できなくなった時に、一頭の牛は角で糧食を置く倉庫の扉にぶつけて…)『動物農莊』

(5) 一條牛可以換一個老婆？…

(一匹の牛と女房一人を引き換えれる？…) (信傳媒、2018/4/18)

(<https://www.cmmedia.com.tw/home/articles/9491>)

以上の例から明らかなように、日中両言語において、牛に関する数え方はかなり類似している。以下では、両言語における共通の数え方から見てみる。

(2)~(5)は、日本語に対応する数え方である。なぜならば、「隻 (zhī)」は日本語類別詞の「匹」に対応する類別詞であるからである。すなわち、両者とも牛と共起する際に、対象の〈生物的な側面〉をプロファイルする。このように日本語においては、古くから中国語の類別詞 (量詞) を導入して以来、両言語は互いに影響し合い、その結果事物に対する捉え方もある程度類似している。

また、(5)のような特殊な数え方も検出された。「條 (tiáo)」は形状を表す類別詞であり、主に細長い形状の無生物を対象とする。しかし、中国語ではこの種の類別詞を用いて、牛、犬、狼、ロバなどの動物を数えることができる。なぜ中国人にとっては、これらの対象動

³ 陳 (2014:149) によると、「蹄 (tí)」は馬、牛、駱駝といった対象動物を数える際、用いる類別詞である。その数え方に関しては、一頭の馬は四つのひづめがあるので、馬一頭を「四蹄」と言う。この数え方は、現代中国語においては、ほとんど見られない。

物が細長い属性を持つ「條 (tiáo)」のカテゴリーに属するかについては諸説がある。しかし、どの説にしても有力な証拠を出せないため、その拡張の要因は未だに解明されていない。この種の慣習的な数え方は、おそらく中国の文化的、社会的な側面に深く関わると考えられる。その拡張の動機付けに関しては、次節以降で詳しく考察する。

以上の考察から明らかなように、類別詞の形成は、認知主体の視点に基づいている。また、認知主体の主観的な捉え方により、同一の対象は複数のカテゴリーに属することも可能となる。認知主体の認識は、深く類別詞の体系に影響を及ぼしている。類別詞の形成をさらに観察するため、以下ではまず類別詞の「頭」を取り上げその基本概念を考察する。

4.1.1. 「頭」の基本概念

類別詞の使用とその範疇は、時代により変化していく。厳密的に言うと、これは認知主体が暮らしている環境(社会)の変化と共に、生活習慣や日常生活で用いる道具が変わり、言語表現にもその変化が反映されている。具体例として、中国語類別詞の「頭」が挙げられる。「頭」のカテゴリーは、時代ごとに大きく拡張したり、縮小したりする傾向がある。各時代における「頭」のカテゴリーの変化に関しては、以下で詳しく考察する。また、「頭」は身体の一部であるので、この頭部の概念はいかに類別詞の使用に影響を及ぼすかについても考察する。従来の類別詞研究は、類別詞になる前の名詞の意味と概念に注目せず類別詞の用法だけ考察している。しかし認知的には、意味はそれに関連するありとあらゆる知識と経験に基づいて概念化されている。またわれわれは身体経験を介して、様々な概念を認識し習得することができる。

言うまでもないが、頭的基本概念を理解するには身体全体の概念を喚起する必要がある。すなわち、頭の内容は身体に依存し単独で把握することができない。ただし、類別詞として用いる際、認知主体により「頭」が焦点化されると共に、ほかの身体部位が相対的に背景化される。その認知プロセスは図2に示される。

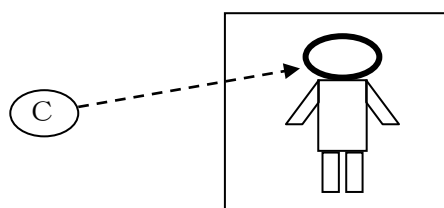


図 2

図 2 のサークルで囲まれた C は認知主体 (conceptualizer) であり、破線の矢印は認知話者の視線を示す。この場合、前景化された頭は、認識主体の視線によりプロフィールされる (プロフィールされた部分を太線で表す) のに対して、背景化された身体はベースになる。(背景化された部分は実線で表す)。すなわち、背景化される部分 (身体) は、完全に無関係ではなく、「頭」の概念と意味に深く関わっている。以下では、「頭」を類別詞として使う際の指示関係を考察する。

4.1.2. 部分と全体との指示関係

頭は身体に依存し、両者は〈部分/全体〉の包含関係として捉えられる。日常言語では、身体部位の特徴を用いて人を指示する。以下に具体例を示す。

(6) 赤鼻が友達に電話をしている。

(7) 禿げ頭が娘を叱っている。(山梨 2000 : 89)

(6) と (7) は、近接関係に基づく言語の慣用表現 (いわゆるメトニミー) である。このような言語表現が生じる原因に関し、山梨 (2000 : 87) は以下のように説明している。

日常言語のなかには、伝えようとする意味のすべてを言語にしているのではなく、その一部にフォーカスをあてて表現し、他の部分は文脈によって補完していく簡略的な表現が広範に見られる。(山梨 : ibid.)

(6) と (7) の例から明らかなように、主語となる赤鼻と禿げ頭はいずれも身体部位の一部を介して、その問題となる人物を指示している。このようにある身体部位を用いて、人を表すメトニミー的な言語表現は広範に存在する。例えば、手が足りない、働き手、投手などの例が挙げられる。この場合には、生産の手段になる対象、対象の職業にフォーカスし、認知主体の視線が仕事をこなせる手に注目している。また、手と身体の関係に基づいて、言語化された「手」から仕事をこなす対象を推論するのは容易である。身体部位と全体の包含関係は図3に示される。

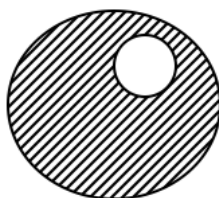


図3 (山梨 ibid : 89)

この場合、言語化された赤鼻、禿げ頭、手といった身体部位に焦点化し(白い丸で表す)、これを参照点 (reference point) として、ターゲット (target) の対象人物を指示することが可能となる。

この近接関係に基づいて、身体部位を用いて人を数える類別詞が可能になる。特に、身体類別詞の「頭」は、人を数える類別詞として用いる動機づけに関して他のパーツより相対的に強い⁴。なぜならば、「頭部」は命を維持するため、他の臓器に指示を出したり、情報を処理したりする非常に重要な身体部位であるからである。さらに言うと、人とコミュニケーションする際に、相手の顔を見つめる習慣がある。「頭」は以上の要因によって動機づけられ、日本語でも、中国語でも人を数える単位として使われる時期があった⁵。

⁴ 身体のパーツは「頭部」、「胴体」と「四肢」に分けられる。ここで述べたほかのパーツは「胴体」と「四肢」を指す。

⁵ 身体類別詞の「頭」に関しては、歴史的に遡ると、日中両言語ともある時代に渡って人を数える類別詞として使われたことがある。飯田 (2013 : 357) によると、「頭 (ず)」は「頭 (とう)」より古い用法であり、人の頭数、すなわち人数を数える。また、「一人頭 (あたま) 一万円ください」という古い用法もある。しかし、現代日本語においては、類別詞の「頭」は主に大型生物を対象として数える。一方、中国語における「頭」の使用について、魏晋南北朝において「頭」はすべての生物と植物を含めて対象として数えられる。しかし、魏晋南

しかし、現代の日中両言語では、このような用法は殆ど見られない。「頭」で人を数えなくなった原因に関しては未だ明らかになってない。中国語では、人を「頭」で数える際に、軽蔑する意味合いが含まれ差別的になりかねない。郭 (1962 : 389) によると、男尊女卑の観念は古くから中国社会に浸透しているので、このような風習が直接に類別詞の選択に反映している。

…男子のみの人数をいふ時には、ほかに、人名表に列記されてゐるといふ意味で「名」といふ陪伴詞も後には生じた。また尊卑貴賤を論ぜず、たゞ人数をかぞへるときには、「個」を用ゐるのが最も普通で、尊敬する時は、間接にその座位でいふので「位」を用ゐるのである。 (郭 : ibid.)

したがって、現代中国語において、「頭」で人を数えなくなったのはおそらく差別をなくすためと憶測することができる。本稿は、類別詞から生じる差別に関しては研究の対象としない。しかし、世界を類別詞で切り分ける際、その区別も一種の差別として捉えることもできる。したがって、ある特定の類別詞を用いて、対象を軽蔑することもなくはない⁶。また、類別詞が生じる差別化に関する研究はほとんどないので、この問題を考察する必要がある。以下では、認知的分析により、「頭」の指示関係を考察する。

ラネカー (2011/山梨 (監訳) : 108-111) が提唱した参照点関係 (reference point relationship) に基づいて、身体類別詞の「頭」と対象生物との指示関係を分析する。

北朝から宋朝の時代に渡って、「頭」で人を数える際に、差別という意味合いが含まれる。したがって、奴隸、僕 (男)、女の子、強盗、野蛮人 (古代、中国北方の未開地方の人を「胡人」と呼ばれる) などの対象と共起しやすい (陳 2014 : 137-140)。

- | | | |
|---|-----------------------|--------------------|
| 4 | …奴一頭、婢一頭。(奴隸) | 『北戸路』卷二「米麩」 |
| 5 | 梁 簡文帝書言吉安王餉胡子一頭。(野蛮人) | 『北戸路』卷二「米麩」 |
| 6 | 有一婆羅門生兩頭女，皆端正。(女の子) | 『諸經要集』卷 14 |
| 7 | 有數頭男，皆如奴僕。(僕 (男)) | 『全三國文』『吳，虞翻文』「與弟書」 |

⁶中国語では、やくざや、強盗などのような悪い集団を数える際、類別詞の「窩 (wō)」を用いる。例えば、「一窩流氓」はその典型例として挙げられる。「窩 (wō)」が名詞として使う場合は、動物 (特に小動物) の巣を指す。そこで中国語話者は、小動物が巣の中に身を潜むという習性から、悪い集団も同様に密かに集会場所を隠すという特徴に写像し、「窩 (wō)」は人の集団を数えるようになった。さらに、「窩 (wō)」は軽蔑の意味を含み、一般に身分の高いグループと共起しない。

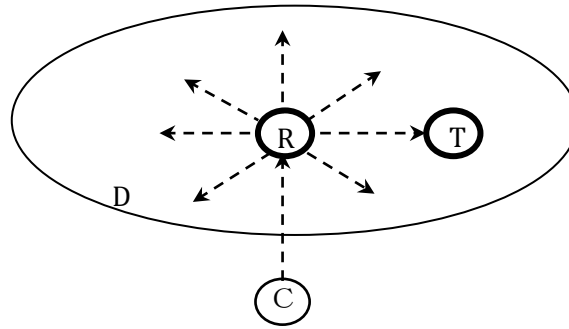


図4 (ラネカー : ibid.)

図4は、プロファイルされた「頭」を参照点 (R) として、ターゲット (T) としての対象生物に至る認知プロセスを示している。この場合、「頭」で喚起するすべての候補対象の範囲をドミニオン (D=Dominion) と呼ぶ。この指示関係からわかったのは、「頭」を指示する対象が人から大型動物にシフトしても、その〈部分/全体〉の関係は変わりなく継承している点である。言語話者は「頭」を用いて対象生物を数える際、図2で示した指示関係の不一致に対して意識していない。すなわち、「頭」で指示するターゲットは大型生物の頭部ではなく、むしろ「頭」と近接関係がある対象生物自体を指すのが目的である。例えば、「二頭の馬が走る」という例をみた場合、走るという動作をするのは馬の頭部ではなく、馬自体であるのは容易に理解できる。

ところで、類別詞の「匹」も「頭」と同じような指示関係と捉えることができる。なぜならば、「匹」という字は馬の尻からきた象形文字といった説があるからである。したがって、〔部分/全体〕の関係と対象物との指示関係には、いずれの場合も成立している。ここまで考察したように、「頭」と大型動物の間には〈部分/全体〉の指示関係が存在している。しかし、一部の拡張事例に関しては、文脈がない限り拡張が成り立たない場合もある。以下では、「頭」の拡張事例を介して、類別詞の文脈依存性の問題を考察する。

4.1.3. 現代日本語における拡張事例

4.1.3.1. 類別詞と文脈依存性

本研究では、「頭」の拡張事例を〈人間との関係〉、〈認知主体による価値判断〉と〈類似

性による拡張)の三つに分類する(3.3.2を参照)。厳密には、このような拡張事例は、主に認知主体の主観的な認知に基づいているが、程度さが見られる。特に、〈認知主体による価値判断〉は専門分野の人が用いる数え方なので、この種の拡張は、文脈に対する依存性がより強いと考えられる。言い換えると、普段の日常生活においてこのような数え方は普及していないので、文脈なしで使われると文法に反するため多少違和感を感じる。以下では、蚕の例を取り上げ、類別詞の文脈依存性を考察する。

ここで蚕を取り上げる理由は二つある。繊維が発明される前の時代には絹の重要性が高く、明治時代に日本は中国を追い越して世界最大の生糸輸出国となった⁷。しかし、現代の日本では養蚕業が衰え、現役の労働者の平均的な年齢は約70歳以上と言われている。このような時代の移り変わりにより、蚕に対する重要性がなくなると共に、その数え方が変化したことに注目する。また一般的に、養蚕は換金性が高いと見なされる。なぜならば、蚕の生産性は、養蚕農家の収入に直接影響を与えるからである。すなわち、養蚕農家にとって、蚕に対する価値は他の昆虫と比べて非常に高いことが予想できる。このように、現金収入源であった蚕を大切にすると共に、その強い思いを言語表現に反映したと考えられる。以下の具体例を見てみよう。

2014年に世界文化遺産に登録された群馬県富岡市の「富岡製糸場」。多くの観光客でにぎわう製糸場の一角では通年、蚕の生態展示をしている…見学コースの一角、大人の薬指ほどの大きさの白い蚕が、ざわざわとうごめいている。いったい何匹いるんだろうか。

「ざっと500頭ぐらいです」と企画広報係の原田知也さん(34)。「カイコは家畜なので1頭、2頭と数えるんです。農家の貴重な収入源だったので、『おかいこさま』とも呼ばれて大切にされてきました」…1968年に約3千戸あった富岡市内の養蚕農家は、現在12戸。市では2年前から、養蚕への理解を深める取り組みとして自宅で蚕を繭まで育てる「市民養蚕事業」を展開している。稚

⁷「明治政府は、生糸が外貨を獲得する上で重要な輸出品であることに着目し、蚕糸業を積極的に保護・奨励した。その結果、明治20(1887)年には、生糸生産量でイタリアと並び、明治39年(1906)年には、生糸輸出量で中国を凌駕し、世界最大の生糸輸出国となった。」(村上2007:210)

蚕100頭と、人工飼料や蚕が繭をつくるための「まぶし」と呼ばれる枠のセットを配布。今春は市民を中心に約150人に271セットが配られ、育てられた繭は製糸場の糸とり実演などで使われている…。(朝日新聞デジタル, 2017/6/27)

(<https://www.asahi.com/articles/ASK6P6R6QK6PUEHF00V.html>)

これは、2014年に世界文化遺産に登録された富岡製糸場⁸についての記事である。この記事を通して、蚕に対する数え方が二つ観察できる。まず記事の冒頭に、この製糸場で飼育されている蚕は一体何「匹」いるかという表現が用いられる。それに対し、蚕を「頭」で数える例が観察される。このように、同じ記事の中において、二つの数え方が検出されたのはなぜだろうか。本研究では、この種の現象は、類別詞の文脈依存性によるものであると考える。この場合、蚕に対して「頭」で数える時はそれなりの文脈（あるいは背景知識）が必要とされる。

まず、文頭の蚕の総量について自問自答する際、一体何「匹」がいるかという表現が用いられる。この表現を通して、現代の日本社会における蚕の位置づけが明らかになる。近代になると、繊維の開発と共に絹の需要が激減したことにより蚕は経済価値を失い、ごく普通の虫のように「匹」で数えるのが一般的になる。以下に実際の用例を挙げる。

(8) この日死んだ蚕は10匹。残りは28匹です。何匹が生き残ってくれるのか。

(さくらっぴのかいこの観察日記, 2005/7/10)

(<http://www2.tranzas.ne.jp/~kinosita/kaiko2005.html>)

(9) 梱包された箱を開けると、ちょっと弱った感じですが、3cm程に育った12匹のカイコが生きていました。

(マッキーの教育：家でカイコを飼育する(1), 2014/5/16)

⁸「明治政府の殖産興業で1872年に設立された富岡製糸場（2014年に世界文化遺産に登録）に始まり、全国各地に製糸場が整備され、養蚕が広まった。旧農林省の「養糸業要覧」や中央蚕糸協会の資料によると、最盛期の1930年、全国にある桑畑の面積は70万ヘクタール、繭の生産量は約40万トン、養蚕農家は220万戸のうち、約4割を占めていた。2015年に養蚕農家は368戸にまで減少し、繭の生産量は約135トンになっている。」(朝日新聞朝刊 2016/12/21)

(https://blog.goo.ne.jp/hps_tokyo/e/82863fe6a1242eeffeac822bf97aa2ee)

(8) と (9) の例から明らかなように、生業ではなく趣味のために養蚕する場合、「匹」を用いる度合いが高くなる。なぜなら、自宅で蚕を飼う行為は、経済価値を生み出す目的ではなく、蚕の生態を観察するのが目的だからである。したがってこの場合、蚕は犬や猫のようなペットとして飼われているので、「頭」で数える動機付けが次第に薄れていったと考えられる。それに対して、二段目の記事において、蚕を「頭」で数えることが確認される。この段落では、過去から現代に至る養蚕業の歴史的な背景を紹介し、また、養蚕農家にとって蚕の大切さを述べている。このような文脈があるから、蚕を「頭」で数えるようになったと考えられる。

蚕を「頭」で数える際には、少なくとも二つの場合が考えられる。一つは、文脈による拡張である。もう一つは、発話者の背景知識による拡張である。前者は、文脈の明示が要求されるので、より観察しやすい。それに対して、後者の方は、認知主体の知識、育てられた環境と経験に関わってくるので、すべての人が共有しているとは言えない。すなわち、この種の拡張は、専門的な知識を持つ人に限る。この用法は地域的であると予想することができる。以下では、この種の拡張例をさらに考察する。

4.1.3.2. 背景知識による拡張

類別詞の拡張用法の一部は、文脈に深く依存する。しかし、文脈に依存することなく、使用する場合もある。この場合の類別詞の拡張は、認知主体の背景知識により動機付けられている。以下では、養蚕業に関連する人たちの蚕の捉え方かについて考察する。

村上 (2007) は、日本の養蚕業を直撃する問題と将来における新たな可能性について研究している。養蚕の関係者たちは、蚕の存在を以下のように説明している。

カイコの起源は古代中国であり、およそ 5 千年の歴史があると考えられており、その祖先はクワコであったと推定されている。これは犬や馬、羊、牛などに比べ

るとかなり新しいと云えるが、野生の動物を飼いならし、改良を加えて家畜化する過程で、カイコには多くの家畜とは違った淘汰圧が加えられたのではないかと私は考えている。それは今のカイコ（家蚕）が、柁も蓋もないところに放置しても逃げ出してしまうことがない、と云えるまでに運動能力を喪失している上に、野外に放置して次代を作り、野生化することがないと云えるまでに作り変えられているという点にある。

今まで野蚕と呼ばれ、糸を吐いて繭を作る昆虫は数多く知られており、その一部は野外に作った繭を採取して繊維として利用されている。これらの昆虫は野外でも自由に移動し、次代を作り続けている。家畜も人の手を離れば野生化し、次代を作ることができる。その意味で奇異な表現ではあるが、私は、「カイコはどんな家畜よりも家畜化された虫である」と考えている。（村上 ibid: 209）

すなわち、養蚕の関係者及びその地域の人たちは、蚕を家畜と見なし、またこの知識を互いに共有していると考えられる。したがって、この人たちは蚕を「頭」で数える。この場合、「頭」の拡張は、大きさによるものではなく家畜の類似性による。認知的な観点から見れば、この種の事態は、概念マトリックスとドメインの関係を介して説明することが可能となる。以下では、両者の定義を簡単に紹介してから、この種の事例の考察を行う。

両者の定義に関し、ラネカー（2011/山梨（監訳）：56）は以下のように説明している。

言語が表す意味とは、概念内容とその概念内容に基づく解釈である。認知文法では、概念内容を参照する方法としてドメイン (domain) という用語を用いている。ある言語表現は、意味の概念基盤として（すなわち解釈される概念内容として）、ひとまとまりの認知ドメインを喚起すると言われている。このドメインのまとまりは、集合的にマトリックス (matrix) と呼ばれ、大半の言語表現のマトリックスは多数のドメインで構成されているため複雑である。（ラネカー：ibid.）

蚕のマトリックスには、少なくとも図5に示す四つのドメインが含まれている。

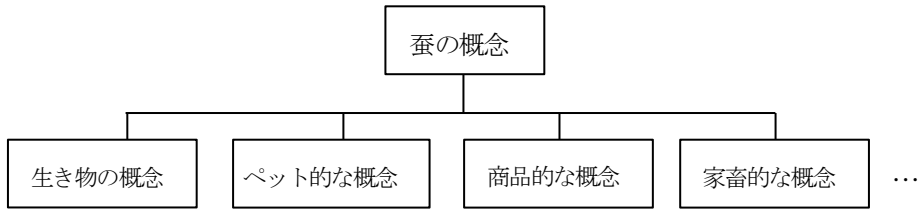


図5

類別詞の生起の観点から見ると、蚕の概念に関して重要なドメインとしては、「生き物の概念」、「(ペットとして) 飼育される概念」と「商品として販売される概念」、そして「家畜的な概念 (養蚕業)」などがある。蚕の数え方は、基本的にこの四つのドメインに基づいている。言い換えると、類別詞の生起は、これらのドメインによって動機付けられる。具体的に言うと、養蚕業の関係者たちは、「家畜的な概念」のドメインを優先的にアクセスし、蚕を「頭」で数える。この種の用法は、養蚕業に携わっている人たちに広がり、彼らの家族、またその近隣の人たちにも同じ数え方が広がったと考えられる。したがって、この数え方は、地域的な慣習用法と見なされる。特に、かつて養蚕業が盛んだった地域、蚕を「頭」で数える傾向が強い。

それに対し、養蚕業の関係者ではないわれわれは「生き物の概念」と「(ペットとして) 飼育される概念」のドメインを連想しやすく、「匹」で数える度合いが高くなる。また、蚕を販売する側の人、蚕を商品として見なすのが自然である。この場合、認知主体の主観的な価値判断により、「頭」と「匹」が生起することになる。さらに言うと、養蚕業が没落した現代の日本社会においては、「家畜的な概念」のドメインが以前より大分薄れ、このドメインの重要性が低くなったと言える。ラネカーは、以下の図式を用いて、概念内容に含まれるドメインの重要性は均等ではないとしている。

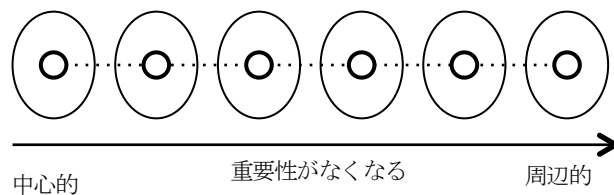


図6 (ラネカー ibid : 62)

図6の太い円はすべて同じモノ（指示対象）を示し、ここでは点線を用いてその同一性を示す。この図式はマトリクスを構成するドメインの間での関連性を省略したものである。一般に、一つの概念内容に関しては、関連性を持つ可能性があるドメインの数は限りなく存在すると考えられる。また、ドメインとドメインは相互に関係し単独的な存在ではない。図6では、各ドメインの重要性を考察するため、あえて個別的に描いている。（楕円の丸は、その指示対象のドメインを示す）。図6から明らかなように、概念内容に含まれる全てのドメインの重要性は一致しない。あるドメインは中心的な位置を占め、あるドメインは相対的に周辺的な位置を占める。大半のドメインは周辺に位置し、特定の文脈により関連するドメインのみが活性化される。すなわち、ドメインの順序づけは一定するものではなく、文脈と場面などの要因に基づいてその順序が相対的に変わる。ラネカーは以下の図式を用いて、この現象を説明している。

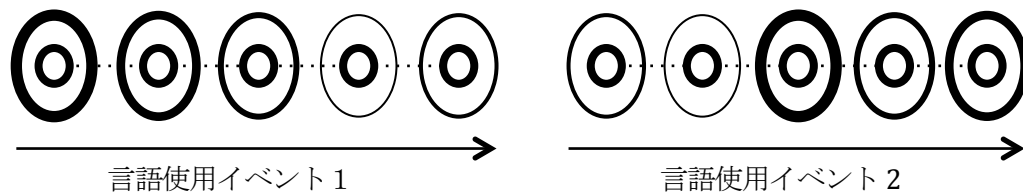


図7 (ラネカー ibid : 64)

図7は、ある言語事例の中心性の順序づけを表す。異なる文脈、場面と状況により、アクセスされるドメインも異なる。したがって、各ドメインが活性化される強度も異なってくる。(図7は線の太さを用いて、活性化されているドメインの強度を表す)。このように、言語使用のイベントに応じてアクセスされるドメインは変化し、活性化のレベルも同様に变化する。したがって、類別詞の場合、喚起されるドメインは一般の言語使用と比べてかなり異なる。

一般に、図5に示す蚕の四つのドメインの中では、「生き物の概念」だけが中心に位置するドメインである。それに対し、類別詞の場合、「生き物の概念」は同じく中心的に位置し、残りの「飼育される概念」、「商品として販売される概念」と「家畜的な概念」の三つ

のドメインは、比較的周辺に位置している。なぜならば、これらのドメインは、蚕を数える際に、優先的にアクセスされるドメインであるからである。さらに、社会変遷から見れば、かつて日本では養蚕業が盛んだったので、蚕を数える際「家畜的な概念」が喚起されやすかったと言える。すなわち、昔の日本社会において、このドメインの順番づけが高かったと言える。しかし現代になると、そのドメインの重要性が減り、その代わりに「飼育される概念」と「商品として販売される概念」の二つのドメインが活性化されやすくなったと言える。

要約すれば、養蚕業の関係者たちは文脈に頼ることなく、自らの背景知識により蚕を「頭」で数える。蚕の類別詞の選択は、認知主体が概念内容を構成するある特定のドメインにアクセスし動機付けられる。また、近年養蚕業が衰廃し続け、現役の職人が高齢化し後継が見つからないという理由で、将来的に養蚕業を廃業する可能性も考えられる。この際、蚕を「頭」で数える用法も使わなくなるだろう。したがって、われわれの生活形態の入れ替わりにより、蚕は家畜と見なさなくなり、「家畜的な概念」のドメインが背景化されることになる。このように、類別詞は、われわれのライフスタイルを反映する一種の言語標識と言える。以下では、さらに古代中国における「頭」のカテゴリーの変化について考察する。

4.1.4. 「頭」の用法における歴史的変遷

本章の冒頭において類別詞の生起について、大型動物の「牛」を例として詳しく考察した。その結果、類別詞の選択は基本的に物理世界における対象の特徴によるものではなく、認知主体の主観的な捉え方に基づいている点を明らかにした。類別詞のカテゴリーは認知主体の判断により作り上げられた範疇なので、その判断基準に関しては、絶対的な客観性は存在しないと言える。本研究は、類別詞は認知主体の主観性によると主張し、この点で従来の類別詞の研究とかなり異なっている。

前節では、日本の養蚕文化の変遷を通して、類別詞とわれわれのライフスタイルとの関連を考察した。一般に、ある生活習慣が消えると共に、その習慣に関する言語表現も徐々に使わなくなる。この点に関しては、類別詞も同じと言える。タンスの数え方をその典型

例として挙げると、昔はタンスを運搬する際、棹に通して運ぶ習慣があった。このように、認知主体はタンスを数える際、道具の棹を連想した。しかし近代では、この種の習慣がなくなり、次第にこの数え方は使わなくなった⁹。したがって、われわれの生活習慣と類別詞の使用の間には密接な関係がある。言い換えると、時代の移り変わりによって、類別詞の使用も異なる。以下では、通時的な視点から「頭」の使用範疇を考察する。

通時的な側面から日本語の類別詞を考察する研究は、三保（2006）に代表される。三保（ibid:25-31）によると、約七世紀に中国と公文を交わすため、日本語に存在しない量詞を取り入れられた。このように、類別詞は本来読み書きができる官僚たちが公文書を作成する際、使われる言語標識であった。その後、類別詞の発展と共に、庶民たちにも使えるようになった。さらに、濱野（2011:24-25）は、類別詞は、生産性や用法について時代ごとに社会的、文化的に影響を受け、制度として人為的に操作されてきたと指摘している。このように、取り入れた類別詞は、本来の使用からずれ、日本語話者の解釈により新たな意味が生まれたと推測できる。以下では、中国語類別詞の「頭」を取り上げ、時代ごとに「頭」の使用領域の変化を考察する。また、日中の類別詞の比較を通して、両国の社会的・文化的な相違にも注目したい。

歴史的な視点から中国語類別詞の用法を記述的に考察する研究は、陳（2014、2017）に代表される。陳（2014:137-145、2017:349-357）の調査によると、出土の文献に基づいて、「頭」が類別詞として使われた一番古い記録は戦国時代であったとされる。当時、「頭」は牛を数えるために用いる類別詞であった¹⁰。また漢朝になると、そのカテゴリーは徐々に拡張し、牛、羊、驢馬などの獣類以外、鶏、蛇などの動物にも使用された。魏晋南北朝時代に「頭」の範疇はさらに広くなり、生物全般を対象とする類別詞になった。そして、生物の他には一部の柑橘系の果樹にも用いられた。このように、時代の変遷と共に、「頭」の使用範囲と用法が広がり、宋朝になると、「頭」は非生物も対象とし、具体的なモノだけではなく抽象的なモノも数えるようになった。例えば、縁談の話や商売の対象は「頭」で数

⁹「現在、家具店では「台」で数えることが多い。また、「点」でも数える。背の高いタンスは上下分割を「二つ重ね」、三分割を「三つ重ね」という。さらに、タンスの引き出しを「段」で数え、五つあるなら「五段」と数える。」（日本の常識研究会編 2005:155）

¹⁰出長轂一乗，馬四匹，牛十頭，甲士三人，歩卒七十二人。『司馬法』「逸文」

えられる。その具体例を以下に挙げる。

(10) 是我當初曾許下他一頭親事，一向未曾成得。『水滸傳』第 49 回

(11) 小官想來，我這一頭買賣，可也。『元曲選』「張公藝九世同居」第二折

一方、それ以後「頭」のカテゴリーは拡張することなく徐々に縮小した。時代ごとにその一連の変化は表 1 に示される。

「頭」で数えられる対象									
	〈有生物〉							〈無生物〉	
種類	獣類	禽類	爬虫類	水族類	果樹	昆虫	人	具体的なモノ	抽象的なモノ
戦国	○	—	—	—	—	—	—	—	—
漢朝	○	○	—	—	—	—	—	—	—
六朝	○	○	○	○	○	○	○	○	—
唐朝	○	○	○	○	○	○	○	—	—
宋朝	○	○	○	○	○	○	○	—	○
元朝	○	○	—	○	—	—	—	○	○
明朝	○	○	—	○	—	—	—	○	○
清朝	○	○	○	—	—	—	—	○	○

表 1¹¹

表 1 から明らかなように、昔は「頭」のカテゴリーに属するメンバーは大型動物に限らず、メンバーの種類にも多様性が見られる。一見したところ、これらのメンバーに共通する属性は抽出できなさそうに見えるが、実はそうでもない。筆者は、この種の拡張は、認知主体の身体的経験に基づいていると考える。なぜならば、身体がなければ、われわれはこの物理的な世界を認知することができないからである。身体的な経験とわれわれの概念の構成との関連性について、レイコフ・ジョンソン（2004 計見（訳）：31）は以下のように説明している。

最も重要なことは、カテゴリーを我々が作るということを我々の身体と脳が決定

¹¹表 1 は、陳 (ibid) の研究結果に基づいてまとめたものである。

し、それだけではなく我々がどんな種類のカテゴリーを持つか、その構造はどんなものであるか、をも身体と脳が決定するということである。人体の属性で、我々の概念システムの特性に寄与するようなものものを考えて見る必要がある。我々は目を持ち、耳を持ち、両の腕と足を持ち、それらは決定的なやり方で働き、他のやり方はしない。我々は視覚システムを持ち、それはトポグラフィックなマップと方向感受細胞を持っていて、それが空間関係を概念化する能力への構造を我々に提供している。我々に動く能力がありそれから他のものの動きを追跡できるということは、我々の概念システムの中で運動に大きな役割を与えている。我々が筋肉を持ち、それを使って力を加えることができるという事実は、因果概念に関する我々のシステムの構造を、ある一定のやり方で導いていく。我々が身体を持っているということ、また思考がいかなる風にか身体化されているということだけが重要なのでない。我々の身体の特性が我々の概念化とカテゴライゼーションの、まさにその可能性を形作っているということが重要なのである。

(レイコフ・ジョンソン：ibid.)

このように、われわれの概念体系とカテゴリーは身体的な経験を介して形成される。本稿では、この点を考慮し、中国語類別詞の「頭」の拡張プロセスを分析する。

言うまでもないが、身体類別詞の「頭」は身体部位であり、類別詞として使う際、「頭部」に関わる一部の概念と背景知識が活性化される。上の表 1 によると、「頭」の使用範疇は以下の順番に拡張する。

獣類 > 有生物の全般 > 無生物 (具体的なモノ > 抽象的なモノ)

すなわち、言語使用に基づく「頭」の拡張プロセスには、上記の段階性が見られる。また、最初の段階において、「頭」の拡張は獣類から (人を含む) 全ての生物へ拡張していく点から見ると、これらの対象動物から、「頭部」があるという共通の属性が抽出できる。し

以上の規定に基づくならば、(12) の比喩写像は図 9 に示すことができる。

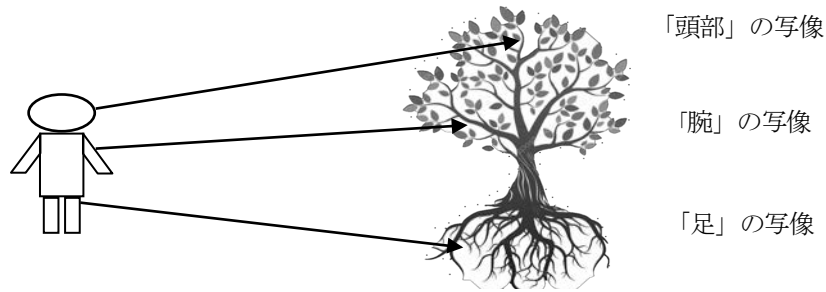


図 9

この場合、認知主体は、自らの身体の構造をそのまま果樹に投影したと考えられる。具体的に言うと、「頭部」、「腕」、「足」と「胴体」はそれぞれ樹木のでっぺん、枝、根っ子と幹に喩えられる。このように、メタファーの写像により、身体部位である「頭」の概念が植物へ写像され、「頭」で数えるようになったと考えられる。

以上のように、類別詞の「頭」は名詞の概念を受け継いで、この身体概念（部分と全体）を対象へ写像することになる。この種のメタファーは、対象が生物と無生物に関係なく喩えることが可能となる。日常生活において、このような身体部位に基づく言語表現が広範に見られる。以下にその具体例を挙げる。

(13)

- a. 机の足、脚注、台風の目、魚の目、釘の頭、鼻の頭、山の背、包丁の背、入口、がま口、瓶の口、徳利の首、玄関口、蛇口
- b. the foot of a mountain, the mouth of a river, the hands of a clock, the ear of pitcher, the eye of a needle, the head of a cabbage (山梨 2012 : 102)
- c. 磚頭、鋤頭、木頭、車頭、鼻頭、水龍頭、床頭、眉頭、桌脚、颱風眼、山脊、山腰、入口、門口、瓶口、逃生口、刀口、排水口、瓶身、瓶頸

(13) から明らかのように、身体部位を用いて喩えるメタファーはわれわれの日常生活

において広く使われている。また、この種のメタファーは、日本語だけに限らなく英語と中国語にも数多く観察される。以上の考察から、われわれの概念体系は、身体化により影響を受けることが明らかになる。

要約すれば、通時的な視点から中国語類別詞「頭」の使用範疇を考察してみると、類別詞の「頭」は名詞の「頭部」の身体概念を受け継ぎ、その概念はさらに「頭」の拡張用法に反映される。また、この考察からわかるのは、昔と比べ、現代中国語の「頭」の用法はかなり狭くなったという点である。ここで興味深いのは、「頭」を用いて大型動物を数えるようになったのはかなり近代になってからという点である。このように、現代中国語における類別詞「頭」の категория が狭くなると共に、用法も変化している。このような事態が起った要因は、おそらく類別詞の「隻」が小動物を数える標識に定着したので、「頭」の範疇がその影響により縮小したからだと考えられる。その結果、「頭」は大型動物のみを対象とすることになったと言える。

本節では、時代ごとに中国語類別詞「頭」の категория の変遷を考察した。この考察から、その categoria の体系と用法が、現代の使い方と比べて大分異なるという事実が判明した。現代における日中類別詞「頭」の対照比較については、後で詳しく考察する。以下では、類別詞とイメージとの関連性を考察する。

4.2. 類別詞が喚起するイメージ

前節の考察から明らかなように、類別詞とわれわれの社会文化的な慣習は切っても切れない関係にあると言える。時代の移り変わりにより、人々の生活習慣が変化する一方、その変化は実質的にわれわれの言語にも反映している。養蚕業の衰廃と共に、蚕を「頭」で数える慣習的な数え方も次第に薄れていった現象は最も典型的な例である。このように、類別詞は、われわれの生活の需要により作り上げられ、またその需要が減少すると共に使われなくなる。さらに言うと、一般の国際単位 (International System of Units)¹² と違って、類別詞はその言語における独特なライフスタイルと価値観から生み出されている。したが

¹² 三保 (2006 : 22) によると、国際単位 (略称 SI) は、国際的な統一性と合理性を有する精密な国際単位であり、特に学術研究や精密業種などで用いられている。

って、その使用は同じ価値観と生活環境を共有している人たちではないと共感しにくいと言える。すなわち、類別詞の使用に関しては地域性が見られる。中川（2006:185-200）は類別詞の地域性に着目し、中国語の方言におけるブタと共起する類別詞を調査している。その結果、各地方は自らの方言により、ブタに対する数え方も大分異なっていることが判明した¹³。以上の点をまとめると、類別詞の地域性は、国ごとではなく同じ国の中にも生じることが明らかになった。本研究では、方言による数え方は考察の対象としない。この点は、今後の課題として考察する必要がある。

以上の特徴以外に、類別詞には対象を具象化する機能がある。なぜならば、類別詞は対象の特徴をカテゴリ化するが、形状は対象の最も典型的な特徴であるからである。特に、形状類別詞は主に対象の形状により類別し、そのイメージ性がほかの類別詞よりも強いと考えられる。類別詞のイメージ性の問題は、今まで多くの研究で取り上げられている。しかし、この種のイメージ性に関する考察は、形状類別詞に限られているのが現状である。形状類別詞に限らず、ほとんどの類別詞はこのようなイメージ性を含むが、その中にも違いがある。この点を検証するため、以下では、形状類別詞の「本」と非形状類別詞の「頭」を取り上げて考察する。

4.2.1. 「本」のイメージと多義性

「本」は、形状類別詞の最も代表的な例である。以下では、代表的な先行研究として記述的分析を行った飯田（1999）と、認知的観点から分析を行ったレイコフ（1987）を取り上げ、「本」のイメージ性と多義性を考察する。

飯田は、1997年10月から1998年9月まで、日本の新聞記事、広告、小説、アンケートなどを調査の対象とし、数多くの類別詞の用例を収集し記述的に分析している。飯田は、「本」の形状による用法（表2）と比喻による拡張用法（表3）の二つに分けている。また、「本」で数える対象の形状は基本的に細長い形をしているものが多いが、必ずしも一次元的な形をしているとは限らないと指摘している。

¹³ 中川（2006：190）の調査によると、漢語諸方言におけるブタと共起する類別詞には「口」、「只」、「頭」、「个」、「块」、「条」、「根」、「行」、「奇」、「改」、「兜」、「拉」、「筒」、「介」、「家」、「尾」がある。


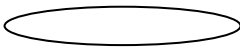
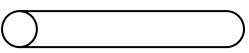
助数詞	数えられる物体	形状	例
「本 ₁ 」	一次元的に細長い物体		鉛筆、紐、指、木、川、道、タワ 一等
「本 ₂ 」	環状になっている物体		タイヤ、ネックレス、輪ゴム等
「本 ₃ 」	管状になっている物体		ストロー、トンネル、注射器等

表2 (飯田 ibid. : 17)

助数詞	種類	例
「本 _a 」	交通の運行数・便	電車、バス等
「本 _b 」	ソフトウェア	パソコンソフト、ゲームソフト、カット集等
「本 _c 」	情報項目	記事、原稿、話題、論文、報告等
「本 _d 」	作品・活動	演劇、映画、番組、CM、連載、コンサート、スポーツ練習メニュー等
「本 _e 」	連絡手段	電話 (葉書、手紙)
「本 _f 」	有用な軌跡	ホームラン、ヒット、シュート、ジャンプ等
「本 _g 」	特定の側からのみの有用な項目	家具、契約、くじの当たり

表3 (飯田 ibid. : 46-47)

要約すれば、対象の実態はどうであれ、認知主体が「細長い」と認識すれば、「本」で数えることができる。したがって、飯田が主張する「本」における形状の分類は成り立たない。なぜなら、指輪、五円玉、CDのような円に近い環状は細長と認識することができず、「本」を用いる度合いが低いからである。以上の考察からわかったのは、「本」の判断基準は、物理世界における対象の形に基づくのではなく、認知主体の認識に基づいているという点である。実際どのくらい細ければ、「本」で数えるかについての客観的な基準はないが、その判断は、認知主体の主観的な認識に委ねられる。飯田の研究は、実に数多くの言語実

例を提示し、網羅する類別詞も多く、言語資料として再分析する価値がある。しかし、「本」の比喩的な拡張事例に関しては、その分類基準をはじめ拡張の動機付けまで有力な説明が見当たらない。

レイコフ(ibid.)は、認知言語学的観点から多義的な「本」の意味分析を行い、その典型例を通して、「細長い」イメージスキーマを抽出している。このイメージスキーマに基づき様々な意味拡張が生じるが、これらの意味拡張は決して恣意的なものではなく、そこには動機付けが存在する。具体例を挙げると、電話の場合、まず、受話器は長く細く硬いもので、「本」の中心的なイメージと一致する。もう一つ慣習的なイメージは、電話機の電話線である。この細長い電話線も「本」のイメージと合致し、また導管メタファー (CONDUIT metaphor) の導管としても説明することができる。中心-周辺、プロトタイプ-拡張事例の関係を通して、レイコフは、類別詞「本」の体系を明らかにしている。さらに、多くの拡張事例を考察した結果、その体系自体は放射状のカテゴリーの構造を持っていると主張している。本稿では、レイコフの主張に基づき類別詞を分析する。

以上の先行研究の概観により、類別詞「本」のイメージ性が明らかになった。「本」のカテゴリーに属するメンバーは、いずれもこの細長いイメージスキーマにより事例化される。邱 (2016) は、「本」の多義性を考察するため、中国語に訳された日本の探偵小説を調査対象とし、日中類別詞の対応状況を考察した¹⁴。その結果、「本」に対応する中国語の類別詞は30個にも達した¹⁵。また、検出された類別詞を見ると、「本」と同様の細長いイメージスキーマを持つものはごく一部である。同じ細長いイメージスキーマを持つ複数の類別詞が存在する中国語では、日本語より対象をきめ細かくカテゴライズする傾向がある。したがって日中両言語では、同じ類別詞が存在しても、両者の使用範囲が完全に一致することはない。以下では、中国語の「條」を取り上げ、両言語の相違を明らかにしていく。

¹⁴ 邱 (2016) は、東野圭吾の長編及び短編小説を含め、計12作品を調べている。

¹⁵ 邱 (2016 : 31-32) の考察によると、「本」に対応する中国語の類別詞は、「根」、「支」、「瓶」、「條」、「個」、「道」、「罐」、「部」、「戰」、「只」、「件」、「把」、「卷」、「柱」、「枚」、「顆」、「通」、「輛」、「段」、「杯」、「載」、「心」、「仗」、「着」、「局」、「班」、「本」、「株」である。

4.2.2. 中国語の類別詞「條」の特殊用法

「條」の最も一般的な用法は、細長い柔らかいもの（ロープ、道）の類別である。一般には、このような「形状類別詞」は主に非生物を対象とするが、中国語では、ある一部の生物に限って「條」が用いられるという特殊な用法が観察される（表4参照）。以下では、まずこの類別詞の特性を把握してから、これらの動物を「條」で数える動機付けについて考察する。

條	対象生物自体の体型が細長い	虫（長い物）、蚕、蛆、蛇、魚
	それ以外の対象生物	犬、オオカミ、ロバ、牛

表4

類別詞「本」と同じように、「條」は、〈細長い〉イメージスキーマを持ち、細長い一本の線で表すのが自然である。ただし、「條」は、細長いモノで、相対的に材質が柔らかいモノを対象とする。すなわち、このカテゴリーに属するメンバーの形状は、直線よりむしろ自由に曲げられる一本の線というイメージの方が強い¹⁶。表4のように、「條」で数えられる生物は、基本的に二種類に分けられる。一つは、対象生物自体の体型が細長く見える物である。もう一つは、対象生物の体型と関係なく、慣習的な数え方によるモノと考えられる。いずれにしても、形状類別詞の「條」のカテゴリーに属するには、必ずそれなりの動機付けが必要とされる。以下ではこれらの生物と「條」の関係づけを考察する。

4.2.2.1. 対象生物の体型

表4に示すように、この種の対象生物はいずれも体型的に細長い。また、これらの生物

¹⁶ 孟 (2012 : 41) は、中国語の「細い」という概念をもつ形状類別詞（形状量詞）の一部を取り上げ、それらの量詞の由来と変遷について考察を行っている。特に、量詞の「枝」と「條」の相違に関しては以下のように述べている。両者は基本的に「小枝」の形から量詞になったが、量詞としての使用に関しては、前者が先に定着し、植物の枝を数える単位になった。一方、それ以後発展した「條」は、同じく〈細長い〉特徴を持つ形状量詞だが、数える対象物は植物以外のものを対象とする。すなわち、量詞の「枝」は「小枝」の形状から〈細長い〉という特徴を継承しているだけでなく、材質的な特徴（硬さ）も継承していると考えられる。これに対して、「條」は、単なる形状的な特徴を継承した量詞と言える。

は、移動する際に体を曲げたり、左右に揺らしたり、前進するので、それなりの柔軟性がある。認知主体は、視覚を通して以上の特徴を把握することが可能となる。以上の理由により、類別詞の「條」で数えるようになったと考えられる。

4.2.2.2. それ以外の対象生物

犬、おおかみ、ロバと牛などがなぜ「條」のカテゴリーに分類されるのかについては未だに解明されていない。この問題を取り上げる代表的な研究としては、杉村（2017:46-59）と橋本（2014：9-11）が挙げられる。

杉村（2017）は、なぜ「犬」は「條」のカテゴリーに属するのかについて四つの仮説を立てている。犬の外見的な特徴と当時慣習的な食文化の観点から、犬を「條」に類別するには以下の理由が考えられる。すなわち、①細長い体型、②屠殺されて吊るされた形状からの連想、③尻尾の形状、そして④「白条（すっぽんぼんで棒状）のイメージに由来すると推論している。

橋本（2014）は、中国古典の小説を研究対象とし、「條」のカテゴリーにおいて、「牛」と「好漢」といった体型が大きくて細長いメンバーが存在するので、〈大きい〉という属性を抽出することが可能であると主張している。すなわち、一般の小型犬を類別詞の「隻(只)」と「個」で数えるのに対し、大型犬ならば「條」で数えると主張している。

以上の仮説は一理あるが、いずれも決め手に欠けている。本稿では、表4に示すように、「條」のカテゴリーに属する生物の一部は、その〈細長い〉イメージによって動機付けられ、同様に、犬、おおかみ、ロバ、牛、いった対象生物も、形状によってカテゴリー化されると考える。もう一つの可能性としては、犬、牛、ロバのような家畜は、ロープで引っ張られている。そこで、認知主体は、対象動物と近接関係にある道具（ロープ）に焦点を当てることにより、これらの動物を「細長い」範疇に入れたのかもしれない。これに類似した例としては、日本語類別詞の「棹」が挙げられる。

4.2.2.3. まとめ

以上の日中の比較から明らかなように、細長いイメージスキーマを持つ形状類別詞に関する例が、両言語とも多数検出された。具体的に言うと、日本語類別詞の「筋」、「条」、「棹」なども細長い性質のものを対象とする。それに対し、細長い属性を持つ中国語の類別詞としては「根」、「支」、「條」、「道」などが挙げられる。このように、両言語とも単純に対象の形状のみカテゴライズするのではなく、その細長さの種類を細かく区別し、振り分けている。したがって、体系的に見れば、イメージ性をより抽象化する類別詞の「本」が上位レベルにある。一方、相対的に対象の細かい特徴を示す「筋」、「条」、「棹」などの形状類別詞は、下位レベルに位置づけられる。しかし、本来「本」の典型事例はバット、鉛筆、杖などのような硬くて細長いモノを対象とするが、拡張する際に「硬い」という性質が徐々に背景化している。日常の伝達をスムーズに行うため、日本語話者は、本来その場で使用すべき類別詞を一部省いて、「本」の範疇に組み込む傾向がある。このように、「本」の使用範疇は、昔よりかなり拡大していると考えられる。

4.2.3. 非形状類別詞の「頭」

本稿では、前章の考察を通して、日本語類別詞の「頭」のイメージ性を明らかにした。しかし日本語と同様に、中国語も、類別詞の「頭」を用いて大型動物を数えている。両者には一体どのような区別があるのか。以下では、両言語における類別の仕方に基づいて、動物に対する捉え方の違いを考察する。

4.2.3.1. 日中類別詞の対応関係

先述したように、日本語類別詞の大半は約8世紀に中国語から借用され、現代に至るまで使用されている。両言語は本来異なる系統の言語なので、借用のプロセスにおいて、類別詞を日本語者の世界観に組み直している。ここでは、両国の異なる社会文化的な背景といった側面に注目し、類別の仕方の相違を分析する。この社会的な背景による差異を究明

するため、以下では大型動物の数え方を取り上げて考察する。両言語は基本的に大型動物を数える際に「頭」を用いるが、両者の使用範囲は微妙にずれている点に注目したい。この点は、次のような具体例を見ていくことによって明らかになる。(a)は日本語で、(b)はそれに対応する中国語訳)。

- (14) a. 牛1頭 / 匹を飼う。
b. 養了1頭 / 條 / *匹 / 隻 牛。
- (15) a. 馬2頭 / 匹がいなくなった。
b. 跑了2匹 / *頭/ 隻 馬。

(14) と (15) から明らかなように、馬は大型動物にもかかわらず、中国語では「頭」で数えるのではなく、馬専用の類別詞「匹」で数えるのが一般的である。一方、日本語の類別詞の「匹」は、本来、大型動物以外の動物（主に哺乳類）を対象とし、その後使用範囲が拡張し生物全般を対象とすることになった。このように、両言語における共通の類別詞が存在しても、両者の使用範囲が完全に一致することはない。では、なぜ「匹」は馬の専用の類別詞になり、なぜ馬だけを大型動物の分類から取り上げてマークする必要がある。

「匹」の由来に関しては諸説がある。一説では、「匹」は馬のお尻の形から生まれ、後に馬を数える専用の類別詞になったとされている¹⁷。古代中国において、「匹」は布を測る単位として使われた。当時は男女二人の服を作るには、「二匹」の布が必要とされ、男女の片方を指す場合、「匹夫匹婦」と呼んでいた¹⁸。また、中国語の「匹」は「匹配(配する)」という意味を含意し、よく夫婦関係、競争関係、友達関係を喩える際に用いる。したがって、この人間関係を馬と馬に乗る人の相性に写像し、「匹」はメタファー的な用法により、馬を対象として数えるようになったと考えられる¹⁹。このように、馬を「匹」で数える中国語では、社会、文化的な慣習を受け継ぎ、その影響が類別の仕方にも反映していると考えられる。中川(1995:255-256)は、認知的な観点を取り入れ、類別詞の研究には、このような認知主体と認知主体がおかれる環境とのインターアクションを考慮する必要がある

¹⁷ 日本の常識研究会編(2005:57-58)、ビジネスリサーチ・ジャパン(2004:29-30)。

¹⁸ 匹夫無罪。『左傳・桓十年』

¹⁹ 陳(2014:46-49)では、通時的に用例を集めて中国語類別詞の発展と変遷を考察し、「匹」の拡張ルートは布>人>馬>運搬用の家畜>大型動物としている。

と述べている。

そもそも自然言語のカテゴリーというものは、それぞれの言語の背景にある気候・風土・文化・社会などの相違によって生じる人間の認識の仕方の相違を反映した主観的なものである。したがって、日本語と中国語という異なった背景を持つ言語の間で類別詞の体系が異なるのはむしろ当然であり、中国のように悠久の歴史と広大な国土を有する国においては、一つの国の中でさえ、類別詞の体系が歴史的、地域的に異なったものとなっている。よって、類別詞がその背景によって異なった体系を成しているという点は、類別詞を研究する上で重要な視点であるといえよう。(中川：ibid.)

筆者は、日中における類別詞の「頭」の使用範囲の相違を明らかにするため調査を行い、日本語類別詞の「頭」で数えられる対象を中国語の数え方に比較した。中国語では、「頭」、「匹」、「口」、「隻」と「條」の五つのカテゴリーに分けられる。中国語の「隻」は、本来小鳥を手で掴むというイメージから来た象形文字である。類別詞として用いる際には、鳥類のような小型生物を対象とするが、その後、拡張により生物全般を数えるようになった。このように、一見したところ、日本語類別詞の「頭」と「匹」と中国語の「頭」と「隻」は完全に対応しているように見えるが、実はそうではない。なぜなら、日本語の「頭」のカテゴリーは数多くの拡張事例を含み、実質上はその使用範囲は中国語よりも広いからである²⁰。ここで注目したいのは、中国語では、家畜に対する数え方のバリエーションが日本語よりも多いという点である。例えば、豚を「口」で数え、牛、犬などを「條」で数え、馬を「匹」で数える。

海に囲まれた日本と比べ、大陸にある中国では、家畜に対する類別詞が数多く存在するのは不思議ではない。また、家畜と共存する中国語話者は、家畜の大きさに注目して類別するのではなく、それぞれの特徴をよく把握し類別する。それに対し、日本語は、その生活面において、魚類に対してより多くの類別詞が存在すると考えられる。このように、類

²⁰ 中国語類別詞「頭」のカテゴリーのプロトタイプは、大型の家畜と獣類であり、現代に至ると、一部は海に生息する大型の生物も数えるようになった。

別詞は間接的に話者が置かれた環境によって影響を受けている。

中川はさらに“南船北馬”という成語を用いて、馬の古代中国における重要性を指摘している²¹。しかし、馬が専用類別詞を持つようになったのにはさらに重要な理由がある。象形文字と人類学の側面から古代中国の風習を研究している許（2013：91-95）によると、古代中国における馬が格別にされた理由は、馬は走りが早だけでなく、道を覚えるという生物的な特性があるためである。また、封建社会である古代中国では、人は格付けされたレベルにより、そのレベルにふさわしいモノしか手に負えなかった。すなわち、馬は貴族専用の移動手段として使われる時期があった。このような歴史的な背景があるため、馬が専用の類別詞を持つようになったと考えられる。

4.2.3.2. まとめ

日中両言語における類別の相違は、動物に対する両言語の捉え方の差異を反映している。この種のカテゴリーは、一般の生物学の分類と一致せず、また単純に動物の大小で見分けるのでもない。この慣習的な数え方は、認知主体がおかれる環境と生活に密着しているだけでなく、一部は歴史、社会文化の背景などの要因も含んでいる。その代表的な例としては、中国語における虎の数え方が挙げられる。中国語話者は虎を数える際に、「隻」を用いる度合いが高い。なぜ虎を「隻」のカテゴリーに入れるかについては未だに明らかではないが、このような数え方は決して恣意的なものではない。これはむしろ、分類基準を破った慣習的な数え方と見なされる²²。

4.2.4. まとめ

本章では、類別詞「頭」の指示関係は〈部分-全体〉の概念に基づいていることを明らかにした。また、類別詞が認知主体の視点を反映するかどうかを明らかにするため、「頭」の由来を考察した。通時的に中国語類別詞「頭」の使用範囲を考察すると、「頭」は牛を対象

²¹ 中国の“南船北馬”という成語は、南方は湿润多雨で河川や水路が発達していることから移動手段は“船”に頼り、北方は乾燥していて陸続きであることから“馬”に頼っていたことを表している。“匹”というウマ専用の類別詞は存在する以上、この成語が直接的に表しているような北方における“馬”の重要性の反映であることはおそらく間違いない…。(中川 ibid : 261-262)

²² 中国語言語話者が虎を「隻」で数えるのは、中国の「兩隻老虎」という童謡の影響を受けたためかもしれない。

とし、その後使用範囲の拡大により有生物先般を対象とする時期があったことが明らかになった。「頭」で数えるのは、認知主体と類似した身体を持つ生物とこの〈部分-全体〉の身体概念を用いて写像できるモノ（植物など）を対象とする。

また、「頭」の体系から見れば、カテゴリーの中心を占めるメンバーは大型動物であるが、近年では、蝶、蚕、カワウソ、コアラなどの生物も「頭」で数えるようになっている。しかし、これらの拡張事例は、文脈なしで生起することができないという共通の特徴がある。

また本章では、拡張事例と文脈依存性との関係を明らかにするため、蚕の数え方について考察した。蚕を「頭」で数えるには、それなりの動機付けが必要である。例えば、日々に蚕の世話をする養蚕業の人たち、蚕の研究に携わっている人間、それに蚕のことをよく知っている人である。要するに、彼らには蚕に対する強い思いや愛情があり、その感情が類別詞に反映したと言える。厳密に言えば、この種の心理的な価値には実際の金銭的な価値と違って個人差が見られる。この種の拡張は、ある一部の特定された話者にしか生じない。

また本稿では、形状類別詞の「本」と身体類別詞の「頭」を取り上げて類別詞が生じるイメージ性を考察した。言うまでもないが、形状類別詞は主に対象の形によりカテゴリー化するので、そのイメージ性はほかの類別詞よりも高い。しかし、大型動物を対象とする「頭」は、瞬時的に対象の大きさを分別するため、心的なイメージが必要と考えられる。したがって、ほとんどの類別詞はイメージ性を持ち、このイメージ性を介して対象を具象化し、より高度な情報を相手に伝達することができる。また、中国語では、かつての生活習慣により、牛、馬、犬などのような家畜に対する数え方が多様である。したがって、「頭」のイメージ性が日本語ほど強くはない。しかし、同じ身体類別詞である「口」は、人と豚を対象とする以外、井戸、甕のような丸い要素があるものを対象とする。そのイメージは、口を大きく開ける時の形から得たと考えられる。以上のように、形状類別詞だけではなく、ほかの類別詞でもイメージ性が生じる事実が明らかになった。

日中の類別の仕方の相違は、両言語の動物に対する捉え方の違いを反映している。大陸文化の中国は、かつて北方は遊牧民族が生活している地域である一方、南方は土地が肥え

農業が盛んでいる地域である。このように、家畜と共存する中国語話者が家畜を細かくカテゴリー化する傾向は不思議ではない。それに対し、海に囲まれた島国の日本では、陸上の動物を基本的に大型動物（頭）とそうではない（匹）二種類に分ける。しかし、魚類と貝類に関わる類別詞が中国語よりも数多く観察される。以上の考察から、類別詞は、われわれの歴史的、文化的な生活に密着していることが明らかになった。

第5章 メタファーと類別詞の関係

5.1. 類別詞とイメージスキーマ

前章の考察から明らかなように、多様な類別詞を持つ日中両言語では、モノを数える際に、類別詞は単に指示対象を特定する機能だけでなく、対象の形状と特徴を示すことができる。すなわち、日中の類別詞にはイメージ性を持つという共通の特徴がある。具体的に言えば、本、粒、枚などのような形状類別詞はもちろん、大小に関する類別詞、空間に関する類別詞などもこの種の特性を含んでいる。類別詞を使う際、認知主体は、対象の個々のイメージ¹をカテゴリー化し、その具象的なイメージをより抽象的なイメージスキーマに変換し、記憶し、概念化する。

本章では、類別詞とイメージスキーマとの関係を考察するため、まず容器の例を取り上げて分析する。また、容器のイメージスキーマがどのように類別詞の使用に影響を及ぼすかについて考察する。以下では、容器のメタファーを概略的に紹介し、類別詞の文字通りの用法だけでなく、類別詞のメタファー的な用法も考察していく。

5.1.1. 容器のイメージスキーマ

本節では、容器のイメージスキーマを論じる前に、容器の形状と日常生活における容器が使用される場面を考察する。容器を広く見ると、そのカテゴリーに含まれるメンバーは実に多種多様である。基本的には、容器である限り、モノを入れる機能さえ備えていれば、形状と材質は問わない。例えば、瓶、ペットボトル、缶、紙コップ、バケツ、籠などは容器の一種である。また、この種の容器の分布を見た場合、カテゴリーの中心を占めるのは瓶、缶、バケツなどのようなモノを入れるため作られた入れ物である。また、本来、容器ではないが、モノを運ぶ道具として使用するものも、広い意味で容器と見なされる。さらに、各容器の特徴によりそれぞれの使う場面と対象も異なってくる。例えば、瓶とペット

¹ 厳密に言えば、同じ対象に関しても、個々の細部のイメージは厳密には異なる。

ボトルなどは、蓋があり密封性が高く、液体を持ち運ぶのに便利な道具として機能する。一方、モノを風呂敷に包み、運んだり収納したりする習慣が日本の伝統的な生活に見られ、現在に至るまでこの習慣は維持されている。また、時代の移り変わりにより、新たな容器が発明され、籠、ザル、風呂敷のような古くから存在する入れ物は次第に使われなくなってきた。このような現実生活の変化により、容器のカテゴリーに関わる判断基準も変化する。

ここまでの考察から、容器に関しては以下の諸点が明らかになる。

- i. 容器の基本的な機能を満たせば、容器の材質と形状は問わない。
- ii. 包む対象に関しては、容器の材質と形状は異なるが、容器に含まれる対象は固体的な存在だけではなく、液体的な存在、等も含まれる。
- iii. 日常生活の変化と共に、用いられる容器の種類も異なってくる。

現代では、多種多様な容器が使われているが、容器のカテゴリーの認識に関しては、言語や文化により、その厳密な分類は異なる。この点に関し、今井（2016：26-28）は、日常言語の基礎語彙²に注目し、その言語を操る社会がどのような対象を、どのようなイメージに基づいて分類するかについて考察している。例えば、英語の rice は、日本語では、「稲」、「米」、「ご飯」、「ライス」、等に細かく区別する。

今井は、このような異言語間のカテゴリー化の違いに注目し、英語と中国語の容器の名前とその分類の違いを、次のように図式化している。

色の名前の場合と同じように、日本語は外来語が定着していて、何が基礎語なのかよくわからない。昔からある瓶、罐、箱などの語に加え、最近はカタカナ語で、

² ここでの基礎語は、認知的には「基本レベル (basic level)」と呼ばれている。「通例、カテゴリー構造は最も基本となる基本レベル・カテゴリー、その上位にある上位レベル・カテゴリー、その下位にある下位レベル・カテゴリーと大きく三つに分けられる。事物認識についての一類の分類であるが、科学分野での厳密的な階層的分類学と異なり、認知処理プロセスにおいて日常的・無意識的に活性化される知識構造のことを指す…基本レベル・カテゴリーの特徴は、最も覚えやすい事例が属するレベルであり（犬、猫、花、机、星、雨、風）、多くは短い単語で、子どもの頃から親しんだもの、日常会話で頻用される対象である。」辻（2013:63）

ボトル、ジャー、タッパー、ボックスなども使うかもしれない。(今井: ibid.)

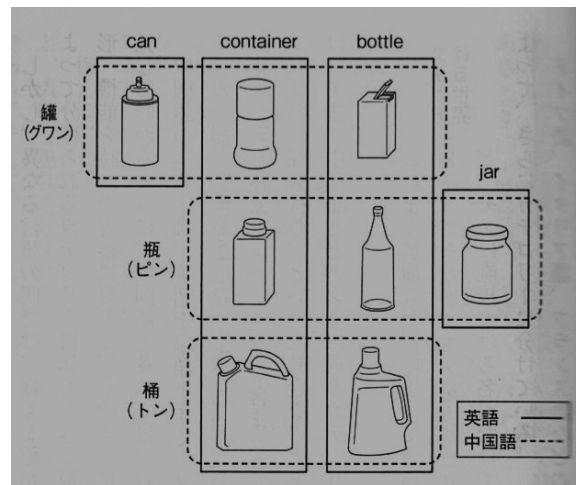


図1 (今井: ibid.)

今井が指摘するように、日本語では大量の外来語が定着しているため、基礎語彙を介して日常生活でよく使われている容器の分類を明らかにするのは難しい。また近年では、食習慣の変化に伴い、一般家庭で使われる容器は日本食向けの器だけではなく、牛乳、ジャム、バターなどのような洋食の食材を入れる容器も使われている。その結果、日本語における容器のカテゴリーはかなり細分化する傾向が見られる。以下では、認知言語学の中心的な概念であるイメージとイメージスキーマの観点から、容器に関わる類別詞のカテゴリー化の一面を考察する。

以上の考察から明らかなように、容器のカテゴリーは、われわれの社会と文化的な背景に深く関わっている。また、異なる言語において、容器に対する呼び方だけではなく、容器のカテゴリー化の仕方も厳密に異なる。

認知言語学では、イメージとイメージスキーマを相対的に区別する。両者の違い関し、山梨 (2012: 13-14) は以下のように述べている。

…「イメージ」と「イメージスキーマ」を相対的に区別するが、この区別は程度問題である点に注意する必要がある。後者は、スキーマ化のプロセスを介して形

成されるより抽象的な表象を意味する。

(山梨: ibid.)

具象的なイメージと異なり、イメージスキーマは、関連する対象の個々のイメージの具体的な特徴を捨象し、より抽象的なレベルで対象を概念化する役割をになう。認知言語学
の分析では、容器のイメージスキーマは、基本的に図2のように規定される³。図2に示
されるように、この種のスキーマには容器の内容物の移動の概念も関わっている。

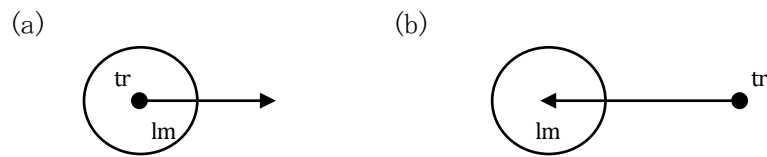


図2 (山梨: ibid.)

図2では、容器のイメージは外側の丸い円で表し、容器に出入りする物体は黒い点で表
している。認知的な規定では、この黒い点は容器という場所ないしは空間 (lm = landmark)
に出入りする移動体 (tr = trajector) として規定される。

容器のイメージスキーマの概念化には、複合的な視点が関わっている (山梨 2012 : 27-
29)。この種の複合的な視点としては、少なくとも以下の三つの視点が挙げられる。

- A. 容器の空間領域の内 (ないしは外) に何が存在するか。
- B. 容器の境界領域が閉じているか開いているか。
- C. 容器の境界領域を内から見ているのか外から見ているのか。

以下では、それぞれの視点に関係する容器の具体例を考察する。

- (1) a. 彼の頭にはアイデアがいっぱい詰まっている。
- b. 鈴木先生の講演は中味がなかった。(山梨: ibid.)

³ 容器のイメージスキーマは、図2のように必ずしもサークル (○) で規定する必要はない。山梨 (2012:14-15)
は、このサークル (○) による図式は、あくまで容器の境界領域を示す便宜上の表示であるとしている。

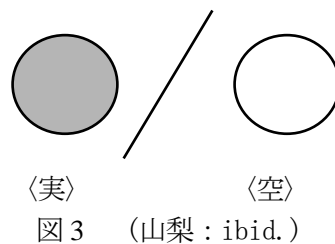
c. 他真是滿肚子的壞水。

(彼は本当にお腹に悪い考えがいっぱい詰まっている＝腹黒。)

d. 考試時，腦袋一片空白。

(テストの時、頭が空っぽになった。)

(1) の例は、図3に示されるように、容器の限られた空間に中身が詰まっているかどうかという視点により、人間の頭、講演などの対象を比喩的に捉えている例である。



この場合には、容器の中身に焦点が当てられているので、便宜上、容器自体は閉じた空間として規定している。

日常言語では、問題の容器が閉じているか否かという視点(図4、参照)から、人間の社会的、対人的な関係を比喩的に表現することができる。その具体例とこれに関する図式は、以下に示される。

(2) a. 彼はオープンな人だ。

b. この子は心を閉じている。(山梨: ibid.)

c. 他封閉自我不與人親近。

(彼は自分の心を閉ざしていて、親しい友人は一人もいない。)

d. 他思想開放很容易接受新的事物。

(彼はオープンな人だから、新しい事物に対して受け入れやすい。)

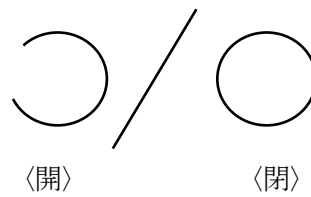


図4 (山梨: ibid.)

さらに、容器に仕切られた空間の中側 (i.e.裏) から見るか、外側 (i.e.表) から見るかという視点から、人間の心理的な状態を比喩的に表現することができる。その具体例とこれに関連する図式は、以下に示される。

- (3) a. この子は喜びが表に出ている。
- b. 彼女の裏の面を想像するのは難しい。(山梨: ibid.)
- c. 他是個表裡如一的人。
(彼は裏表のない人だ。)
- d. 每個人都有不為人知的陰暗面。
(人は誰でも他人に知られたくない恐ろしい一面がある。)



図5 (山梨: ibid.)

以上、容器のイメージスキーマに関わる認知的な視点と、それぞれの視点に関わる日中の具体例を考察した。容器の概念は、われわれの日常生活の具体的な経験を介して習得される。この種の概念は極めて重要であり、日常言語において広範に使われている。日本語と中国語のような類別詞を使う言語においては、容器に関わる表現は、入れ物の標識の他に、計数用の標識としても使われている。以下では、認知的視点から、日中両言語における容器の類別詞の意味と形式の側面をさらに具体的に考察していく。

5.1.2. 容器の類別詞

言うまでもないが、容器の主要な機能はモノを入れることで、計数する際、容器ごと数えるのはごく自然なことである。このように、容器の種類がそのまま類別詞として用いられる場合も少なくない。この種の類別詞としては、「桶」、「皿」、「籠」、「釜」、「缶」、「瓶」、「箱」、「壺」、「椀」、「樽」などが挙げられる。今井（2016：26-28）が指摘しているように、われわれが日常生活の中で用いる容器は、時代により変わっていく。したがって、容器の類別詞の体系も社会的、文化的な要因により左右される。この点は、次のような具体例によって明らかになる。

(4) たき（薫）物かい（貝）2かい（貝）。『山科家札記』

(5) 納豆が好物で毎日2パックは必ず食べてます。

(Yahoo Japan 知恵袋, 2013/9/1)

(https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11112766126)

以上のように、社会文化的な変化に伴い、ある一部の類別詞が歴史的に使われなくなったり、生活の需要のため新たな容器に関わる類別詞が体系に加えられることもある。古代の日本では、食後の貝の殻を入れ物として再利用する習慣があった。例えば、匙、食器、容器などの貝の器に関わる類別詞が、上の（4）に具体例として挙げられる。三保（2006:170-171）は、通時的な視点から日本語の類別詞を考察し、「貝」が類別詞として用いられる古代から中世に渡って用法の変化について、以下のように述べている。

…より古い時代には、アワビは神饌として、また、貢納物として格別の存在であった。それゆえ、計量単位も厳しく規定され、八世紀の木簡では「鮮鮑十貝」（二条大路木簡、東西溝 SD 五三〇〇）のような「貝（はい）」、また、「烈」「条」「連」が用いられることになっていた。時には「螺卅貝」との例も見える。「貝」は、その後にもアワビ（「蒸鮑」「丸鮑」「串貝」）やカキ（「牡蠣」）などに用いられたが、

中世のころから、右のような次第によって「盃（はい）」字に取って代わられたようである。ただし、薫物や練り薬などを入れたハマグリの殻などは…「かひ（貝）」と数える。貝の殻は、生活の中の種々の用具として再利用されることが多かった。「貝」字そのものは、こうした容器（器物類）を数える方に継承されていった。

（三保：ibid.）

類別詞の「貝」による数え方には、基本的に二つの用法がある。一つは、貝類自体を数える際に用いる数え方である。もう一つは、その食べ終わった貝の殻を容器として二次利用する際に用いる数え方である。後者は、特に薫物と練り薬に限られる。このような保存方法はやがて時代遅れになったため、その後ほとんど使わなくなっている。また、保存の利便性、携帯性と耐久性などの点から見てみると、貝の殻よりプラスチックの容器の方が優れている。この点は、上の（5）の例から明らかになる。（5）の例の納豆は、日本の代表的な食べ物の一つである。伝統的な作り方は、蒸した大豆を藁で包み、一定の温度に維持して一定の期間、放置する方法である。もちろん、自然発酵には時間がかかるので、市販の納豆はほとんど納豆菌を使い、短時間で発酵させることが多い。したがって、納豆の保存手段である容器の種類も次第に変わり、現在では、より衛生的なパックが使われるようになっている。

以上の考察から、容器の類別詞がわれわれの日常生活の一面を反映していることが明らかになるが、さらに食材の製造と保存に関わる類別詞も日常生活の一面を反映している。容器に関する類別詞を選択する際には、この種の背景的な知識が重要な役割を担う。以下では、容器の類別詞の中でも特にその使用頻度が高い「杯」を取り上げ、容器に関わる類別詞の意味と機能の諸相を考察する。

「杯」の古字は「盃」とも書かれるが、この類別詞によって指示される容器は、古代では酒を飲むために使用される手段であった。飲酒の習慣は時代ごとに変化し、使用される容器も変化している。認知的な観点から見た場合、「杯」を類別詞として使う際には、まず主体は入れ物（容器）に焦点を当てることになる。その後、次第にこの種の認知プロセスが

一般化され、酒を入れる容器だけではなく、容器全般を指すようになっている。また、「杯」の 카테고리には、広い意味でジョッキ、グラス、コップなどの容器も含まれる。このような大小、形状、材質、等が異なる容器の分布から次のような推論が可能となる。まず、「杯」で計数する際、主体は最初から厳密な量を聞き手に伝える意図は持たず、むしろ類別詞を介してその抽象的な量を具象化している。

三保 (ibid:198-199) は、助数詞に代表されるような類別詞には、基本的に情報の質と量を調整する機能がある点を指摘している。

助数詞は、それぞれにイメージをとめない、それによって対象物の形態や状況を推知させるが、同時に、その選択により、伝達する情報の伝え方を加減し調節することもできるようである。 (三保 : ibid.)

また、「杯」は中身の量の理解に関わるが、全ての容器と共起する訳ではない。以下の具体例を見てみよう。

(6) *缶コーヒー一杯を飲んだ。

(7) *ボトル一杯を飲み干した。

(6) と (7) の「杯」の用法は適切ではない。(6) と (7) に関しては、類別詞の「本」で用いる方が自然である。この例から明らかなように、類別詞の「杯」は、閉じた容器の表現と共起するより、開いた容器の表現と共起する方がむしろ適切である。

ここまで考察した容器に関わる類別詞は二種類に分けられる。一つは、容器の種類がそのまま類別詞になったものである。例えば、桶、樽、袋、鍋などがその典型例である。もう一つは、容器の形状を表す類別詞である。例えば、本、肚 (はら)、筒などである。

ここで注目したいのは、現代日本語では、一般的な容器の類別詞の代わりに、形状類別詞の「本」を用いて細長い容器を数えることになった事実である。この点に関しては、前

章の考察から明らかなように、一般の形状類別詞より「本」の類別詞の方がより広範に使用される。

濱野 (2006, 2011 : 61) は、「本」は「細長さ」という特徴付けが一般的すぎるため、意味の過剰な一般化が防げない点を指摘している。本研究では、細長い容器を対象として数えるようになった「本」の使用は、過剰な一般化と見なす。本来それぞれに対応する容器の類別詞が存在するにもかかわらず、対象の特徴から細長い属性に焦点を当て、「本」で数えるのは言語の経済性によるものと考えられる。すなわち、容器を「本」で数える際、いちいち容器に関わる背景的な知識を考慮する必要はないため、言語処理プロセスの負担を減らすことが可能となる。この際、主体は容器の種類、材質などの特性に関する情報を背景化し、容器の形状だけに焦点化している。これに対し、「缶」、「瓶」、「パック」のような容器の類別詞は、形状類別詞の「本」より多くの情報を聞き手に提供することができる。

5.2. メタファーに関わる類別詞

前節では、日本語における容器に関わる代表的な類別詞の使用を考察した。容器に関わる類別詞には、主に容器の類別詞と形状類別詞の二種類がある。前者は容器の特徴に基づいて類別するのに対し、後者は容器の形状に基づいて類別する。後者の使い方は、厳密には、特殊な拡張的な用法と見なされる。なぜなら、容器の類別詞が持つ情報量は、形状類別詞よりも多いからである。形状類別詞で容器を数える際には、対象に関する具体的な情報量は相対的に軽減されると言える。

中国語にも、数多くの容器の類別詞が存在する。その典型例としては、「盤 (皿)」、「杯」、「袋」、「缸 (かめ)」、「櫃 (筭笥)」、「鍋」、「盒 (箱)」、「壺」、「桶」、「碗」などが挙げられる。しかし、中国語では、形状類別詞を用いて容器を数えることはできない。また、日中の類別詞を比較した場合、中国語では、比喩的な概念を用いて類別詞を使用する傾向がある。例えば、一口井 (一本/一基の井戸)、一桌人 (テーブルに囲まれた人たち)、一窩小狗 (一群れの子犬) のような類別詞がその典型例である。この種の類別詞は明らかに容器ではないが、類別詞として使われる場合には、計量する機能を果たすことができる。すなわ

ち、この種の類別詞は、容器の概念に基づくものと考えられる。以下では、意味の創造性に関わるメタファーの概念が、いかに類別詞の具体的な使用に影響を及ぼすかについて考察する。

5.2.1. 容器のメタファー

Lakoff and Johnson (1980, 1999) は、メタファーは言語の体系だけでなく、われわれの思考の体系にまで広く行きわたっている事実を明らかにしている。また、この点を明らかにするために言語用例に基づく体系的な考察を行い、日常言語の概念体系を特徴づける根源的なメタファーのメカニズムの解明を試みている。日常言語には、多様なメタファーが存在する。その中でも容器のメタファーは、日常言語の概念体系を特徴づける重要なメタファーの一つである。以下では、容器のメタファーの基本的なメカニズムを考察し、さらにこの種のメタファーと類別詞の関係を考察していく。

容器のメタファーに関し、Lakoff and Johnson は以下のように説明している。

We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. We project our own in-out orientation onto other physical objects that are bounded by surfaces. Thus we also view them as containers with an inside and an outside. Rooms and houses are obvious containers. Moving from room to room is moving from one container to another, that is, moving out of one room into another. We even give solid objects this orientation, as when we break a rock open to see what's inside it. We impose this orientation on our natural environment as well. A clearing in the woods is seen as having a bounding surface, and we can view ourselves as being in the clearing or out of the clearing, in the woods or out of the woods. A clearing in the woods has something we can perceive as a natural boundary—the fuzzy area where the trees more or less stop and the clearing more or less begins. But even where there is no natural physical boundary that can be viewed as defining a container, we impose boundaries—marking off territory so that it has an inside and a bounding

surface—whether a wall, a fence, or an abstract line or plane. There are few human instincts more basic than territoriality. And such defining of a territory, putting a boundary around it, is an act of quantification. Bounded objects, whether human beings, rocks, or land areas, have sizes. This allows them to be quantified in terms of the amount of substance they contain. Kansas, for example, is a bounded area—a CONTAINER—which is why we can say, “There’s a lot of land in Kansas.”

Substances can themselves be viewed as containers. Take a tub of water, for example. When you get into the tub, you get into the water. Both the tub and the water are viewed as containers, but of different sorts. The tub is a CONTAINER OBJECT, while the water is a CONTAINER SUBSTANCE. (Lakoff & Johnson 1980:29-30)

以上のレイコフ・ジョンソンの指摘から明らかなように、容器のイメージスキーマは一つの空間領域として捉えることができる。すなわち、われわれの空間領域に対する認識は、基本的に物理的な容器に関する認識からきたと考える。ここで重要な点は、この容器のイメージスキーマが、物理的な空間領域からより抽象的な空間領域に比喩的に拡張されている点である。容器の概念に関するこの種のメタファーによる拡張は、日常言語の概念体系に広く行き渡っている。

山梨 (2000 : 141-142) は、日本語の容器のイメージスキーマに関わる言語表現の典型例として、以下の例を挙げている。

(8) 彼女は新しい劇団に入った。

(9) その考えを頭に叩き込んでおけ！ (山梨 : ibid.)

(8) と (9) から明らかなように、容器のイメージスキーマは、物理的な空間領域から、社会的 (e.g. 劇団)、心理的な空間 (e.g. 頭) の領域にメタファー的に拡張されている。またこの種のメタファーは、さらに類別詞の概念に影響を及ぼしている。

容器のメタファーと類別詞との関係には、少なくとも広義と狭義の二つの視点が関わっている。まず、類別詞は現実世界における対象を切り分け類別する標識である。類別詞には、その言語の特有な社会的、文化的な視点を反映する独自のカテゴリーが存在している。

その具体例としては、「本」、「枚」、「粒」のような形状によるカテゴリー、「頭」、「匹」のような動物の大小によるカテゴリー、「つ」のような抽象的な事物を対象とするカテゴリーが存在する。この種の分類は一見したところ論理的ではないが、われわれがモノを数える際、無意識に用いている分類である。この種の類別詞は、日常言語の概念体系を特徴づける際に重要な役割を担っている。また、この種の類別詞は、日常言語の概念体系を特徴づける複合的なメタファーにも密接に関わっている。

基本的に、この複合的なメタファーは、複数のプライメリー・メタファーの融合により形成されている（レイコフ・ジョンソン 2004/ 計見(訳) : 68）。以下では、容器の類別詞に関係するプライメリー・メタファーに注目し、分類の基盤となるカテゴリーの概念と容器のメタファーの関係を考察する。カテゴリーに関係するプライメリー・メタファーとしては、以下の例が挙げられる（レイコフ・ジョンソン : *ibid.*）

- A. プライメリー・メタファー : [カテゴリーは容器]
- B. 主観的な判断 : [種類別に関わる知覚]
- C. 感覚運動領域 : [空間]

(例 : 「トマトは果物に入るのそれとも野菜?」)

A は、人間の概念体系において、カテゴリーという概念を基本的に容器とみなすプライメリー・メタファーである。換言するならば、このメタファーは、カテゴリーという概念自体を、比喩的に容器とみなす点にその特徴がある。このメタファーの見立ての観点から見れば、本研究で考察の対象としている類別詞も容器の概念に関係している。一般に、類別詞の体系の一部は、容器の類別詞と容器に関わる類別詞を含んでいる。ここで特に注目したいのは、後者の容器に関わる類別詞である。この種の類別詞は、一見したところ、容器とは見なされないが、機能的ないしは概念的には容器と考えられる。以下では、この種の類別詞の具体例を考察する。

5.2.2. 容器に関わる類別詞

ここで考察の対象とする容器に関わる類別詞は、一般的には容器と見なさないが、類別詞として用いる際には、広い意味で容器の機能を備えた類別詞と見なされる。その典型例としては、「舟」が考えられる。

「舟」は、本来は人や荷物を運搬する水上の乗り物であるが、船形の容器に入れるモノを数える類別詞として用いられるようになってきている。すなわち、「舟」は名詞として使う際には乗り物の船を指すが、類別詞として使う際には舟のような形をした入れ物を指す。名詞の範疇から見れば、両者は異質なカテゴリーに属する。しかし本質的には、両者とも容器の機能を備えている。この広義の容器としての類別詞の用法は、容器のメタファーに基づく拡張的な用法と考えられる。また、前節で述べたように、容器のメタファーの汎用性は実に広く、肉体、空間、平面などの対象にも適用される。以下では、日中の類別詞を通して、この種のメタファーがいかに関わりの概念体系に浸透しているかを考察する。

ここでは、まず空間を容器に喩える類別詞について考察する。基本的に、空間は連続的な概念として概念化され、無限の広がりとして概念化される。しかし、われわれが暮らしている日常生活における空間は、屏風、家具、壁などの人工物を境界とする区切られたスペースとしても認識されている。また、空間は抽象的な世界であるにもかかわらず、具体的な生活の空間領域として数えることができる。具体的には、「和室 27 室」、「2 軒の家を所有している」のように空間を表す類別詞を介して、空間領域の一部を数えることができる。この種の例としては、さらに「戸」、「室」、「間」、「棟」、「店」、「寺」、「校」、「院」などの空間類別詞が考えられる。このように日常生活における空間は、その機能と目的により細かく分類されている。

また、われわれは容器という物理的なモノを介して、空間概念を認識し把握することができる。言い換えると、ある空間を一つの容器として捉えることができる。さらに、われわれがある空間の機能を認識する際には、その空間における中身（ないし内容物）を見てその機能を判断することができる。例えば、黒板、学習机、掲示板などを含む空間は、教室の空間領域の一部と見なされる。この場合、教室は一つの容器であり、黒板、学習机、

掲示板などは、その中身（ないしは内容物）に相当する。このように、空間類別詞を選択する際には、認知主体は、その空間に関連する事物（あるいは内容物）を連想して区別する。この種の類別詞は、対象空間に関するイメージを鮮明に表すことができる。

また、「戸」のように内容物が人の場合もある。「戸」は本来人が住むために建てられた住まいを数える際に用いる類別詞である。特に被害の調査をする際には、「戸」を用いてその対象となる民家を数える。飯田（2013:345）は、「戸」で数える際に、被害にあった住民も連想されると指摘している。この種の連想は自然である。なぜならば、人の住まいを容器として概念化する場合には、人の存在が前提とされるからである。このように、空間類別詞の「戸」を通して、間接的にその空間の中に暮らしている人間（e.g. 家族）を一つの集合体として数えることができる。

日本語ではこの種の用法は稀であるが、以下に示されるように、中国語ではよく見られる。

(10) 他进去时，里面已挤满了一屋子人。(武ほか 1995：399)

(彼が入って行った時、部屋はすでに人でいっぱいだった。)

(11) 这里住了一楼香港来的游客。(武ほか ibid：242)

(この一棟は香港から来た観光客でいっぱいだ。)

(12) 这一车厢的男女老少都是到北京去参观的。(武ほか ibid：62)

(この客車の老若男女はみな、北京へ参観に行く人たちです。)

(13) 他们一船人次日清晨安全登陆。(武ほか ibid：69)

(船に乗っていた人たちは、次の日の朝、無事上陸した。)

中国語の空間類別詞は、静的な空間に限られるだけでなく、車両や船といった乗り物のような移動できる空間（i. e. 動的な空間）にも適用される。上の（10）～（13）から明らかのように、「屋」、「楼」、「车厢（車両）」、「船」のいずれも人の集合を数えることができる。この場合、その空間にいる人数は明確になってないが、聞き手は大体どのくらいの人の集

まりであるかを推測することができる。なぜなら、話題となった空間は一つの容器と見なされ、その空間に入る人数が限られているからである。この空間と人の関係は、容器と内容物の関係に基づいている。また、この種の類別詞の使用は、容器の概念に基づいている。したがって、容器の概念は、入れ物とされる物理的なモノから、その空間に存在する人間へ拡張される事例も考えられる。この種の拡張は、以下の例に見られる。

(14) 这一桌儿饺子宴是专门为贵宾们做的。(武ほか ibid : 490)

(この卓の餃子料理は貴賓たちのために特につくったものだ。)

「卓」は日本語の食卓を意味する単語であり、基本的に一般名詞として使われるが、類別詞として用いられる場合もある。(14)はその典型例である。平面的な食卓を容器と見なすのは多少違和感があるが、モノを載せる空間領域として理解することもできる。この点で、食卓は容器の機能を備えていると言える。レイコフ・ジョンソン(1980)が容器メタファーの拡張について述べたように、容器の概念は、境界線を持つ対象物へメタファー的に写像されるだけではなく、境界のない空間、抽象的な平面、等へ写像することも可能である。したがって、中国語話者が食卓を容器と見なすのは不自然ではない。また、他の空間類別詞と同様、「卓」は、テーブルを囲んだ人たちを指すことができる。

(15) 屋子里坐了一桌子工人正在打麻将呢。(武ほか ibid.)

(部屋には労働者がいっぱい集まり、麻雀をしている。)

(15)では、「卓」は、麻雀をするためテーブルを囲んだ労働者の数を表している。麻雀は四人のプレイヤーであるテーブルゲームなので、基本的に一つのテーブルは四人となる。ここで正確な人数を伝えようとせず、あえて空間類別詞の「卓」を用いて情報をぼやかしている理由は、次のように推論できる。中国語話者にとって、麻雀はポピュラーなゲームであるため、プレイヤーの数が省かれていても自然に推測することが可能である。

認知言語学的な観点から見れば、この種の空間類別詞の拡張は、空間のメトニミー的な隣接性によるものと考えられる。なぜなら、数えられる対象は、容器となるテーブルの内（すなわち、天板の上のスペース）に存在するのではなく、表に存在するからである。この状況は、図6に示される。

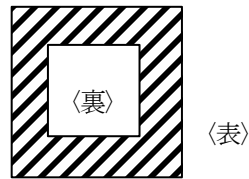


図6

図6の真ん中の四角はテーブルを表す。「桌」は類別詞としての働きをするため、容器の概念を含意している。前述したように、容器に対しては複合的な視点による捉え方がある。その一つは「容器の境界領域の裏から見ているのか外から見ているのか」という視点である。(15)の場合、指示された対象はテーブルの裏側に存在するのではなく、表側に存在する。図6の斜線を引いた部分は、対象となる人の位置を示している。また、指示関係から見た場合、認知主体は、図6の白い四角を表すテーブルを参照点（reference point）として、ターゲット（target）の対象を理解することができる。

容器のメタファーに基づく類別詞は他にも数多く存在する。前章で考察した身体類別詞の「口」は、その典型例の一つである。日常生活において、われわれは自分の身体機能を維持するために飲食しているが、この場合のわれわれの身体は、一種の容器と見なすことができる。ただし、身体類別詞の用法における全ての類別詞が、容器として概念化される訳ではない⁴。例えば、手、脚、腰などは身体の一部であるが、容器としては概念化されない。筆者の調査によると、日本語の場合、容器のメタファーを用いる身体類別詞は「口」だけである。一方、中国語では、この種の表現がよく用いられる。以下の例は、その典型例である。

⁴ 日本語における身体類別詞は、脚、軀、口、腰、喉、歯、頭、足、手、腹、目、面などである。これらの類別詞は、身体部位に基づいている。ここでは、この種の類別詞を身体類別詞と呼ぶことにする。

(16) 他深深地吸了一口气，又长长地呼了一口气。(武ほか ibid. : 213)

(彼は胸いっぱい息を吸った。そしてゆっくりと息を吐いた。)

(17) 小芳挨了母亲的骂，把一腔怒气全撒到男朋友身上了。(武ほか ibid. : 310)

(小芳は母に叱られ、その怒りを彼氏に向けた。)

(18) 他做了一年生意，背了一身债。(武ほか ibid. : 328)

(彼は一年商売をしたが、大変な債務を負ってしまった。)

(16) ~ (18) から明らかなように、中国語では身体類別詞を容器と見なし、それに関連する事物を数えることができる。通常、われわれは鼻で息をするが、鼻が詰まった時には口で呼吸する場合もある。また、吸った空気は肺に届き循環してから排出される。このような身体経験に基づいて、(16) と (17) の類別詞の拡張が可能となる。さらに、この種の類別詞は、より抽象的な概念を対象とすることもできる。(18) はその典型例である。この種の拡張は、おそらく病気、汗などの症状からの拡張と考えられる。

以上、本節では、容器に関わる類別詞の拡張的な用法を考察した。ここまでの考察から、一見したところ容器と関係がない空間類別詞と身体類別詞の一部も、容器のメタファーに基づいて拡張される事実が明らかになった。この種の拡張は、日中両言語に見られるが、中国語の方により広範に見られる。以下では、さらに類別詞の量に関する曖昧性について考察する。

5.2.3. 量に関する曖昧性

前節で考察したように、発話者は類別詞の選定を介して、話題となる対象の数に関する情報量を自由に調節することができる。換言するなら、同じ状況において、対象の数を厳密に伝えることもできるし、数をぼやかして大まかに伝えることもできる。次の例を見よう。

(19) たこ焼き一舟を買った。

(20) たこ焼き 8 個入りを買った。

一舟のたこ焼きの数が 8 個入りの場合、(19) と (20) は、いずれも同じ状況を表している。(20) は、対象物の数を明確に聞き手に伝えている。それに対し、(19) は、たこ焼きに注目するのではなく、たこ焼きを入れる容器に注目している。この場合、文面から容器の数は読み取れるが、容器の中のたこ焼きの数は明確には把握できない。

以下では、さらに数えられる対象の数量と体積が両方とも大きい場合、類別詞がどのような効果をもたらすのかについて考察する。次の三保の例を考えてみよう。

「東京ドーム」は巨大な屋根付き球場で、地下二階・地上六階からなる。そこで、この建造物を基準として、さらに大きな施設や構造物、あるいは、数・量を表すことがある…不法投棄された土砂の量を「東京ドーム二三〇杯分」(NHK TV、二〇〇三年一〇月一七日放送)、世界で二〇〇三年に生産されたビールの「総生産量は 1 億 4716 万キロリットルで、東京ドームをジョッキとすると約 119 杯分」(『朝日新聞』二〇〇四年八月三十一日)、などというのがそれである。(三保 2006:194-195)

この例から明らかのように、われわれは東京ドームの実際の大きさを知らなくても、その建物の規模をイメージすることができ、また、この具体的なイメージを介して、さらに巨大な対象を把握することができる。この種の数え方が成り立つのは、東京ドームに関する背景的知識があるからである。東京ドームを知らない人間は、この種の容器の数量に関する喩えを理解できない。また上記の例では、東京ドームに「杯」を用いることにより、数量を伝える基準となる東京ドームが一つの容器と見なされている。

上の例の場合、なぜビールの生産量に言及した後、再び類別詞を用いてその数量を言い直す必要があるのかに関し、三保は以下のように説明している。

「地球」も「東京ドーム」も、巨大な存在である…これらをもって、さらに大き

な数字を表現しようとしたものである。それぞれ精確な距離や敷地面積、あるいは、より具体的な土砂の量が提示できように、その数字に代え、助数詞による表現となっている。結果的に、大ざっぱな表現を故意に用いた形とはなっている。思うに、我々の言語生活においては、必ずしも精緻な数字は必要ではない。状況に応じて、適切な情報量を伝達すれば良いのであって、こうした場合には、抽象的な数字より、実在の物や身近の具象物を比較・対照しながら表現していく方が有効である。 (三保 *ibid.* : 196)

この三保の説明は、基本的に妥当と言える。われわれは、一般に既知の概念を介して、未知の概念の理解を試みる。メタファーは、この種の理解を可能とする認知手段である。この種の手段には、少なくとも以下の二つの効果がある。一つは、身近なモノを基準として数える際に、その数量の基準となるモノのイメージを介して具象化し、より捉えやすくする効果である。もう一つは、類別詞で数える際に具体的なイメージを想起し、その結果により鮮明に印象に残す効果である。ここでは、後者の効果に関わる具体例を考察する。次の例を見てみよう。

ポッキー何本分とは

ポッキー何本分、それは使い方次第でどんな意味にもなり得る

変幻自在、自由な言葉。

「ちょっと、話したいことがあるの。」は、「ポッキー5本分、時間いいかな。」「ものすごく、反省しています。」は、「ポッキー100本分、ごめんなさい。」「これからも、よろしくお願いします。」は「世界中のポッキー分、一緒にいてね。」それは時間の単位であり、気持ちの量であり、同じ1本分でも人によって感じ方が違う。言いだせない、ありがとう、ごめんねも、ポッキー何本分にのせると素直になれる。大切な家族、友だち、恋人。これから仲良くなりたい誰かと。明日は、

ポッキー何本分、話そうな。 (明日は、ポッキー何本分、話そうな, 2018/9/4)

(<http://cp.pocky.jp/message/>)

以上の例は、日本人にとって馴染みがあるお菓子メーカーのグリコが自社商品を宣伝するための広告である。ポッキーは、棒状のビスケットの上にチョコレートをコーティングしたお菓子である。したがってポッキーは、「本」で数えられる。しかし、上の例では、一本一本のポッキーを数えるのではなく、ポッキーを食べる時間の長さを数えようとしている。この場には、類別詞の「本分」という表現から、その数えられる対象が時間の長さであることが明らかになる。また、広告の中では、この斬新な数え方を用いて、日常生活の定着した表現を言い直している。例えば、「ポッキー100本分、ごめんなさい。」のような表現が、この種の言い直しの表現に相当する。一般に、お詫びや愛情の程度はかなり抽象的な概念であり、言葉で直接的には表現しにくい。しかしこの広告では、類別詞のイメージ性という特徴を生かして言い直すことにより、抽象的な概念が具象化し、よりインパクトのある表現になっている。

以上の考察から、類別詞には、精密に数量を表すより、抽象的な数字をイメージ化する機能があると言える。特に、数量に関わる対象が大きければ大きいほど、類別詞の使用は効果的になる。このように、類別詞は、対象のイメージ性を強化するが、その反面、実際の数量に関する伝達効果は弱いと言える。換言すると、類別詞のイメージを介して数量を理解するメリットは、大まかな数量の瞬時的な伝達にあると言えるが、他方、数に対する厳密さに欠け、その表現が曖昧になりかねないというデメリットがあると言える。

5.2.3.1. 数えられる対象物

類別詞は、対象を全体的に数える以外に、対象を細かく分解して数える機能も備えている。次の具体例を見てみよう。

(21) 一枚のピザは約8切れである。

(22) 林檎を一口食べた。

(23) 井戸から一桶の水を汲んだ。

(24) チョークを落として、二つに割れた。

これらの例は、いずれも類別詞を介して対象を細分化して数える典型例である。本来、対象となるピザ、林檎、井戸、チョークに対応する類別詞は、それぞれ「枚」、「個」、「基」と「本」である。しかし、(21)～(24)の例は、丸ごとの対象を数えるのではなく、対象の一部を取り上げて数えている。この場合、それぞれ使われている類別詞（「切れ」、「口」、「桶」と「つ」）は、本来の類別詞よりもフォーカスするスケールが小さくなっている。また、上の例から明らかなように、日本語のような類別詞言語は、可算名詞と質量名詞に関係なく類別詞を用いて数えることができる。今井（2010）は、日英語の計数の方法について、以下のように説明している。

日本語が英語と違うのは、動物や機械、コップやペンなど、明らかに「数えられる」モノについても「一匹のネコ」「一台の車」「一個のコップ」「一本のペン」というように、助数詞を使うことだ。つまり、日本語では、英語のような「数えられないモノ」と「数えられるモノ」の区別はしないようである。助数詞はとりあえずすべての名詞について、英語の不可算名詞のように、数える単位が必要であるとして、その上で、「小さい動物」「大きい動物」「細長いもの」「平たいもの」といった独特の基準で世界のモノを分類しているのである。（今井 *ibid.* :35-38）

以上の指摘から明らかなように、類別詞言語である日本語と非類別詞言語である英語は、名詞に対する捉え方が異なっている。以下では、名詞のカテゴリーを通して、両者の相違を考察する。

英語は、基本的に対象を可算名詞（count noun）と質量名詞（mass noun）に分ける二分法に基づいている。この二つの名詞の基本タイプとその概念原型は、それぞれ物体（object）

と物質 (substance) に対応する。以下に、それぞれの代表的な例を示す。

(25)

a.可算名詞 : diamond, book, cup, pencil, house, tree, apple, cat, tail, pancreass,
edge, county, lake, cloud, question, idea, integer, complaint ...

b.質量名詞 : gold, water, wood, coal, glue, skin, steel, air, moisture, electricity,
nonsense, anger, righteousnesss, complaining ...

(ラネカー2011/山梨 (監訳) : 163)

しかし、可算名詞と質量名詞の区別は、必ずしも不変的ではない。例えば、diamond は可算名詞でありながら、複数形の s をつけると質量名詞として捉えることができる。ラネカー (2011/山梨 (監訳) : 165) は、質量名詞は、個別性が欠落する典型的な質量名詞 (いわゆる「非複数形の質量名詞」) と複数形の名詞で形成される「複数形の質量名詞」の両者を含むと指摘している。その分類は、図7に示される。

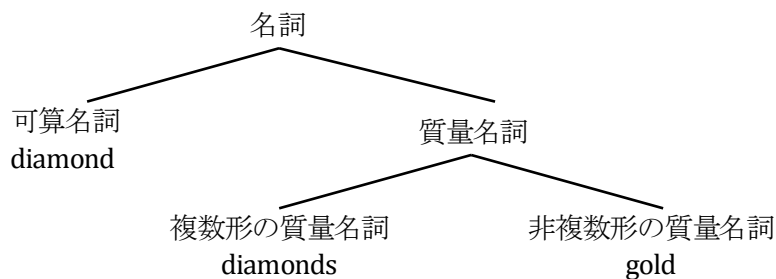


図7 (ラネカー : ibid.)

一方、日本語は、英語のように「可算名詞」と「質量名詞」の区別による数え方はしない。日本語、英語、フランス語のこの種の名詞の区別は、表1に示される (井上 1998)。

〈英語〉

可算名詞	book, table
物質名詞	water, rice

〈日本語〉

本、水、テーブル、米…

〈フランス語〉

	男性名詞	女性名詞
可算名詞	livre	table
物質名詞	riz	eau

表 1 (井上 ibid. : 142-145)

表 1 に示されるように、日本語で計数する場合、形式的には可算名詞と質量名詞の区別はない。すなわち、日本語では、可算名詞と質量名詞に関係なく、両者とも「数字＋類別詞＋の＋名詞」、あるいは「名詞＋数字＋類別詞」のいずれかの順序になる。しかし、形式上、両者の分別がないと言っても、その概念が類別詞に影響を与えないとは言えない。

厳密には、類別詞も物体と物質の概念を包含していると考えられる。例えば、類別詞の「個」と「つ」は、それぞれ物体と物質を対象とする。「個」は基本的に三次元的な個別の物体を数えるのに用いる。例えば、「帽子 3 個」、「クロワッサン 5 個」などである。それに対し、「つ」は、主により抽象的な対象を数えるのに用いる。例えば、「1 つの影」、「2 つの足跡」などである。また、飯田 (1999b : 40) は、新聞のデータベースに基づいて、「個」と「つ」で数える対象を考察し、「個」で数える場合、ほぼ 9 割が有形名詞を数える事実を指摘している。一方、「つ」で数える名詞の約 8 割が抽象名詞である。このように、類別詞は、物体と物質の概念を用いて一部の対象を類別する。ただし、類別詞のカテゴリーは、それ以外の概念（形状、大/小、生物/非生物、機能など）もカテゴライズする。したがって、この種の類別詞の体系は複雑である。

基本的に、物体と物質の概念は、日常生活の身体の手触りを通して認知され、概念化される。ただし両者の区別は、各言語により厳密には異なる。このような相違が生じるのは、各言語の主体の認識のモードが微妙に異なるからである。以下では、認知言語学の視点から、物質名詞と可算名詞の捉え方をさらに検討し、類別詞によるモノの認識のメカニズムの一面をさらに具体的に考察していく。

5.2.3.2. 物質名詞と可算名詞の捉え方

本節では、認知言語学的な視点から、英語における名詞の捉え方について考察し、言語主体による可算名詞/質量名詞の区別の認知プロセスを明らかにしていく。また、日本語の類別詞が関わる対象の捉え方の分析を試みる。

まず、英語における名詞の概念的な特徴づけについて、ラネカー（2011/山梨（監訳）：166）は、図8に示される名詞の区分を提示している。

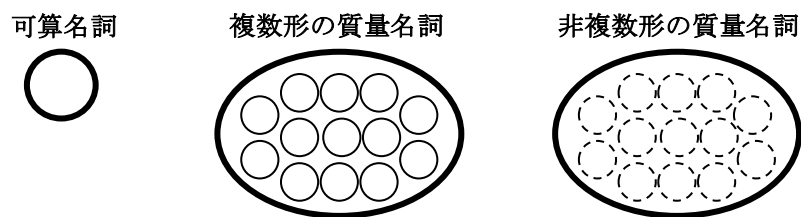


図8 (ラネカー：ibid.)

基本的に、可算名詞と質量名詞の区別は、対象となるモノが明確な境界を持つ個別的な物体であるか否かに基づいている。また、一般に質量名詞の形状は定まっていないため、本質的に境界がないとみられる。図8では、可算名詞を丸で表し、質量名詞を楕円で表す（太い実線は、プロフィールされる部分を表す）。ここで注目すべきは、質量名詞の内部構造に関しては、質量の個別的な特性があるものとなないものが含まれている点である。ここでは、楕円の中にいくつかの小さい円を用いてその内部構造を示す。図8の中央の図式は、その内部に個別的な特性が見られる「複数形の質量名詞」を表す。一方、右の図式は、その内部構造は分解することができない「非複数形の質量名詞」を表す。複数形の質量名詞と非複数形の質量名詞の内部構造から見ると、両者は対照的である。このような名詞の区別は、知覚される対象に関する主体の主観的な認知プロセスに起因するとラネカーは指摘している。すなわち、このような区別は、主体の認知的な捉え方に基づいている。

以下では、図9に基づいて、「可算名詞」と「質量名詞」の概念化の違いについて考察する。図9を分析する前に、いくつかの用語の説明が必要である。図9の直接スコープ

(immediate scope, 略称 IS) は、あるドメインにおける最大スコープ (maximal scope, 略称 MS) の一部を構成する。われわれが視覚的に観察できる範囲はある程度限られている。直接スコープは、主体の直接的な焦点が置かれる領域である。

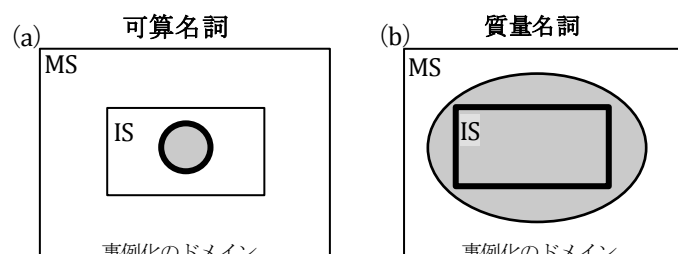


図9 (ラネカー ibid. : 168)

図9から明らかなように、可算名詞と質量名詞の区別は、直接スコープの中に指示対象の境界があるか否かによる。(ここでの事例化のドメイン⁵は、ものが存在する空間を喚起し、網かけの部分は物質の広がりを表す)。可算名詞の場合、指示対象の境界線は直接スコープの中にあり、その部分はプロファイルされている。それに対し、質量名詞の場合、必ずしも境界を持つわけではないため、直接スコープの中には境界がない。(仮に境界があるとしても、最大スコープの中にある。) したがって、直接スコープを介してプロファイルされるのは、対象となる物質の一部である。厳密に言うと、「可算名詞」と「質量名詞」の区別は、主体の焦点化のスコープによって相対的に決められる。また、主体の捉え方により、この区分の判断には揺れが生じる。英語の多くの名詞は、「可算名詞」と「質量名詞」の用法を同時に備えている。ただし、言語主体の認知的な慣習のモードにより、基本的にどちらかのカテゴリーに分ける傾向がある。この場合、慣習的な認知の定着度が高い方を基本用法とし、定着度が低い方を拡張用法とする。

以下では、ラネカー (2011/山梨 (監訳)) が提示する図10の認知規定に基づき、可算名詞的な意味から質量名詞的な意味に変換する際、どのような認知プロセスが生じるかについて具体的に考察する。

⁵ 事例化のドメイン (domain of instantiation) とは、マトリックス内の際たちのあるドメインが1つであり、具体事例がそこに存在する領域を意味する。

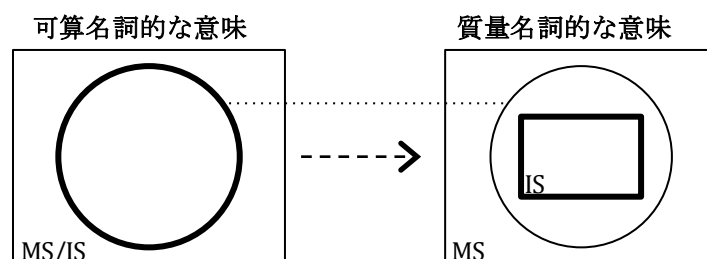


図 10 (ラネカー : *ibid.*)

ここで重要なのは、可算名詞的な意味から質量名詞的な意味に変換する際、主体が視線を移動していく点である。この視線の移動は、対象が持つ境界線から対象の一部にクローズアップしていく認知プロセスである。この視線の移動により、元々プロファイルされた対象の境界線が背景化し、注意を向ける対象の一部をプロファイルすることになる。

図 10 から明らかなように、この種の認知的な変換は、同一対象に対する異なる視点の投影による。図 10 の丸は対象を表し、左と右の丸は同一対象を表すため、両者の間を点線で示している。可算名詞として捉える際には、最大スコープ (MS) と直接スコープ (IS) が重なり、対象の全体 (外形) に焦点が当てられ、プロファイルされた境界線により可算名詞としての認知が成立する。(この場合、プロファイルされた部分を太線で示す)。これに対し、質量名詞として捉える際には、直接スコープは対象の内部に限定され、対象の一部を焦点化され、同時に対象の境界線が背景化される。

以上に考察した認知的な視点の変換の他に、質量名詞を拡張し、可算名詞的に用いる事例も存在する。その典型例としては、*a coffee, an ice cream, a tiramisu, a beer, a lemonade* などが挙げられる。この種の表現は、特に食べ物を注文する際によく用いられる。ラネカー (*ibid.* : 182) は、この種の現象は、プロファイルされた質量を一定の量に区切ることで生じると指摘している。このように、可算名詞と質量名詞の区別は、基本的に認知主体の視点の相対的な置き方により左右される。また、この種の区分は絶対的ではなく、文脈や場面により揺れが見られる。

ここまでの考察から明らかなように、基本的に類別詞を持たない英語では、モノを数え

る際に用いる可算名詞と質量名詞のカテゴリーは、互いにオーバーラップし体系的には複雑である。それでは、類別詞を持つ日本語では、名詞をどのように捉えるのだろうか。この点に関し、井上（1998）は次のように述べている。

…このような助数詞を持つ言語の場合、名詞の意味が英語でいう物質名詞と似ていて、その名詞だけでははっきりとした形がイメージしにくいということである。

（井上 *ibid.* :147）

このような指摘は一見したところ妥当に見えるが問題が残る。なぜなら、類別詞は、基本的に対象の特徴に基づき、相対的に概念化されるからである。言語主体は、五感（主に視覚）を介して対象を観察し、概念化する。言い換えると、主体は、類別詞に随伴するイメージ性に基づいて対象の特徴を抽出し概念化していく。この点で、上記の井上の主張には、問題が残ると言える。

類別詞を用いる際、可算名詞と質量名詞の違いは形式的には明示されていないが、両者の違いは概念的に理解することが可能である。例えば、類別詞の「個」と「つ」の事例を考えよう。今里（2004 : 55）は、日英語の数え方の相違を考察し、両者とも対象の個別性を判断するため、「境界」の概念を利用すると指摘している。言語を問わず、主体により知覚された物理世界におけるモノは、基本的に共通である。なぜならば、われわれがおかれている環境と人間としての身体機能は、基本的に変わらないからである。むしろ個々の言語における違いは、社会、文化的に慣習化された認知モードの違いに基づいている。

類別詞によって数える場合には、指示対象の全体はもちろん、指示対象の一部を分割し、数えることも可能である。すなわち、類別詞には対象を再分化する機能も認められる。この種の再分化は、質量名詞に限らず一部の可算名詞も当てはまる。次の具体例を考えてみよう。

(26) 一個 > 一切れ > 一口の林檎

(26) から明らかのように、類別詞は、対象が持つ境界を超えて、さらに対象を細かく切り分けることも可能である。(26) のような類別詞の用法には、われわれの食文化の一面が反映されている。例えば、子供やお年寄りが果物を食べる場合、食べやすいように、林檎を薄く切る習慣はかなり一般的な生活の一面と言える。この種の生活経験は、対象の全体だけではなく、対象を切り分けて数える助数詞の用法の発達の経験的な基盤となっている。

前章では、牛を考察対象とし、数え方の多様性について考察したが、この種の多様性は言語主体の視点の変換に起因している。その具体例を以下に挙げる。

(27) 一匹 > 一頭 > 蹄の牛

類別詞の「頭」と「蹄」は対象の身体部位であり、その部分を介して対象を指し示す。一方、類別詞の「匹」の用法は、対象の身体的な特徴から抽出した属性ではなく、〈牛は生物である〉といった抽象的な属性に基づいている。この場合、主体は対象の細かい特徴を背景化し、より広い範囲から対象を概念化している。この種の類別詞に反映される認知のスコープに関し、ラネカー (2011/山梨 (監訳) は以下のように説明している。

言語表現が喚起する各々のドメインにおいて、ある言語表現が規定するスコープとは、その言語表現のスコープの理解に本来備わっている言語主体自身の心的(主観的)な「視界」に現れる概念内容である。 (ラネカー ibid. : 81)

ここではこのラネカーの規定を参考にして、最大スコープと直接スコープの概念を用いて、類別詞が扱う範囲を分析する。最大スコープと直接スコープを区別は、〈部分/全体〉の階層関係を規定する際に重要な役割を担う。この〈部分/全体〉の階層関係を反映する典

型例は、身体部位詞である。身体部位詞の階層関係の典型例は、以下に示される (cf. ラネカー : ibid.)。

- (28) a. body > arm > hand > finger > knuckle
 b. body > head > eye > pupil

(28) に示されるような身体部位に関わる認知は、どの部分も同様のプロセスを介して概念化されるのではなく、身体部位相互の間に階層性が見られる。具体的に言うと、胴体 (body) は頭 (head) の直接スコープ、頭は目 (eye) の直接スコープ、目は瞳 (pupil) の直接スコープとなっている。このように、各部位が次の語の直接スコープとして機能している。したがって、(27) に示した類別詞の「蹄」の階層性は、「頭」より複雑である。「蹄」の意味は、少なくとも脚、肢蹄 (前肢、あるいは後肢の部位に当たる)、それに体の全体の概念に関連し、これらの概念が常に背景として存在している。それに対し、「頭」の概念は体の概念を背景化して概念化されている。この階層性は、次のように図式化することができる。(この図の基本的な枠組みに関しては、ラネカー (2011/山梨 (監訳) : 84) を参照。)

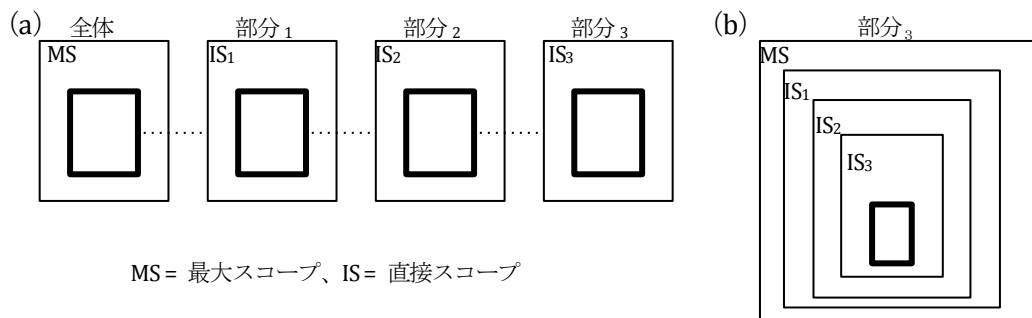


図 11

図 11 の MS と IS は、それぞれ最大スコープと直接スコープを示す。(a) の図における一連の太線の四角は、上の (27) の連続する身体部位の言語表現の階層関係を示している。(この場合、太線は、階層関係にある問題の各要素が、相対的にプロファイルされている

ことを意味する)。(27)の連続する言語表現では、各表現が次の身体部位の表現の直接スコープとなっている。この各表現の相互の繋がりは、点線で示されている。以上の(a)の図のスコープを次々に埋め込んだ場合には、(b)の図になる。

以上の図11の認知規定により、上の(27)の身体部位に関わる類別詞の階層を図式化すると、以下のようになる。

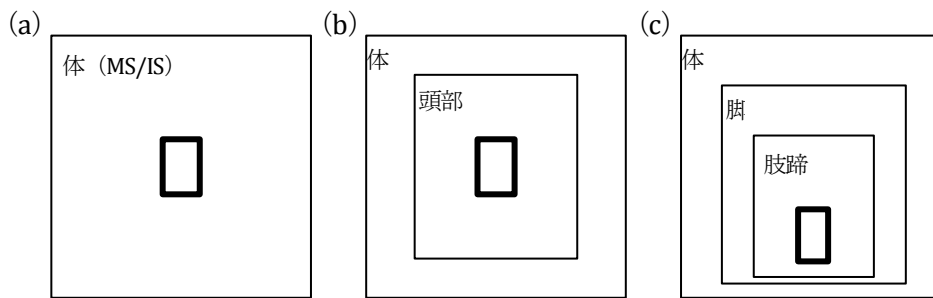


図 12

図12の(a)、(b)、(c)は、それぞれ類別詞の「匹」、「頭」、「蹄」の階層性を示す。先述したように、「頭」と「蹄」は身体部位であるためその階層性が顕著である。一方、「匹」は、対象の具体的な特徴を抽出するのではなく、より抽象的な概念の属性を抽出する類別詞である。この用法の基本的な機能は、対象のより抽象的な視点から対象を捉える点にある。したがって、図(12a)のように、「匹」で数える際に、最大スコープと直接スコープが同一になっている。以上の図12から、この階層性に基づく認知的な規定により、言語主体の視点の認知プロセスを把握することが可能になる。「匹」を用いる際には、主体の視点は対象から相対的にズームアウトしている。それに対し、「頭」と「蹄」の場合には、主体の視点は対象の細かい部位にズームインしている。

本節の以上の考察から明らかなように、類別詞を持つ日本語には、多種多様な認知的視点から対象を捉える能力が認められる。日本語の類別詞がこのような機能を担う要因は、類別詞を介して、対象の認知のスコープを相対的に広げたり絞ったりすることができる点にある。換言するならば、この種の類別詞の基本的な特徴は、その文脈と場面により、臨

機応変に認知的な視点の切り換えができる点にあると言える。

5.2.4. まとめ

本章では、認知言語学の観点から、日常言語の類別詞に関わる認知のメカニズムの諸相を考察した。特に本章の後半では、人間の一般的な認知能力の一面を特徴づけるメタファーの側面から、日本語と中国語の類別詞の用法を考察した。一見したところ、メタファーは、類別詞の機能には関係がないように見える。しかし、本章の考察から明らかなように、類別詞の使用には、メタファーの認知プロセスが密接に関わっている。

類別詞に関わるメタファーの典型例としては、容器のメタファーが挙げられる。容器のメタファーは、われわれが空間世界を概念化する際に重要な役割を担っている。われわれは対象世界のある側面を、容器の空間領域に見立て、この容器のメタファーを通して、抽象的な概念を認識することができる。この種のメタファー的な拡張は、日中両言語の類別詞の用法に置いても重要な役割を担っている。

本章の考察からも明らかなように、日本語には数多くの空間類別詞が存在する。この種の類別詞の基本的な機能は、「客室」、「教室」、「寝室」のように、日常生活の空間領域を具体的に区別する点にある。また、空間類別詞の中で特に興味深いのは、類別詞の「戸」である。この類別詞は、例えば、被害にあった民家の数を特定する際に使われる。この場合、「戸」は家族のユニットを表し、間接的にその空間にいる住民を示す。したがって、この類別詞には、〈容器-内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。以上のような日本語の空間類別詞に対し、中国語では、「屋」、「楼」、「车厢（車両）」、「船」などの空間類別詞を用いて、その空間にいる人の数を表すことができる。したがって、中国語の空間類別詞にも、〈容器-内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。

類別詞の使用には、さらに焦点化、ズームング、視点の切り換え、等の認知プロセスが密接に関わっている。本章の後半では、この種の認知プロセスが密接に関わる類別詞として、可算名詞と質量名詞の区別を可能とする日本語の類別詞を考察した。英語のような言語と異なり、多様な類別詞を持つ日本語では、可算名詞と質量名詞のカテゴリーを、文脈、

場面に応じて相対的に概念化することが可能である。また、日本語の類別詞には、対象の境界領域の抽象度と具象度をズームイン/ズームアウトの認知プロセスにより、相対的に区分していく機能も認められる。この場合の主体の視点の置き方は動的で、レンズのように対象の一部にズームインしたり、対象からズームアウトすることも可能である。

以上、本章では、認知言語学の枠組みに基づき、日本語と中国語の具体例を中心に、日常言語の類別詞の機能を特徴づける人間の認知能力の一面を明らかにした。言語学の基本的な目標は、日常言語の形式と意味の関係を明らかにするだけでなく、この関係を可能とする人間の認知能力の諸相の解明にある。本章の類別詞の考察は、この意味での言語研究に重要な知見を提供する。

第6章 結語と展望

類別詞の研究は、言語学の重要な研究テーマであるだけでなく、社会・文化的な観点から見た異言語間のカテゴリー化と発想の違いを研究する言語学の関連分野においても、重要な研究テーマになっている。

日中両言語には、多様な類別詞に基づいて対象世界を分類し、カテゴリー化していくシステムが存在している。また、この種の数え方の使用には、日本文化や中国文化における歴史的な背景から現代に至る日常生活の様々な側面が反映されている。この意味で、日中の類別詞の比較研究は、言葉のカテゴリー化のメカニズムの解明だけでなく、言葉の背後に存在する社会・文化の違いや両言語の発想の違いの解明を可能にする。

類別詞によるカテゴリー化においては、個々のカテゴリーが独立に存在するのではなく、互いに関連し合い、複雑な体系を成している。従来の類別詞の研究では、基本的に通時的な研究と共時的な研究の二つの視点からの類別詞の記述的な分析がなされてきた。本研究では、まず以上の視点を背景とする従来の研究に対し、次の問題を指摘している。これまでの類別詞の研究では、基本的に古典的なカテゴリー観に従い、類別詞の典型的な事例（ないしはプロトタイプ的な事例）の記述に限定し、典型例と周辺事例を統一的に分析する研究がなされていない。また、類別詞の分析に際しては、客観的な判断基準だけを前提としており、対象世界を知覚し認識する言語主体の主観的な判断に関わる認知的な要因は考慮されていない。以上の点に、これまでの類別詞の研究の問題がある。

これに対し近年では、認知的な視点に基づく日本語の類別詞の研究がなされてきている。その代表的な研究としては、松本（1991、2003）と濱野（2006、2011）が挙げられる。しかしこれらの研究は、基本的に類別詞の使用の制約を中心に考察し、本格的に類別詞の体系的な分析はなされていない。

本研究では、プロトタイプ理論、フレーム理論、焦点化、視点の投影などの認知言語学の理論的な枠組みに基づいて、類別詞の体系とこの体系を特徴づけるカテゴリー化のメカ

ニズムを考察した。本研究では、特に認知的なアプローチに基づく分析により、類別詞の生起、判断基準、類別詞の使用と認知主体の視点との関係を綿密に分析した。従来の研究と異なり、本研究は、さらに類別詞によるカテゴリーの主観性に注目し、従来、例外とされてきた周辺的な言語事例（ないしは拡張事例）を取り上げ、認知言語学のカテゴリー観に基づき、典型的な類別詞から周辺的な類別詞への拡張のプロセスとこの種の拡張を可能とする動機づけを考察した。

日中の類別詞は、歴史的には主に数量を表すため作られたが、その発展に伴い、数量だけでなく、対象世界を具体的に類別し、カテゴリー化する機能を担うようになっている。計数の機能やカテゴリー化の機能は、類別詞の基本的な機能とされる。従来の研究では、主に前者の機能に注目し、類別詞の用例を記述的に分析している。これらの研究は、古典的カテゴリー観の規定に基づいて類別詞を考察するため、類別詞の拡張事例を例外として除外する傾向にある。典型例の類別詞の分析を主眼とする従来の研究は、類別詞の創発的な拡張事例の用法の研究には至ってない。

類別詞によるカテゴリーは、一般の生物学の分類や客観的な基準による分類と一致しない。また、類別詞の実際の使用においては、一つの対象に対して使われる類別詞が複数ある場合、どの類別詞が優先的に使われるかの決まりはない。また、類別詞の多様性により、その使用には個人差が見られる。類別詞の選択は、基本的に物理世界における対象の客観的な特徴によるのではなく、言語主体の主観的な視点と判断に多分に左右されている。したがって、従来の研究が前提とする客観的な基準に基づく類別詞の分析は不適切である。

認知的な観点から類別詞の分析を試みている Lakoff (1987)、井上 (1999)、三保 (2006)、中川 (1995) の研究によれば、類別詞には、外部世界と言語主体との相互作用が反映されるという特徴が認められる。本研究では、従来の古典的な客観主義の言語観とは異なり、認知言語学のカテゴリー観を背景に、類別詞の体系とカテゴリー化に関わる言語現象の諸相を考察した。

認知言語学の意味論では、言葉の意味は、主体と環境とのインターアクションに根ざす身体的な経験から創発するという視点に立っている。類別詞の使用には、この種の身体的

な経験に基づくカテゴリー化のプロセスが反映されている。なぜなら、類別詞のカテゴリー化は、基本的に言語主体の身体を介して周りの事物を認識し概念化するからである。本研究は、この身体的基盤の理論に基づいて、従来の研究で提示されてきた類別詞の使用の制約を問い直した。その結果、類別詞が用いる大/小、上/下、太い/細い、硬い/柔らかい、空間、運動などの概念は、いずれも言語主体の身体化された経験に基づいていることが明らかになった。換言するならば、この種のカテゴリー化は、従来の類別詞の研究が前提とする客観的な基準によるのではなく、対象世界を解釈し、意味づけしていく言語主体の主観的な判断基準に基づいている事実が明らかになった。

類別詞の使用に関わる主観性は、中心的な事例（いわゆるプロトタイプ的な例）だけでなく、類別詞の体系の全体に広く行き渡っている。特に類別詞の拡張事例の多くは、言語主体の身体的経験に関わる知識と百科事例的知識により動機づけられている。本研究では、蚕を「頭」で数える拡張事例を取り上げ、その背後の動機づけを考察したが、その結果、類別詞の選択には、外部世界に対するわれわれの社会・文化的な知識と百科事典的知識が密接に関わっている事実が明らかになった。

本研究では、認知的な概念マトリックスとドメインの関係を介してこの事実を説明した。蚕のマトリックスに含まれるドメインは、人それぞれに異なり、最も中心に位置するドメインは「生物の概念」のドメインだけである。それに対し、類別詞の場合、「生物の概念」は同じく中心的に位置し、残りの「ペット的な概念」、「商品的な概念」、「家畜的な概念」等の他のドメインは、比較的に周辺的な位置している。蚕を数える際には、喚起されるドメインにより類別詞が共起する。しかし、実際にどのドメインが優先的に喚起されるかに関しては、個人差が見られる。例えば、一般の人の場合には、「匹」で数える度合いが高く、養蚕業の関係者の場合には、「匹」より「頭」で用いる度合いが高くなる。また、類別詞の拡張事例は、一般に文脈や場面に強く依存する傾向があるが、一部は文脈に頼ることなく、言語主体の自らの知識背景により動機づけられる例も観察された。

本研究の以上の考察から、類別詞のカテゴリー化においては、言語主体の主観的な認知プロセスが重要な役割を担っている事実が明らかになった。類別詞による対象世界のカタ

ゴリー化は、従来の研究で提示された物理世界における対象の特徴によるのではなく、言語主体が対象世界を主観的に解説し類別する認知プロセスを具体的に反映している。さらに言えば、類別詞による対象世界の 카테고리化は、問題となる対象のどの部分に焦点化し、どの基準により認識し、どのように分類するか、といった主体の主観的な認知プロセスを反映している。

この点を踏まえ、本研究では、類別詞の考察に際し次の点からの新しい分析を試みた。まず、認知言語学の言語観を背景に、類別詞と言語主体の視点との関係に注目し、言語主体のモノに対する捉え方がどのように類別詞の使用に影響を及ぼすかを明らかにした。例えば、本研究は、牛の数え方を通して、主体の視点の切り替えと類別詞の選択との関連を明らかにした。認知的な分析からみれば、牛を数える際に類別詞の「頭」と「蹄」は図と地の反転により相対的に特徴づけられる。また、対象となる牛の特徴と関係なく、「牛は生物である」という事実を捉え、数えることもできる。一般に日本語話者は、「牛一匹」のような言い方に対して違和感を覚えるかもしれないが、この種の数え方は実際の言語使用においても観察される (cf.松本 1991 : 86)。このように、対象を類別する際、言語主体は自らの知識により対象を分類する用法も存在する。

また本研究では、日中両言語に共通する類別詞の「頭」を取り上げ、両言語の使用の範疇と、動物に対する一般的なカテゴリ化のプロセスを考察した。一見したところ、両言語は、類別詞の「頭」で大型動物を基本的に数えるが、使用範疇を比較した場合、中国語では大型動物をさらに下位分類している。この種の事実から、本研究は、以下の点を明らかにした。大陸文化の中国には、家畜と共存している生活スタイルが存在し、日常生活の需要に応じ独自の数え方（ないしは慣習的な数え方）が生じている。これに対し、海に囲まれた島国の日本では、魚類と貝類に関わる類別詞が中国語よりも相対的に数多く観察される。したがって、日中の類別詞の仕方の相違は、両言語の動物に対する捉え方の違いと両国の異なる生活形態の違いに起因する。

さらに本研究では、認知言語学的な視点から、日中両言語の可算性に関わる類別詞の用法も具体的に考察した。類別詞は、基本的に対象を可算名詞と質量名詞を区別せず、数え

ることができる。また類別詞には、対象の境界線を越えてさらに細かく分類する機能も認められる。この種の類別詞の使用には、焦点化、ズームイン、視点の切り替え、等の認知プロセスが密接に関わっている。本研究では、この種の認知プロセスに関わる類別詞として、可算名詞と質量名詞の区別を可能とする日本語の類別詞を考察した。英語のような言語と異なり、多様な類別詞を持つ日本語では、可算名詞と質量名詞のカテゴリーを、文脈、場面に応じて相対的に概念化することが可能である。また、日本語の類別詞には、対象の境界領域の抽象度と具象度をズームイン/ズームアウトの認知プロセスにより、相対的に区分していく機能も認められる。この場合の主体の視点の置き方は動的で、レンズのように対象の一部にズームインしたり、対象からズームアウトすることも可能である。

以上、ここまでの考察を通して、類別詞には、言語主体の視点が反映されるだけでなく、われわれのモノに対する捉え方、日常生活のあり方、社会・文化的な慣習などが反映されている事実を明らかにした。また類別詞には、認知主体の期待と関心に関係する事例も存在する。例えば、これから盲導犬になってほしい子犬に対して、期待を込めて、「頭」で数える用例も確認される。

本研究では、さらに人間の一般的な認知能力の一面を特徴付けるメタファーの側面から、日本語と中国語の類別詞の用法を考察した。このメタファーから類別詞を考察する視点は、従来の研究において見られない新たな観点であり、ここに本研究の類別詞の分析のオリジナリティがある。

一見したところ、メタファーは、類別詞の機能には関係がないように見える。しかし、本研究の考察から明らかのように、類別詞の使用には、メタファーの認知プロセスが密接に関わっている。類別詞に関わるメタファーの典型例としては、容器のメタファーが挙げられる。容器のメタファーは、われわれが空間世界を概念化する際に重要な役割を担っている。われわれは対象世界のある側面を、容器の空間領域に見立て、この容器のメタファーを通して、抽象的な概念を認識することができる。この種のメタファー的な拡張は、日中両言語の類別詞の用法においても重要な役割を担っている。

本研究では、日本語と中国語の空間類別詞を取り上げ、この種のメタファー的な拡張が

どのように類別詞の用法に影響しているかを考察した。日中両言語には、多くの空間類別詞が存在する。この種の類別詞の基本的な機能は、日常生活の空間領域を具体的に区別する点にある。その具体例としては、「戸」、「室」、「間」、「棟」、「店」、「寺」、「校」、「院」などが挙げられる。本研究の考察から明らかなように、空間類別詞を選択する際には、言語主体は、その空間に関連する事物（あるいは内容物）を連想して区別する。この種の類別詞は、対象空間に関するイメージを鮮明に表すことができる。また、空間類別詞の中で特に興味深いのは、類別詞の「戸」である。この類別詞は、例えば、被害にあった民家の数を特定する際に使われる。この場合、「戸」は家族のユニットを表し、間接的にその空間にいる住民を示す。したがって、この類別詞には、〈容器-内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。以上のような日本語の類別詞に対し、中国語では、「屋」、「楼」、「车厢（車両）」、「船」などの空間類別詞を用いて、その空間にいる人の数えを表すことができる。したがって、中国語の空間類別詞にも、〈容器-内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。本研究では、以上の容器のメタファーに関わる、日中両言語の類別詞の用法の認知的分析を試みた。

容器のメタファーに基づく類別詞は他にも数多く存在する。例えば、日本語の身体類別詞の「口」はその典型例の一つである。身体類別詞の「口」を容器と見なすのは、言語主体の身体的な基盤に基づいている。この種の表現は、非常に理解しやすく、日常言語ではよく用いられる用法である。以上の日本語の類別詞に対し、中国語では、「腔」、「身」、「手」、「屁股（お尻）」、「肚子（お腹）」、「鼻子」などの身体類別詞を容器と見なし、それに関連する事物を数えることができる。

本研究では、このように一見したところ容器と関係がない空間類別詞と身体類別詞の一部も、容器のメタファーに基づいて拡張される事実が明らかになった。この種の拡張は、日中両言語に見られるが、中国語の方により広範に見られる。以上の考察から明らかなように、類別詞の使用とその創造的な拡張には、メタファー的な視点が密接に関わっている。本論文は、日中の類別詞の分析に対する、以上の新たな認知的知見を提示している。

類別詞には、対象を具象化する機能が認められる。特に、「本」のような形状類別詞は

主に対象の形状により類別する点で、そのイメージ性が他の類別詞よりも相対的に強いと考えられる。類別詞のイメージ性に関する研究はこれまでも試みられ、ある種の成果が見られる。しかし、この種のイメージ性に関する研究は、形状類別詞の領域に限られているのが現状である。形状類別詞に限らず、類別詞には一般的に多様なイメージ性が認められ、このイメージ性の違いにより対象世界の様々なカテゴリー化がなされている。

以上の問題点を踏まえて、本研究では、ケーススタディーとして形状類別詞の「本」と非形状類別詞の「頭」を取り上げ、類別詞のイメージ性に関する多角的な考察を行った。その結果、大型動物を対象とする類別詞の「頭」は、瞬時的に対象の大きさを分別するため、心的なイメージが重要な役割を担う事実が明らかになった。本研究のこの種の類別詞の規定は、三保（2006）の研究によっても裏付けられる。三保は、以下のような典型例に基づいて、類別詞のカテゴリー化に関わるイメージ性を説明している：「総生産量は1億4716万キロリットルで、東京ドームをジョッキとすると約119杯分」（『朝日新聞』二〇〇四年八月三十一日）。この事例では、メタファーに関わるイメージ性が重要な役割を担い、このイメージ性が、問題の対象を理解するための重要な認知の手段になっている。本研究では、この種の認知の手段には、少なくとも二つの効果が見られる事実を明らかにした。一つは、身近なモノを基準として数える場合、その数量の基準となるモノのイメージを介して、問題の対象を具象化し、より捉えやすくする効果である。もう一つは、類別詞で数える際に具体的なイメージを想起し、その結果より鮮明な印象に残す効果である。本研究の以上の考察から、日常言語の類別詞が、イメージ性を介して対象をカテゴリー化し、より分別的で効果的な情報を伝達する機能が明らかになった。

また、本論文では、日中両言語における身体類別詞の「頭」の歴史的な変遷を考察した。日中両言語には、人を数える類別詞（以下、対人関係の類別詞）が数多く存在する。例えば日本語では、「人（ひと、たり）」、「名」、「位」、「員」などがこの種の類別詞の代表例として挙げられる。これに対し、中国語の対人関係の類別詞としては、「人」、「名」、「個」、「位」、「窩」、「幫」、「伙」などが挙げられる。これらの類別詞の基本的な機能は、対人関係や社会関係の具体的な違いを反映する点にある。例えば、「名」、「人」のような類別詞は、

言語主体と指示対象の関係（例えば、店員とお客様との関係）を示すのに使われる。また、この種の類別詞の使用には、言語主体の指示対象に対する気持ちの表れ（敬意と軽蔑など）が反映される場合がある。したがって、対象世界をこの種の類別詞でカテゴリー化する場合、その区別には、心理的（ないしは社会的）な差異化が反映される場合もある。この種の用法は、一種のポライトネスの用法としても捉えることができる。

本研究は、類別詞に関わる対人関係的（ないしは社会的）な差異化の問題を考察した。本研究で考察した対人関係の類別詞は、人間関係、権力関係、利益関係などに密接に関わっているだけでなく、使われる場面と状況に依存している。以上の本研究における類別詞の考察は、日常言語の社会的な役割やポライトネスの機能の解明のための基礎研究としても重要な役割を担う。

また、本研究の考察では、類別詞には、多種多様なメタファー的用法が存在する事実が明らかになった。この種の用法は、類別詞の基本的カテゴリー（ないしは典型的なカテゴリー）から周辺的なカテゴリーへ創造的に拡張する役割を担っている。この種の用法は一見したところ、文法的には不適切であるように見えるが、言語主体の対象世界に対する主観的な解釈に動機づけられる。具体例としては、「そこに人間が一匹いるよね。撃ってみよう」が挙げられる。この例は「GIVER 復讐の贈与者」という日本のドラマのセリフである。この例では、主人公が子供の頃に家族を失ったため、自分と他人の気持ちを一切感じることができない、殺し屋になったという背景が存在する。この事例で興味深いのは、「人間」を数える際に、「生物」を数える類別詞の「匹」が用いられるという点である。

本研究では、この種の類別詞の拡張的（ないしは周辺的）な用法は、認知のドメイン・シフトに基づく創造的な用法として、次のように規定した。一般に人を数える際に、「人」のドメインが優先的に喚起される。しかし、特別の意図により、周辺的に位置づけられる「生物的な側面」のドメインが活性化され、このドメイン・シフトの認知プロセスを介して以上のような類別詞の拡張的な適用が可能となる。この種の用法では、慣習的な類別の仕方（いわゆる〈人間〉と〈非人間〉）と異なり、言語主体が対象となる人を「生物」のカテゴリーレベルにドメインをシフトしている。この場合、人間のカテゴリーに基づく認知

レベルを背景化し、動物の生物学的な属性のレベルを前景かしている。

以上の例に見られるように、本研究では、日常言語の類別詞の具体的な用法を、従来の研究のように記述レベルで分類するだけでなく、対象世界を解釈する言語主体の認知能力に基づく説明を試みた。この種の認知能力には、カテゴリー化、焦点化、背景化、ドメイン・シフト、メタファー変換、メトニミー変換、等が含まれる。本研究では、この種の認知プロセスとの関連で、日中両言語を中心とする類別詞の用法と機能の説明を試みた。これまでの類別詞の研究は記述レベルに止まり、類別詞の用法と機能に関する認知的な説明は本格的にはなされていない。本研究の独創性は、この後者の認知的視点からの類別詞の記述と説明を試みた点にあると言える。

本研究は、歴史的な観点から見た類別詞の考察も一部なされているが、主に共時的な観点からの類別詞の認知的な分析が主眼となっている。歴史的、通時的な観点からの類別詞のより詳細な分析は、今後の課題として残される。また、本研究では、日中両言語の類別詞の分析が中心となり、英語の数詞、分類詞、等の用法を除き、他の言語との対照研究はなされていない。今後、この広い類型論的な視点に基づく類別詞の対照研究にも、本研究の分析をさらに適用していきたい。

参考文献

- ビジネスリサーチ・ジャパン (2004) 『意外と知らない「数え方」の事典』、三笠書房.
- 陳 榮安(2014) 『中文量詞歴史辭典』、文鶴出版有限公司.
- 陳 榮安(2017) 『漢語古今量詞辭典』、文鶴出版有限公司.
- 藤原多賀子 (2004) 「頭／匹／羽の用法とカテゴリー化の過程」『類別詞の対照』シリーズ
言語対照<外から見る日本語>第3巻、くろしお出版、113-127.
- 郭 春貴 (2017) 『誤用から学ぶ中国語続編2』、白帝社、66-116.
- 郭 明昆 (1962) 『中国の家族制及び言語の研究』、東方学会、379-448.
- 橋本永貢子 (2008) 「量詞“張”の意味的ネットワークについて」『岐阜大学地域科学部研究報告』23 : 67-77.
- 橋本永貢子 (2009) 「名詞から量詞へ」『岐阜大学地域科学部研究報告』24 : 29-43.
- 橋本永貢子 (2014a) 『中国語量詞の機能と意味：文法化の観点から』、白帝社.
- 橋本永貢子 (2014b) 「中国語の量詞“条”と日本語の助数詞「本」の多義的ネットワーク」
『日中語彙研究』4 : 1-31、愛知大学中日大辞典編纂所.
- 橋本永貢子 (2017) 「中国語の数え方：量詞の成立と発展および現代における選定基準」『日本語学』36-5:60-70、明治書院.
- 濱野寛子 (2006) 「助数詞「本」の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』12 :
77-93.
- 濱野寛子 (2011) 「言語のカテゴリー化に関する認知言語学的分析:助数詞の考察を中心に」、
京都大学博士論文.
- 飯倉晴武 (2012) 『日本人の数え方がわかる小事典』、PHP 研究所
- 飯田朝子 (1999a) 「日本語主要助数詞の意味と用法」、東京大学人文社会系研究科博士論文.
- 飯田朝子 (1999b) 「〈一個〉と〈一つ〉は置き換えられるか」『言語』28、10:38-41.
- 飯田朝子 (2005a) 『数え方でみがく日本語』、筑摩書房.
- 飯田朝子 (2005b) 『数え方もひとしお』、小学館.
- 飯田朝子 (2013) 『数え方の辞典』、小学館.
- 飯田朝子 (2017) 「進化する技術に、助数詞はどこまでついて行かれるのか：インターネットやロボットの数え方」『日本語学』、36-5:24-34、明治書院.

- 伊藤紀子 (2004) 「形状類別詞「粒」の用法とまとまり性」『類別詞の対照』シリーズ言語対照<外から見る日本語>第3巻、くろしお出版、79-93.
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったら』、大修館書店.
- 井上京子 (1999) 「助数詞は何のためにあるのか」『言語』28、10:30-37.
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』、岩波書店.
- 今里典子 (2004) 「非類別詞／類別詞言語を決定する要因について」『類別詞の対照』シリーズ言語対照<外から見る日本語>第3巻、くろしお出版、39-57.
- 金子孝吉 (2000) 「助数詞と対象分類：文化システムの研究 (3)」『彦根論叢』327: 115-140.
- 金光仁三郎 (1999) 「数のシンボル」『言語』28、10:72-78.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』、研修社出版、48-51.
- ことばの文化研究会 (2008) 『知っているようで知らないものの数え方』、株式会社日本文芸社.
- 邱 馨儀 (2016) 「日中類別詞に関する認知言語学研究：翻訳小説を通して助数詞「本」の意味拡張を考察する」『関西外国語大学院研究論集』40: 27-43.
- 邱 馨儀 (2018) 「認知言語学から見た日本語類別詞「頭」のカテゴリー化」『比較文化研究』132: 25-34.
- Lakoff, George. and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press, London.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press, London. (池上嘉彦ほか(訳) (1993) 『認知意味論』、紀伊国屋書店)
- Lakoff, George. and Johnson, Mark. (1999). *Philosophy In The Flesh*. Basic Books, New York. (レイコフ、ジョージ&ジョンソン、マーク (2004) 『肉中の哲学：肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』計見一雄訳、哲学書房)
- Langacker, Ronald W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press. (山梨正明(監訳) (2011) 『認知文法論序説』、研究社)
- 李 在鎬 (2010) 『認知言語学への誘い：意味と文法の世界』、開拓社.
- 呂 叔湘編 (1992) 『中国語文法用例辞典』、牛島徳次ほか訳、東方書店 [増訂版 (2003) 『現代漢語八百詞増訂本』東方書店] .
- 頼 慶雄 (2012) 『実用量詞用法詞典』、小螢火蟲出版 [増訂版 (2013) 『実用量詞用法詞典』

- 小螢火蟲出版] .
- 松本克己 (1999) 「世界言語の数詞体系とその普遍的基盤」『言語』28、10:22-29.
- 松本 曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系：原型意味論による分析」『言語研究』、
99 : 82-106、日本言語学会.
- 松本 曜 (2003) 『認知意味論』シリーズ認知言語学入門第3巻、267-274、大修館書店.
- 真野美穂 (2004) 「類別詞「個」と「つ」の認知的考察」『類別詞の対照』シリーズ言語対
照<外から見る日本語>第3巻、くろしお出版、129-147.
- 水口志乃扶 (2004) 「「類別詞」とは何か」『類別詞の対照』シリーズ言語対照<外から見る
日本語>第3巻、くろしお出版、3-22.
- 水口志乃扶 (2004) 「日本語の類別詞の特性」『類別詞の対照』シリーズ言語対照<外から
見る日本語>第3巻、くろしお出版、61-77.
- 三保忠夫 (2006) 『数え方の日本史』、吉川弘文館.
- 三保忠夫 (2017) 「古代から近世にかけての助数詞の実態」『日本語学』、36-5:14-22、
明治書院.
- Minsky, Marvin. (1987). *The Society of Mind*. Simon & Schuster, New York. (安西祐
一郎(訳) (1990) 『心の社会』、産業図書株式会社)
- 村越正則 (2004) 『常識として知っておきたい「ものの数え方」』、PHP 研究所.
- 森 睦彦 (1999) 『数のつく日本語辞典』、東京堂出版.
- 森田良行 (2006) 「「三匹の子豚がいる」か「子豚が三匹いる」か」『日本語の類義表現辞典』、
東京堂出版.
- 孟 繁杰 (2012) 『現代漢語形状量詞的來源及其演變研究』、政大出版社.
- 村上 毅 (2007) 「我が国蚕糸業の歴史と近代化過程における役割」『繊維学会誌』63:8、209
-212.
- 中川裕三 (1995) 「中国語における動物の類別について：“只” “匹” “头” のカテゴリーを
中心に」『中国 21』、6 : 255-272、愛知大学現代中国学会編.
- 中川裕三 (2006) 「方言から見る漢語：漢語方言におけるブタの類別詞について」『中国 21』
25 : 185-200、愛知大学現代中国学会編.
- 日本の常識研究会編 (2005) 『そこんとこ何というか辞典一物の数え方・物の名前』、ベス
トセラーズ.
- 太田辰夫 (1959) 「量詞の歴史」『中国語学』90 : 10-16、9、日本中国語学会.

- 大河内康憲（1985）「量詞の個体化機能」『中国語学』323：1-13、日本中国語学会。
- Pinker, Steven. (2007). *The Language Instinct: How The Mind Creates Language*. Harper Perennial Modern Classics, New York. （洪蘭(譯) (2015) 『語言本能』、商周出版)
- 清水康行（1999）「日本語の数表現」『言語』28、10:42-47.
- 西光義弘（2004）「類別詞と認知様式の相関に関する理論的考察」『類別詞の対照』シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第3巻、くろしお出版、23-38.
- 杉村博文（2017）「イヌとワンピースと好漢」『現代中国語のシンタクス』、日中言語文化出版社、46-59.
- 辻 幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』、研究社 [増訂版（2013）『新編認知言語学キーワード事典』研究社] .
- 内田伸子&今井むつみ（1996）「幼児期における助数詞の獲得過程：生物カテゴリーの形成と助数詞付与ルールの獲得」『教育心理学研究』44、2：126-135、日本教育心理学会。
- 武 柏索ほか（1995）『中国語量詞500』、中華書店。
- 吳 麗等(編著)（2016）『日語數量詞大全』、外語教學與研究出版社。
- 山川正光（2004）『絵でみるモノの数え方辞典』、誠文堂新光堂。
- 山梨正明（1992）『推論と照応』、くろしお出版。
- 山梨正明（1994）『比喩と理解』、東京大学出版会。
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』、くろしお出版。
- 山梨正明（2004）『ことばの認知空間』、開拓社。
- 山梨正明（2012）『認知意味論研究』、研究社。
- 山梨正明（2016）『自然論理と日常言語』、ひつじ書房。
- 米澤 優（2004）「“人間”に関わる類別詞：「者」と「名」を中心に」『類別詞の対照』シリーズ言語対照＜外から見る日本語＞第3巻、くろしお出版、95-111.